

772

173

陸軍大佐 舟橋 茂著

作戰要務令と戦史の對照研究

東京 成武堂



0057135000

0057135-000

772-173

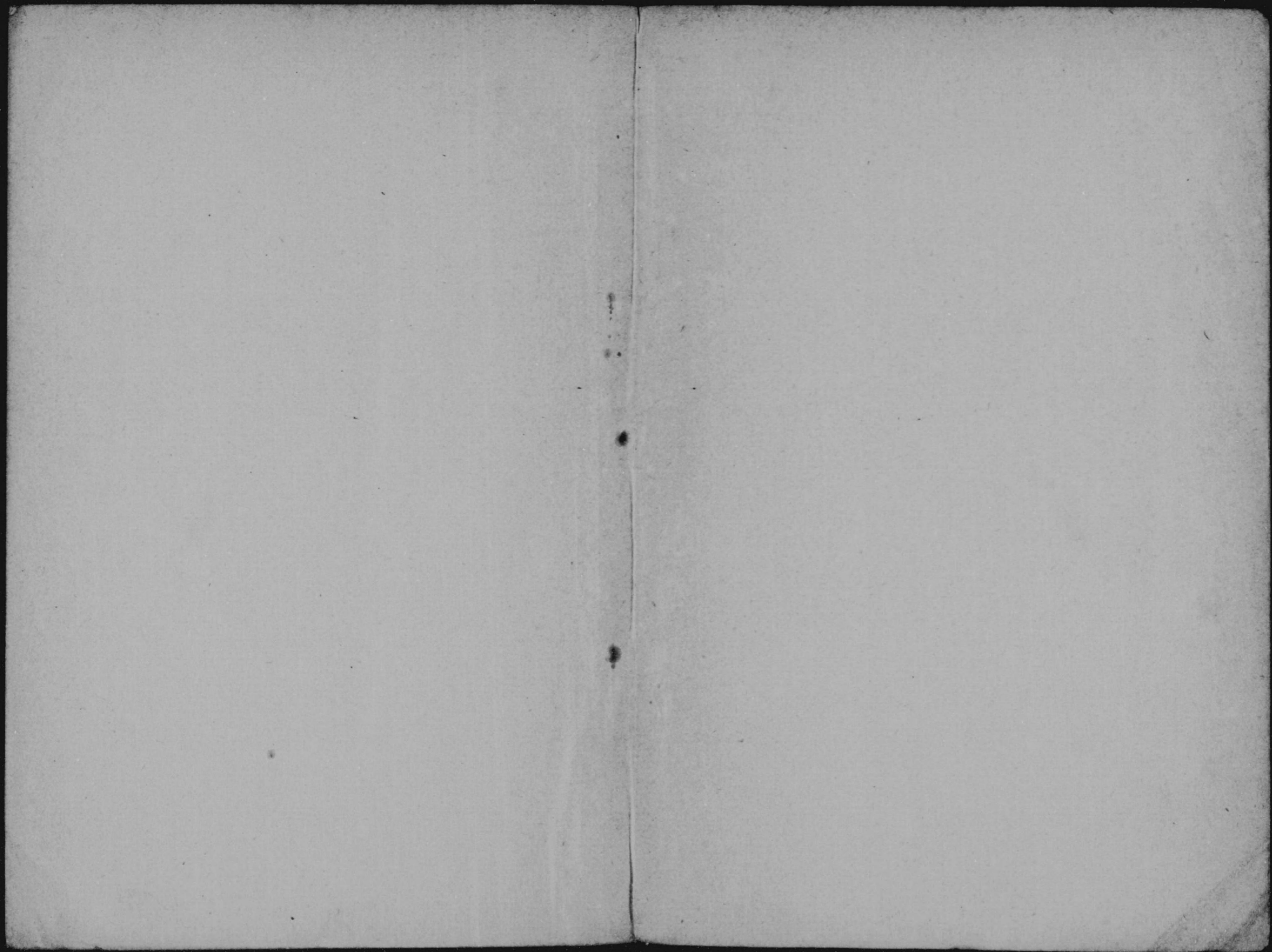
作戰要務令と戦史の對照研究

舟橋茂・著

成武堂

昭15

AJF



陸軍大佐 舟橋 茂 著

作戰要務令と戦史の對照研究



東京 成武堂

772
X 173

緒言

由來戰史は軍談のやうに平易通俗的に書いてないので寸暇を利用し何事をさし置きても一寸讀むと云ふのは趣味の人かさもなくば特別に研究熱の強い人が耽讀する位で兎角書棚に積ん讀にされ易いのが通常である。

とは謂へ川中島軍記とか桶狭間合戦とか云へば三歳の兒童でも喜んで其の繪を視ては謙信の武者振りを賞め信長の勇舉を慕ひ自然に馴らす尙武心これぞ人世鬪争心の芽であり若莖であり育つれば國防信念となり盡忠報國の勇士となるのである。

作戦要務令は制定せられ歩、砲操典は輓近の趨勢に適應して著々改正せらる其の條章字句は新に明示して指揮官以下の訓練、軍隊練成の準據を示されたるが偕てどこから此の原則は生れたるか何故にかくせねばならぬかの疑ひは精讀熟讀するに従ひ自然と沸いて來るのである。

此の疑問を解き釋然として其の理解を深刻ならしむるには是非共戰史を繙き戰時に於け

る軍の状況と實戦裡に在る將兵の心境を推斷して平時の頭では考へ及ばぬことでも實際に於て其の經驗は將來の變化を洞察し克く原則を活用し古今の名將武將が起死回生の斷を以て敗を轉じて捷を獲たるを知らねばならぬ。

本書は茲に鑑み極めて、通俗平易に、先づ日露、歐洲大戰の戦闘經過の概要を述べ遭遇戦、陣地攻撃、防禦の三大別とし苟も軍事にたづさわるもの知らざるものなき程度の戦例を引證記述し一々其の戦闘に於ける全般に互り作、要、令、の、原、則、と、對、照、比、較、し、て、斷、案、を、下、し、尙ほ學ぶべき教訓、戒むべき缺點を遺憾なく指摘して後輩の戒めとした只だ今次事變の戦例は多く秘にして未だ發表せられず且編纂の都合上先づ遭遇戦につき解説し他は後日の機を待つことにした。

昭和十五年九月滿洲事變記念日

著 者 識

作戰要務令と戦史の對照研究

目 次

作戰要務の原則と戦史の對照研究に就て……………一

第一篇 日露戦役の梗概……………七

第一章 戦争の起因……………七

第二章 戦地一般の地勢概要……………一

第三章 兩國軍の作戰方針……………二

 第一節 露 軍……………二

 第二節 日本軍……………三

第四章 兩軍作戰經過の概要……………四

 第一節 遼陽會戦前の情況……………四

 第二節 第一軍(黒木軍)の上陸と鴨綠江の渡河戦……………五

 第三節 第二軍(奥軍)の出征……………六

目 次……………一

第四節 南山の戦闘.....一七

第五節 滿洲軍の北進.....一八

第六節 遼陽の會戰.....二一

第七節 沙河會戰(初めて露軍が攻撃し來れる戦闘).....二三

第八節 沙河の對陣及黑溝臺の會戰.....二五

第九節 旅順攻略.....二六

第十節 奉天會戰.....二八

第十一節 支作戦の状況(北韓及樺太の攻略).....三一

第十二節 講和.....三二

第二篇 第一次世界大戰の梗概

第一章 戦争の起因.....三四

第二章 大戰勃發前後英の態度と參戰.....三八

第三章 西方戰場に於ける獨、佛兩軍の作戰計畫の概要.....三九

 第一節 獨軍作戰計畫の概要.....三九

 第二節 佛軍作戰計畫の概要.....四一

第四章 東方戰場に於ける露、獨、埃軍の作戰計畫.....四四

 第一節 露軍の作戰計畫と集中.....四四

第二節 獨、埃軍の作戰計畫と配備.....四五

第五章 兩軍主要戦闘經過の概要.....四七

第一節 西方戰場(獨對佛、英)の第一次會戰.....四七

第二節 東方戰場に於ける「ダンネンベルヒ」附近の會戰.....五二

第三節 西方戰場「マルヌ」の會戰(獨軍の敗退).....五五

第六章 獨、埃軍對塞爾比軍作戰.....五七

第一節 獨埃軍指揮官「マッケンゼン」將軍の新規創意の「ドナウ」河の渡河作戰.....五七

第七章 西部戦線獨、佛戰場.....六〇

第一節 「ヴェルダン」攻防戰.....六〇

第二節 「シヤムパーニュ」の秋季攻勢.....六三

第八章 大戰の終結.....六六

第三篇 遭遇戰.....六八

第一章 遭遇戰に關する原則解説.....六八

其の一 遭遇戰の史的觀察.....六八

其の二 原則の解説.....七一

(遭遇の要訣、我が豫期を以て敵の不期に當る、敵情不明なるを常態とする、師團長の處置、搜索及掩護、前衛の行動、戦闘指導の要領、側面より不意に攻撃を受けたる場合各級指揮官の處置、不期戰に於

ける戦闘指導要領、敵が我先じて戦闘準備を完了すべき場合、警戒部隊が敵と接觸後始めて敵の防禦し在るを明らかにしたる場合、師團命令の主要事項、戦車の用途、歩、戦の直接協同、工兵の用途、消毒部隊の用途、彈藥補充、歩、砲の攻撃要領、撤毒地域の搜索と制毒、歩、戦、砲協同の要訣、飛行機の地上戦闘直協戦闘等)

第二章 東普「ゲンビンネン」附近の遭遇戦

其の一 獨、露兩軍の編成及裝備

其の二 東普地方の地形及防備の概要

其の三 戦闘前一般の状況

其の四 「ゲンビンネン」附近の會戦

(露軍の行動概要、獨軍の行動概要)

其の五 「ゲンビンネン」會戦に於ける獨軍團の積極的機動と露軍惨敗

第三章 「ゲンビンネン」附近の會戦より得たる教訓と原則との對照

其の一 露第二十八師團の戦闘行動に就て

(隨意退却せる敵に對する追撃指揮官の新企圖、師團の統帥適確ならず各隊の行動遲疑す、翼側師團は常に外翼に縦長區分の保持を必要とす、敵の側背攻撃と搜索の考慮不十分にして敗退す、戦況不利なる時徒らに隣接部隊の協力を求め自ら戦勢挽回の努力を必要とす、不期遭遇戦に於ける師團長の處置適確ならず、近時の戦闘趨勢より翼側部隊の指揮官は卓絶なるを要す、攻者は飽くまで其の利益を十分發揮して自動的たること、獨軍の豫期に對し露軍は不期、戦はずして勝敗明らかかり、作戰命令の傳達は迅速、時機に適合するを要す、指揮官の位置の選定、隣接部隊併に歩、砲協同の適否は勝敗に重大なる影響あり、火器の威力を無視せる攻撃は遭遇戦と雖も其の奏功至難なり)

其の二 「ゲンビンネン」會戦後に於ける露第一軍の途巡運疑の情態に就て……………一三〇
 其の三 「ゲンビンネン」會戦後に於ける獨、露兩軍司令官の決心と心境に就て……………一三一

第四章 第五師團五里臺子附近の戦闘(日露役三七、一〇、一〇)

其の一 戦闘前の状況……………一四〇

其の二 五里臺子附近の戦闘……………一四一

(第五師團の前進部署、師團長の情況判斷、前衛の獨力攻撃戦闘(我先じて展開しある寡弱の敵に對する)、師團の左側支隊の行動と情況判斷、獨立騎兵隊の行動、師團長の決意と攻撃部署)

其の三 露軍状況の概要……………一五三

其の四 本戦闘の見地より得たる教訓と原則との對照……………一五四

(前衛の獨力攻撃に就て、其の攻撃部署、前衛砲兵の使用法、左側支隊の戦闘行動、師團長の處置に就て、諸隊の出發準備、騎兵聯隊の行動、戦場内の要點奪取と其の方法、今次歐洲戦の獨軍の電撃作戦に就て)

第五章 「タンネンベルヒ」會戦(獨軍、露軍を各個撃破)

其の一 開戦前の状況……………一六五

(軍司令官の更迭と「ヒンデンブルグ」將軍の統帥、「ヒ」司令官到着當時彼我兩軍の状況、新作戦計畫と其の處置)

其の二 「タンネンベルヒ」會戦經過の概要……………一六九

(露軍の行動、獨軍の行動、獨、露軍の決戦)

其の三 本會戰より得たる教訓と原則對照……………一七三
 (戰捷の要訣、寡兵以て衆敵を撃滅す、指揮官の信念と徳性は部下を奮起せしむ、神速なる機動作戦は勝を得る要道なり)

第六章 黑溝臺附近の會戰(日露役三八、一、二六―二九の四日間)……………一七六

其の一 開戦前の状況と戦闘經過の概要……………一七六

(立見軍の臨時編成と彼我兩軍の激戦)

其の二 立見第八師團の戦闘……………一七九

(會戰第一日(優勢なる敵に對する苦戦)、會戰第二日以降の戦況の梗概(慘烈を極めし死戦と攻勢))

其の三 本會戰の教訓と原則との對照……………一九七

(豫期する遭遇戦に於て敵情不明の場合の戦闘指導、平坦地に於ける遭遇戦の攻撃前進に就て、師團の攻撃部署と其の砲兵の配置に就て、敵砲弾下に於て歩兵部隊の前進、上級指揮官の堅確不動の決意は不利なる戦勢を挽回す)

第四篇 陣地攻撃……………二〇三

第一章 陣地攻撃に關する原則解説……………二〇三

其の一 攻撃準備……………二〇三

其の二 攻撃方式……………二一七

其の三 攻撃の實施……………二二〇

其の四 陣内攻撃……………二二四

第二章 奉天會戰第三師團干洪屯附近の陣地攻撃(三八、三、六―七日)……………二二六

其の一 戦前一般の形勢……………二二六

其の二 攻撃戦闘……………二二九

其の三 左翼隊の戦闘經過……………二三五

其の四 露軍戦闘の概要……………二四八

其の五 第三師團の干洪屯附近攻撃の價値……………二五一

其の六 本戦闘より得たる教訓と原則の對照……………二五二

第三章 太白山、老左山の陣地攻撃(三七、七、二六―二七日、旅順要塞前進陣地の一部)……………二六一

其の一 第十一師團戦闘前の情況……………二六一

其の二 左翼隊(神尾旅團)の攻撃戦闘……………二六五

其の三 本戦闘より得たる教訓と原則の對照……………二七三

第四章 上海附近の陣地攻撃 附、廟巷附近の戦闘と障碍爆破(昭七、二、二二)……………二七九

其の一 上海附近陣地戦經過の概要……………二八〇

其の二 廟巷附近の障碍爆破……………二八六

其の三 本戦闘より得たる教訓と原則の對照……………二九〇

第五章 夜間攻撃……………二九四

其の一 第十師團の三塊石附近の夜襲(三七、一〇、一一)……………二九四

第五篇 防禦

第一章 防禦に關する原則解説

- 其の一 防禦の新意義……………三二一
- 其の二 防禦主要原則の摘要……………三二二
- 其の三 防禦陣地及陣地占領の著意と各兵火力配置……………三二三

第二章 南山に於ける露軍の防禦戰(三七、五、二六)

- 其の一 戰開前の狀況……………三三四
- 其の二 戰開の狀況……………三三七
- 其の三 戰開の結果竝に教訓と原則對照……………三四三

第六篇 歐洲大戰竝に滿洲事變の一端より得たる教訓竝に戰例

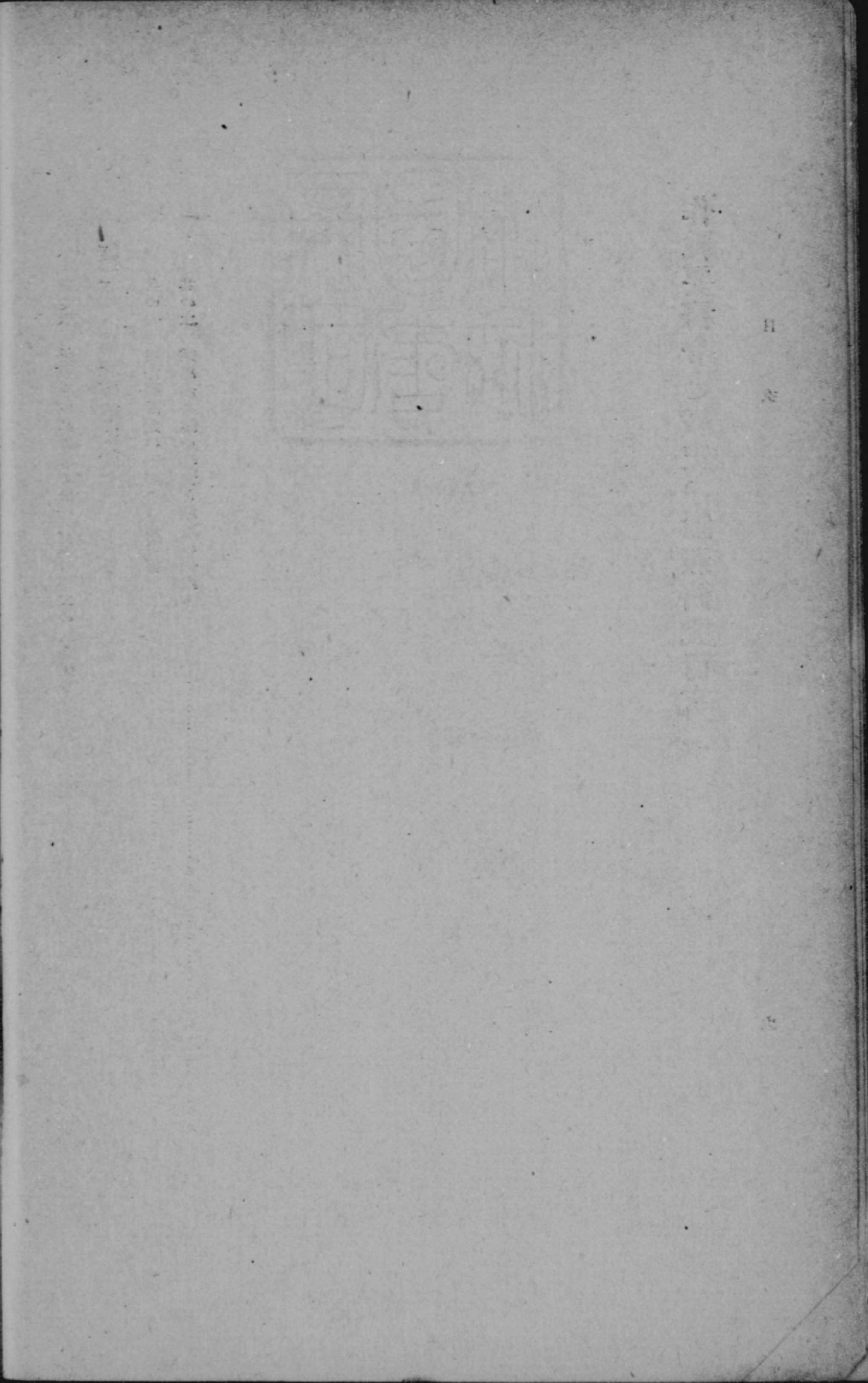
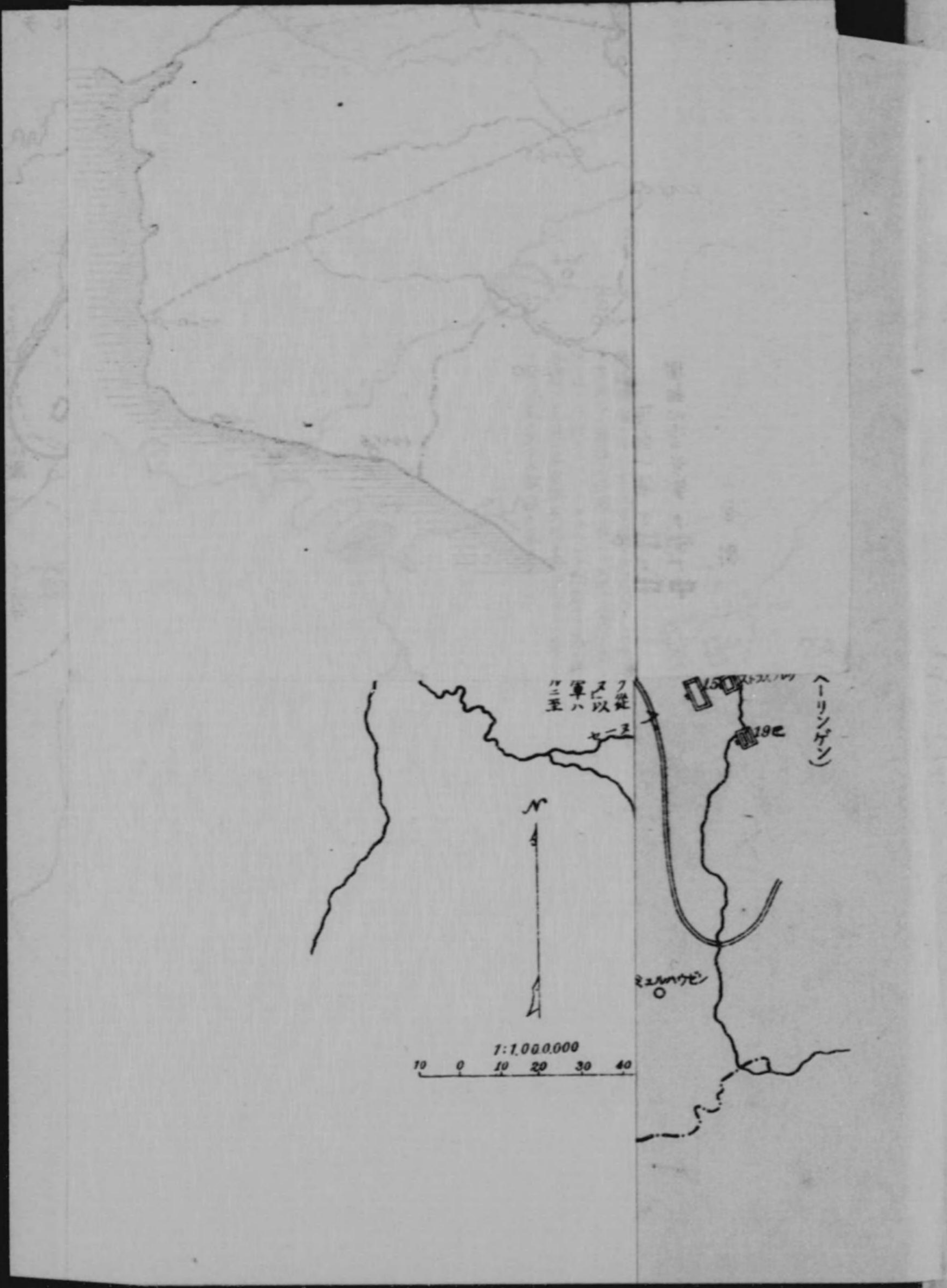
第一章 歐洲大戰に就て

- 其の一 決心堅確にして死守奮闘したる結果能く優勢なる敵を拒止したる戰例……………三四八
- 其の二 中央突破の攻撃重點を適當に選定して成功す……………三五〇
- 其の三 攻撃點を防者が其の兵力を撤退したる部分に選定し成功せし例……………三五一
- 其の四 攻者が我が火力の集中容易なるべき敵配備の突角部に攻撃重點を指向して突破を遂行す……………三五二
- 其の五 騎兵の快速と機械化の利用に依り敵の側背を脅威せしめ攻撃に成功せし例……………三五三

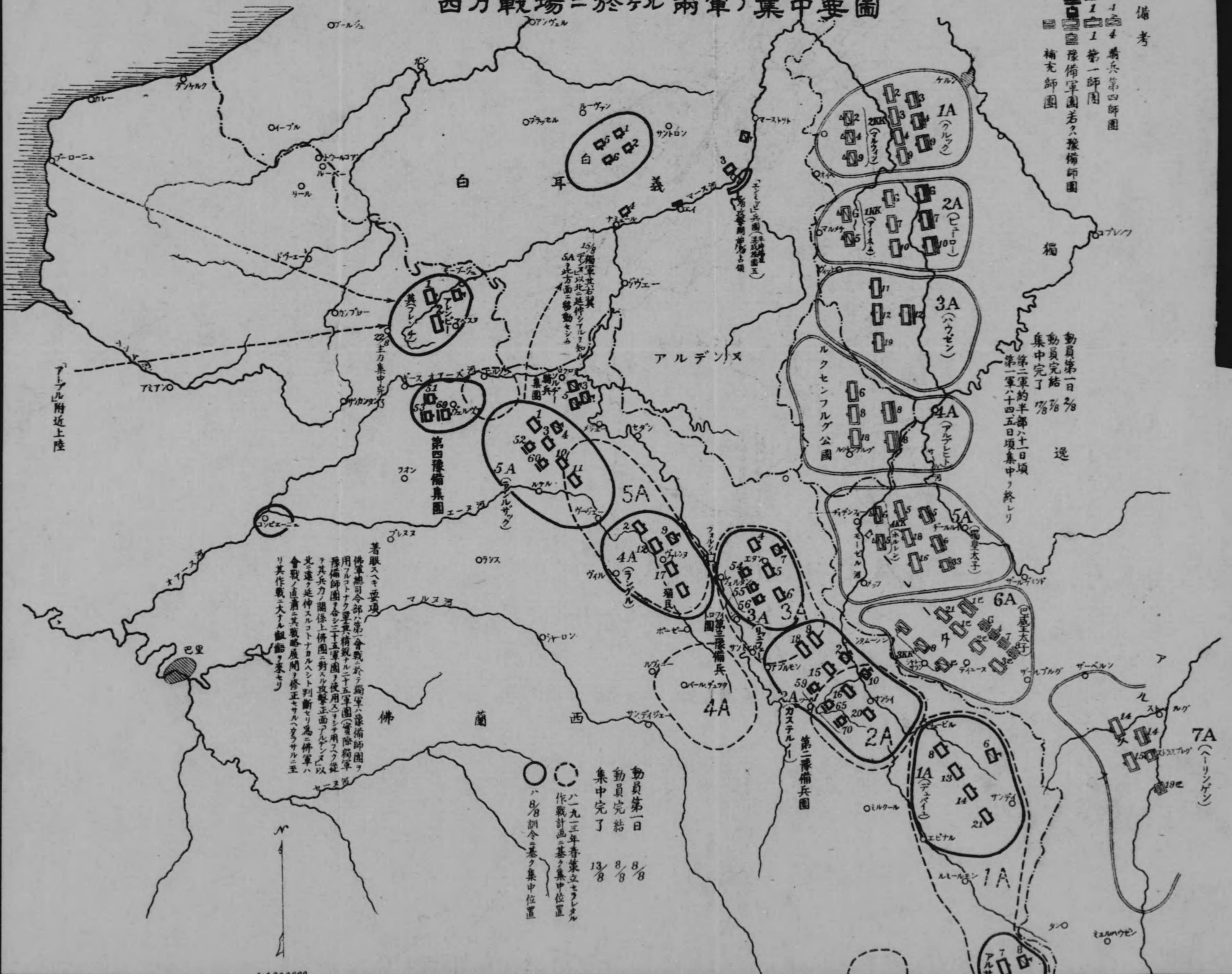
第二章 滿洲事變に就て

- 其の六 迅速果敢に追撃を執行し敵の第二の新企圖を挫折せしめたる獨軍の猛撃……………三五五
- 其の一 山海關附近の戰開より知り得たる支那精銳軍の防禦力……………三五六
- 其の二 乘馬歩兵隊の特性と戰開の一端……………三五九

作戰要務令と戰史の對照研究目次 終



西方戰場ニ於ケル兩軍ノ集中要圖

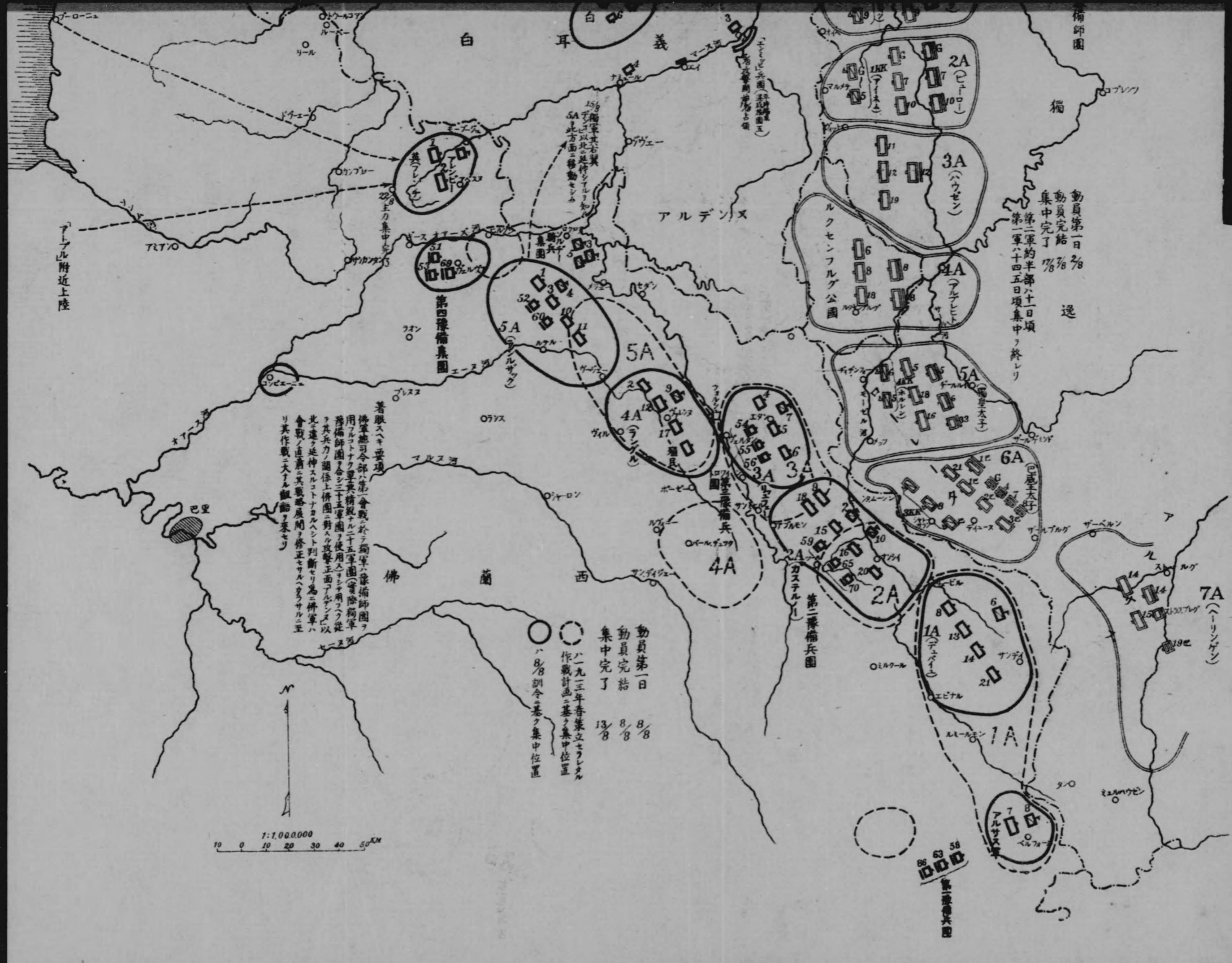


備考
 白 第一師團
 白 豫備軍團若くは豫備師團
 白 補充師團

動員第一日
 集中完了 8/8
 第二軍約半部六日頃
 第一軍六四五日頃集中終了終レリ

著眼すべき要項
 機軍總司令部第一會戰ニ於テ獨軍ハ豫備師團ヲ
 用ルコトナク其精銳ナル二十五軍團(實際獨軍)
 豫備師團又ハ三十五軍團ヲ使用スルヲ用スルヲ從
 テ其兵力ノ關係上併合ニ對スル攻撃正面アルヲ以
 北ニ連テ延伸スルコトナルハシト判斷セリ是ニ併軍ハ
 會戰ノ直前ニ其戰略展開ヲ修正セサルヘシタルニ至
 リ其作戰ニ大ナル阻礙ヲ來セリ

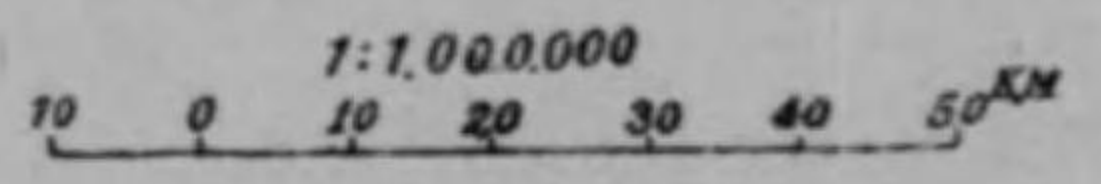
○ 一九一三年春策立セラレタル
 作戰計畫ニ基ク集中位置
 ○ 八/八訓令ニ基ク集中位置



動員第一日 2/8
 動員完了 7/8
 集中完了 17/8
 第二軍約半部八十一日頃
 第一軍六十四五日頃集中ヲ終レリ

著眼スヘキ要項
 佛軍總司令部ハ第一會戰ニ於テ獨軍六像備師團ヲ
 用フルコトナク軍兵精銳ナル二十五軍團(實際獨軍
 備師團ヲ含シテ三十五軍團)ヲ使用スルヲ用フニ從
 テ其兵力ノ關係上佛團ニ對スル攻撃正面アルデンヌ以
 北ニ連テ延伸スルコトナラハシト判断セリ爲ニ佛軍ハ
 會戰ノ直前ニ兵戰隊展開ヲ修正セサルヘカラスサルニ至
 リ其作戰ニ大ナル影響ヲ及セリ

動員第一日 8/8
 動員完了 8/8
 集中完了 13/8
 〇一九三八年春策定セラレタル
 作戰計畫ニ基テ集中位置
 〇八/八訓令ニ基テ集中位置



作戰要務令と戦史の對照研究

作戰要務の原則と戦史の對照研究に就て

一、歴史は事實にして戦史は歴史の一部なり今日吾人が戰略、戰術の原則となすもの及び軍の裝備、編制、築城等戰爭に關する萬般のもの多く其の源を此所に發す。

熟々戦史により其の戦跡を觀察するに戦鬪の勝敗に重大の關係を有するものは統帥者の人格、能力、軍隊の精粗、編制、裝備、戦法、地形、天候、時機等は勿論人類天性の自然的結果より生ずる懈怠、豫期せざりし種々の素因等に依るものにして近時の戰爭が國家總力戦となり軍備力、經濟力、科學力、外交力、國民精神力、同體力、同教養力、物資、原料、輸送力等の綜合的の力即ち國力が作戰遂行上に重大緊密なる關係を生ずるに至り此等諸要素が彼我相連鎖して勝敗の決を與ふる事となれり。

今次支那事變に過去四箇年に互り蔣政權を核心とする支那軍は滿洲事變以來抗日救國、失地回復を旗幟とし公然國民に打倒日本を叫び舉國一致の體勢に統合し軍備二百五十萬の陸軍は獨逸軍再建者と稱する「フオン、ゼークト」將軍に囑して著々整理改善し殊に英、佛、「ソ」其の他歐米列強より資力



を盡くして機械化、科學の諸兵器を購入し日軍來れと豪語し毎日排日驕傲の限りを盡くし遂に北京郊外一文字山附近に火蓋を切り皇軍の威力支那全土の過半を席捲して今や著々東亞の新建設に邁進し更に眼を遠く歐洲に放てば端を波蘭の進入に發してより英、佛の聯合軍は獨逸軍に對し宣戰を布告し獨軍の猛進は隣接の各小弱國を併吞し英、佛軍を白國フランドル平野に誘致して獨特の決戰を行ひ遂に殲滅的大打撃を與へ他面電光石火の進撃は人跡未踏と稱する大森林を突破し「マヂノ」の堅塞を撃破して佛國內に怒濤の如く「ナミユール」「ムーズ」河、「セダン」の線を破り疾風破竹の勢にて「ランス」より「ソナム」河に沿ひて「ドヴァ」海峡に殺到し敵の背後を襲ふと同時に英、佛間の連絡を絶ち遂に六月十四日首都巴里は陥落し同十七日「ベタン」首相は對獨停戰を申入れ二十日休戰は締結せられたり吾人が其の作戰の跡を顧みて大に學ぶべき點多々あるべきも要は獨逸が過去二十年の臥薪嘗膽殊に「ヒトラ」總統が政權掌握以來舉國一致急速に戰時體勢の國防國家を建設し重工業の驚異的なる兵器生産力、統制經濟の徹底、深刻徹底せる軍事訓練の結果にして佛首相「ベタン」元帥が六月二十日「ラヂオ」を通じて佛軍慘敗の原因を左記項目の如く其の自覺を説き國民に將來の奮起を促したる事は全く他山の石として吾人の信念を新たにするを要する所以ならんか。

- (イ)、「ソナム」、「エース」戰線が餘りに呆氣なく敗退した。
- (ロ)、「伊太利」が參戰した。

(ハ)、「亞米利加」が中立を維持して積極的な援助に乗り出さない。

(ニ)、「人的、物的資源」の不足就中航空兵力が獨軍の六分の一に過ぎず。

尙ほ最後に「ベタン」元帥は涙を揮つて悲痛な訓示をなし其の敗因を愬へて曰く

一九一八年の戰勝(第一次歐洲戰)以來「フランス」國民の間には犠牲の精神が消へ失せ享樂的氣分が充滿し來り真劍な努力がみられなかつた之れこそ「フランス」が今日の如き悲惨な敗北を喫した最大の原因であると結論した。

如何に國力の強弱は廣範圍の各要素が完全なる組織と堅確不拔なる團結より成立しあるにあらざれば常に慘憺たる結果を招來するかを窺知し得る實證なり。

二、戰史研究の目的は明日の戰爭に備へ得る資料を捉へ今日の典令に明示せらるる戰術上の諸原則の因て來れる根本の意義を體得し併せて軍事諸般の諸施設を推知し確たる信念と斷乎たる決意を以て崇高なる指揮權を行使し得る自己の精神修養に多大の効果を獲得するに在り。

即ち戰敗の應報、衰頹の跡を見ては報國忠誠の心を涵養發揮し得べく又以て之により實戰場裡に於て不慮の事變發生するも自若として適應の處置を講じ得る能力を養成するの援助たり得べし。

三、戰史は何を擇んで研究するを適當とするか。

固より制限の要なし然れども心的方面に於ける研究は古今を通じて之を行ひ得べく而して戰略、戰

術殊に裝備、科學等に付き實用的運用に至りては成るべく最近の戰役のものを最も適當とするは言を俟たざる所なり。

但し茲に吾人の考慮すべきことは最近に於ける支那事變の各種戰鬪或は今次の第二次歐洲戰現在の作戰等は軍の威力たる科學、裝備、兵器等に關する限り最も興味あり又教訓とすべき事多からんも如何にせん何れも現在作戰遂行途上に在りて事軍機に觸れ防諜上其の實想を詳細に知るを得ず。古今を通じ東西に互りて戰略、戰術の根本に至りては往昔と大なる變化あるなし只だ一般の情勢と各種の關係を考慮し敵の意表に出で機を制し勝を得るの要道は飽くまで旺盛なる企圖心と追隨を許さざる創意と神速なる機動に依り敵に臨み常に主動の位置に立つは千古不磨の原則たり。

四、我が國の作戰要務令、歩、砲其の他の操典範等は何れも最近各種の戰役に於て現時列強の裝備に鑑み我が國獨特の戰法を垂示せられ儘かに新時代に沿ひたる新戰鬪指揮上の原則を新に示されたるも其の根本意義に於ては日露戰役の各種體驗に基く最も尊き體驗は嚴然として其の規を一にして變ずることなし。

素より日露戰役史には戰爭の機械化と科學的施設とを加味する點に於て第一次歐洲大戰又は現支那事變、第二次歐戰に遠く及ばざる所多きは言を俟たず然れども我が國未曾有の統帥、戰爭指導の手法、手段等は人情、風俗を異にする歐洲人の夫れと趣を異にするもの亦尠ならず此等を知悉するにあらざれば我が典令の精神に觸るること又難きの感あり加之既に述べたる如く戰史の研究には事實の正確なるを尊ぶべく此の方面に於ても現在此の戰役に參加せし軍人生存し有るを以て其の眞想を知悉すること容易なり。

況んや帝國が興廢を一戰に委かせ世界最強と自他共に誇る露國と戦ひ連戰連勝以て光輝ある今日を作りたる眞に國難に處して舉國一體其の十年前の三國干涉に依る屈辱を雪ぎ彼等の迷夢を打破し得たる戰史なればなり。

然れども時代は刻々として兵器の進歩、科學の推移、戰法の變遷、立體的攻防等に著しき變化を來し往時と其の趣きを異にする所は是非共先づ前述の理由に依り第一次歐戰、滿洲事變併に今次事變の發表範圍に於て攻、防の跡を研め時運の推進に一步も遅れざるの著意は肝要なり。

五、獨逸は第一次大戰迄は専ら日露の役兩軍の作戰研究に没頭しありしも他國の戰史は自國軍に採用するには價值大ならざるものとして爾來七十年戰(普佛戰今より約七十年前)を詳細に研究して獨逸全軍の戰鬪主義を同一軌道に進め一方戰勝の榮譽に伴ふ國民の義務責任を知らしめ其の戰史を編纂するに當りては國粹的教化の本領として第一次歐戰に敢然として交戦四年遂に内部的よりして戰敗の辱を受けしと雖而かも此の間敵をして足一步も自國內に入らしめざりし所以の者は平素に於ける軍事の研究而かも此の研究が戰史の基礎とし各種の方面に互り用意周到なる準備と訓練の結果なり

と謂ひ得べし。
 徒らに己の父祖が血と肉を以て尊き教訓を垂示せし國家戦争を忘れて新を好み然かも適切なる資料を捕捉し得ずして他國の教訓を他山の石とするは勿論可なるも形式的に鵜呑みせんとするは吾人の採らざる所なり。

第一篇 日露戦役の梗概

第一章 戦争の起因

一、露國は多年の宿望として東亞に利權を獲得し延いて滿洲を併呑せんとの野望を懷き日本は維新以來東洋平和の保全を使命とし特に自國の存立上朝鮮半島を他國の侵略に委ねしめざることは上古神功皇后以來の國是であつた此の兩者相容れぬ國策の衝突が日露戦の遠因である。

一たび地圖を繙けば朝鮮半島は我が本土の腹部を制し萬一之が他國の侵略に歸したならば我が國が直ちに國防上危険に瀕すべきは一見明瞭の事實である。

日清戦役は之が爲に起り其の結果辛じて韓國の獨立を保全し且戦争の賠償の意味を以て遼東半島を我が國に讓渡したのである。

然るに國策相容れぬ露國は日本が遼東半島を領有することは東洋永遠の平和に害ありとし直に獨佛兩國と結びて聯合し三國艦隊を以て我を脅威し之を還附せしむると共に竊かに清國と密約を結んで滿洲の利權を獨占し更に進んで其の勢力を韓國に扶植せんと總ゆる努力を傾注した我が邦上下一致して臥薪嘗膽の覺悟を決したのは此の時からだ。

斯くて露國は著々其の地歩を進め明治三十一年三月には遂に清國を脅して旅順及大連（ダルニーと

稱す)を租借し且此の二港に通ずる鐵道敷設の權利を獲得して事實上滿洲を占領し更に翌三十二年には朝鮮南岸馬山浦(釜山の西側)の占領を企て遂に三十三年栗九味(馬山浦南方約四キロ)を租借するに至る。

偶々是年支那に起れる團匪の亂所謂北清事變は一層彼の野望を遂げしむるに絶好の機會となり即ち露國は鐵道掩護に名を藉り必要以上の大兵を發して名實共に滿洲を占領し匪徒平定の後に於ても全然撤兵の色なきのみならず却て極東の軍備を充實し利權の壟斷に汲々たる有様だつた。

二、我が國の對露方針と日英同盟

三十五年十月以來露國は清國に對し滿洲還附條約により當然撤兵すべきものなるに係らず斷乎として之を實施せざるのみならず却て其の代償を要求して我意を通さんとし加ふるに鴨綠江沿岸に伐木會社を起し電線を架設し龍巖浦(朝鮮)の租借を要請し他面旅順東洋艦隊は大規模の演習を黃海に行ひ浦潮の砲臺も亦實彈射撃を試み暗に我が邦を威嚇し暴若無人の觀を呈した。

三十六年六月内閣及御前會議を開き我が國權の保全及東洋平和の爲速かに露國と交渉し滿、韓兩地に於て相接觸する日露兩國の利益を調理し他日兩國衝突の原因を一掃するに決し先づ清國に對し露の要求を拒絶せしめしも威伏せられある清國は如何ともする能はず。

之に於て我が國は直接露國と交渉するに決し八月談判の基礎條件(主として東亞の安定として清、

韓の獨立保全の尊重と撤兵、鐵道等)を提出せしも荏苒して十月に至り主として滿、韓を自己の勢力範圍とし我が邦に一步も韓國內の軍事上施設を許さざる等暴戾なる意志を表明して頑として讓歩せず其の後數次の交渉も徹頭徹尾之を峻拒し弱小日本何をか爲さん荒鷲の一蹴は日本の山河を蹴飛ばす勢を示して回答せざるのみならず全く妥協の望なく日に海陸の兵備を整へ有力なる軍艦は擧げて東洋に派遣(約十六隻七萬四千噸)し何時でも來いと嘯いたのである。

英米又之の情況を見て我に做つて露に對し其の不信を責めたが何等事實誠意の認むべきものはなかつた。

斯くの如くして日、英兩國の利害漸次一致するに及び三十五年一月三十日英京にて日英同盟は調印せらるることになつた。

そこで露國も幾分の讓歩をせざるを得なくなつたので前述の如く一時は撤兵を聲明したが結局何等の實行を見る事が出来ぬ。

此の暴慢不信なる露國の態度に對し我が朝野の輿論は大に沸騰し三國干涉以來忍びし鬱憤は一時に爆發せんとする狀況であつたが然し我が政府當局は當時の國情に鑑み尙隱忍して飽くまでも平和に事を解決せんと欲したのである。

三、彼我兵力の餘りにも懸隔ある實狀

露國の陸軍は曾て歐洲の天地を席捲せる「ナポレオン」一世の大軍を壊滅せしめて以來其の實力の測り知るべからざるを示し殊に日露開戦當初の露國陸軍は

野戦部隊歩兵六十五師團、騎兵百二十聯隊、砲兵六十六旅團(約七百大隊)

其の内極東方面に在るもの

歩兵約百二十大隊、騎兵九十八中隊、砲兵五十中隊にして尙ほ續々西比利鐵道にて歐露より輸送中なり。

之に對し我が國は三國干涉の屈辱を受けて以來東亞の天地益々多事ならんとするに鑑み日清戦役直後より明治三十六年に互り全國民の後援に依り軍備の一大擴張を遂行し其の陸軍は概ね

十三師團即ち歩兵百五十六大隊、騎兵五十四中隊、砲兵百六中隊

で露軍に比すれば尙ほ其の十分の一に過ぎなかつた。

陸軍に就てのみ觀るも斯様に彼我の懸隔があるので當時露國と戦つて日本が勝つなどとは世界列國の夢想だにしなかつたことは勿論我が軍事當局に於ても先づ五分五分の戦ひであつて確に勝てるとの信念は持つて居なかつた。

そこで前述の如く屢々折衝を重ね遂にはせめて朝鮮に對してだけでも露國勢力の侵入を防がんとし忍び得べき最大限の大々の讓歩條件を提供したが更に應じない。

序に海軍の比較は左の通りである。

露國 太平洋艦隊(七十二隻十九萬噸)、「バルチック」艦隊(二十八萬噸)合計四十七萬噸外に黒海、

裏海の二艦隊あり。

日本 軍艦總數五十五隻(二十六萬噸)其他商船等の利用し得べきものを加へ總計約四十萬噸。

以上の如き情勢となり外交は全く手の出しやうなく一刻を曠しうすればする程我の不利益に陥ること明瞭であるので遂に三十七年二月六日の第十六回目の交渉を最後として遂に彼我の國交は斷絶するに至つた。

第二章 戦地一般の地勢概要

一、南滿洲地勢の骨幹を成形するは千山々脈及遼河とす即ち千山々脈は長白山脈の一部にして東北より西南に互り遼東半島の背稜となり之れより東西に數多の支脈を分岐す。

遼河も亦其の源を長春附近に發し數多の潮流を合し西南に流れて渤海灣に入る而して殆んど南滿鐵道の線を境とし其の以東は一帶の山地にして其の以西は遠く興安嶺に至る間一望千里の大平地たり。道路は南滿鐵道に沿ふ主街道の外遼河の兩側に數條の平行路あり又千山々脈を貫きて東西に通ずるものは昌城より寬甸を経て奉天に出づるもの安東より鳳凰城を経て遼陽に出づるもの及大孤山より

岫巖を経て海城に出づるものの三條を其の主なるものとす何れも施設不完全なるを以て忽ち天候の影響を被り通行困難となる特に山地を通過するものに於て然りとす故に彼我共に唯一の交通線と頼むべきは實に南滿鐵道なりとす（以上は日露戰役當時の南滿洲地方の地勢の概観にして今日滿洲國となりては交通殊に道路等は著しく進歩發達せられたるも尙ほ一度主要幹線路を離れたる地方は此の當時と大差なき現況なりと推斷す要圖參照）

第三章 兩國軍の作戰方針

第一節 露 軍

一、開戦前陸軍大臣「クロバトキン」大將は極東視察を兼ね我が國に來遊し其の結果自己觀察の結果を三十六年八月上奏し九月には關東州軍司令官「アレクセエフ」大將極東全軍の統一作戰を左の如く調製せり。

日本軍の上陸作戰に使用し得べき兵力は約十師團（約三師團は國內守備に殘置するならん）なるべく之に對し兵力の優勢を占むる爲に極東軍の外西比利亞より二師團、歐露より二軍團及「カザニ」軍の四師團を派遣するを要す。

開戦當初に在りては日本軍は我に比し殆んど二倍の優勢なるが故に必ずや進んで攻勢を執るべく

而して一般の形勢は我が戰略正面の右翼即ち南滿洲及遼東に主作戰を行ひ浦潮要塞に對しては單に示威運動を爲すに過ぎざらん。

將來の戰場は南滿洲及遼東半島なることを豫期し得べきを以て極東軍の主力を遼陽、海城附近に集中す。

日本軍は何れに向くにせよ露國艦隊の勢力に鑑み韓國沿岸に上陸するならん之に對し我は先づ鴨綠江附近に歩兵十八大隊、騎兵二十四中隊、砲七十門を次で海城、遼陽間に歩兵四十四大隊、騎兵四十中隊砲約百門を集中し得べし。

敵の前進拒止は鴨綠江の障礙、分水嶺の嶮に據り歩々の抵抗に因りて遲滯せしめ其の間に海城、遼陽に集中せる兵力を以て旅順に向ふ日本軍の側面を脅威し得べく斯くして持久せば歐露よりの輸送軍隊を以て日本軍を撃退し得ると判斷せり。

第二節 日本軍

一、露國陸軍の全兵力は戰時殆んど我れに七倍すと雖も其の極東に使用し得べきものは必ずしも著しく優勢ならざるべく殊に遠く東西に分離し歐洲列國の離合向背は豫め察知し得ざるも多くは局外中立の姿勢に在るべく且英との同盟ありて露國が若し歐洲の一國と連合せば英は之に應じて我に與み

するの情勢なるのみならず歐露の陸軍を極東に其の主力を移す事は列國對峙の關係上不可能なるを推斷し結局滿洲戰場に送り得る兵力は現在極東軍に加ふるに全歐軍の七分の二に制限せらる確たる推算(輸送力と給養難等)あり多くも全軍二十五萬内外なるべく之に對し我の海外に使用し得べき戰鬥員と殆んど相等しく少くも終始對等の兵力を以て戰ひ勝算必得の確信を得るに至れり。

故に速かに攻勢を採り到る處に敵を求めて之を撃滅せんとし而して全般の地形其の他の關係上滿洲方面を主作戰地と決定し先づ朝鮮に一軍を進めて敵を牽制せしむると共に主力を以て金州半島に上陸し一軍をして旅順を攻略せしめ爾後敵主力の集中を豫想する遼陽を第一作戰目標とし迅速なる行動に依り敵の後續兵團の來著に先だち各個に撃滅せんとするに在り。

我が海軍は進んで敵の太平洋艦隊を撃破し以て極東の制海權を獲得し我が輸送の完全を企圖せり。

第四章 兩軍作戰經過の概要 (要圖參照)

第一節 遼陽會戰前の情況

一、露軍

前述の作戰方針に基き一部を以て沿海州の守備に充て又約一師團を以て朝鮮に上陸すべき日本軍に對し之を拒止しつゝ遼陽附近に於ける主力軍(當時約二師團半)の集中を掩護せしめ別に二師團半を

以て其の拮据經營せる旅順要塞の守備に配置し尙ほ此の外後方の守備として五師團を有せり。

二、日本軍

劈頭先づ東郷司令長官の率ゆる我が聯合艦隊は佐世保を出航し敵艦隊の主力に對し奇襲的攻勢を採り二月八、九日仁川沖に於て敵艦を撃破し次で旅順沖に大勝を博し宣戰の大詔は恰も紀元節の前日たる二月十日を以て煥發せられ今や上村艦隊は浦潮を監視し東郷艦隊の主力は旅順を封鎖し玆に海上の自由を獲得し到る處に上陸作戰を遂行し得るに至り我が國民の感激と敵愾心とは彌が上にも昂つたのである。

第二節 第一軍(黒木軍)の上陸と鴨綠江の渡河戰

一、第一軍の編制に就て

第一軍即ち黒木軍は近衛、第二、第十二師團を基幹とし夫々諸部隊を以て編制し我が陸軍として初めて對露軍作戰の皮切りの重任を有するものにして其の戰鬪の勝敗は全陸軍の代表的となり全世界列強の環視の集注する最も重大なる價値を有すされば其の編制も我が國全管區より選ばれたる近衛の精銳に、堅忍持久性に最も特徴を有する東北の代表仙臺師團、精悍敏俊の性を有する北九州男兒たる小倉師團を以てし我が大和民族の代表的性格を統合して日露の緒戰に當らしめたのである。

二、小倉師團の仁川上陸

陸軍最初の出動師團たる小倉第十二師團は二月下旬までに仁川に上陸し先づ韓國首都京城に集合したる後平壤に向つて前進を開始し黒木大將の指揮する第一軍主力(近衛及第二師團)の集中掩護に任じた斯くて第一軍主力は海戦の効果と鎮南浦附近の解氷を待ちて三月中旬同地に上陸し四月下旬鴨綠江左岸に開進を終り五月一日を期し不十分なる渡河材料を以て鴨綠江右岸に據れる敵に對し渡河攻撃を實施し陸戦第一回の勝利を得一舉敵を鳳凰城附近に向ひ追撃した。之れが鴨綠江の會戦である。

第三節 第二軍(奧軍)の出征

一、是より先大本營は奧大將の指揮する第二軍を鹽大澳(大連の東北遼東半島の南岸地)區附近に上陸せしめ旅順要塞を孤立せしめたる後第一軍と呼應して遼陽に向ひ前進せしむる爲其の主力(第一、第三、第四師團)を四月下旬大同江口(韓國)に集合せしめ海戦の結果を待つて居た。

一體第二軍の鹽大澳に上陸せしむる時機は第一軍の鴨綠江渡河の時機と調和せしめ以て露軍に各個撃破の好機を與へざる爲同日に行ふ計畫であつたが海戦の状況は未だ之を許さず。

聯合艦隊の五月二日旅順口に對して行へる彼の壯烈なる第三次閉塞を待ち五月四日に延引するの己

むなき状況となつた。

然るに敵は全く積極的企圖を放棄してしまつたので第一軍も危険なく殆んど敵の妨害を受けず上陸することが出来て各個撃破の虞は杞憂に終つた。

第四節 南山の戦闘

一、第二軍の初陣は五月二十六日の南山の戦闘である此の戦闘は非常な激戦であつて正味十四時間我が死傷約四千四百、消費砲彈約三萬四千發に上ぼり我が砲彈は將に缺乏を告げんとしたことは既に人口に膾炙されて居るところである當時我が砲兵工廠ではそんなに彈を使つては製造が間に合はぬと云ふ苦情を起した程であるが之を歐洲戰爭中「シャンパニユ」附近の戦闘で佛軍が六日間に約百八十萬發一日平均約三十萬發を消費せるに比ぶれば眞に隔世の感がある然し當時に於ては其の豫想外の消費數に我が當局は事實頭を悩ましたのである。

之が爲さすが露軍が三箇月間は必ず日本軍を拒止し得ると豪語せし難攻不落を誇りし南山陣地も僅かに一日間で奪取することが出来「ダルニー」(現在の大连)も電光的に占領し周章狼狽して同地を引揚げた露人は惨じめなものであつた。

之の大连を占領したため我が滿洲軍は非常な作戰上の便益を得るのみならず旅順要塞攻圍に多大な

効果が有つたのである。

第五節 滿洲軍の北進

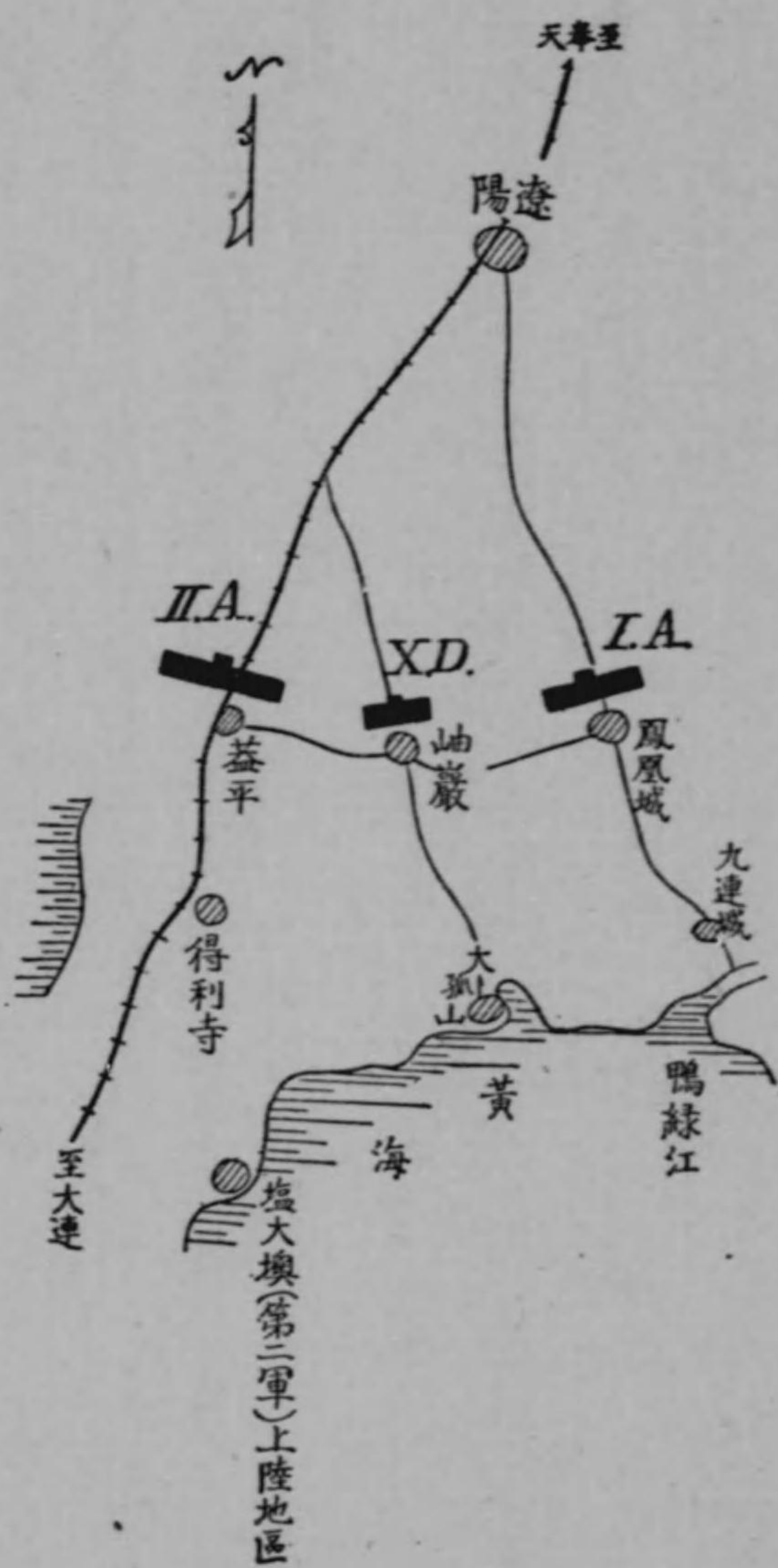
一、爾後大本營は第二軍(奥軍)の一部第一、第十一師團(南山攻撃中に上陸)併に第九師團を乃木大將(六月四日鹽大澳に上陸)の指揮に委ねて第三軍を編成し之を以て旅順要塞の攻略に任せしめ第二軍の主力(第三、第四、第五、南山戦闘直前に上陸)師團を北方に轉進せしむることにした。時恰も露軍は旅順救援の爲大舉南下して來たので第二軍は六月十五日得利寺附近の隘路口に於て逐次増加し來る露軍と遭遇戦を交へ大に之を破り敵に南下救援の企圖を挫折せしめた。

二、第一軍(黒木軍)方面の進展と獨立第十師團の前進

此の頃第一軍は五月十日以來鳳凰城附近に銳意前進準備中であつて又第一、第二軍との中間に在りて遼陽を前進目標とし且隨時第一、第二軍に策應すべき任務を以て五月中旬以後大孤山附近に上陸したる獨立第十師團は既に岫巖に前進して居つた。

そこで此等の軍を三方より遼陽を目標として前進せしめ所謂外線上に立ちて雨季(七、八月)以前に敵主力と決戦を交へんとするのが我が大本營の方針であつた。

此で一寸日露兩軍の作戰方針について此の頃の現在情況から觀て如何に遂行されつゝあるかを再び



述べる。

我が軍の勝目は敵が只だ一本の然かも約五千哩の延長を有する西比利亞鐵道にて逐次集中する敵に對し速かに遼陽を攻略して我が兵力を集中し露軍を各個に撃破するを企圖しあるに對し露軍は一部を以て私の前進を遲滞せしめ時間の餘裕を得此の間歐露及西比利亞の軍隊を遼陽附近に集中し我と決戦をなし已むを得ざれば主力の集中地を尙ほ遠く北方に移して決戦する考へであるが旅順を長く孤立に陥らしむること併に遼陽の如き要點を放棄することは彼の忍びざる所であつた。

三、遼陽城は日、露兩軍の爭奪目標となる

斯の如く彼我兩軍が遼陽附近の戰略目標に向ひ先制の利を獲得せんとするは必須の勢ひで殊に我が日本軍は絶對的の要件であつたが如何にせん六月下旬からの降雨は泥濘膝を沒し車輛の運行全く不可能となり各軍共人馬の行動意の如くならず殊に第二軍(奥軍)方面は糧秣の輸送絶對不可能となり萬事休して我が軍の遼陽城前方に進出し得たのは雨季後の八月下旬となつてしまつた。

此の途中第一軍(黒木軍)方面では六月二十九日摩天嶺附近の戰鬪、八月一日には榆樹林子、様子嶺附近の戰鬪があり又遼陽會戰直前八月下旬には寒坡峯、弓張嶺附近の夜襲(大部隊を以てする夜襲の好戰例である)が行はれて何れも敵の心膽を寒からしめた。

第二軍(奥軍)方面では得利寺附近戰鬪末期より逐次第六師團の増加を得七月二十四日には大石橋附近の戰鬪があつた。

是より先き第四軍(野津軍)が編成せられ七月十六日其の司令部は岫巖に到着し第十師團を指揮して居つたが大石橋戰鬪後第五師團を其の令下に屬せられ八月一日柞木城附近の敵を撃破して第二軍と協同し遼陽さして北進した。

大山元帥滿洲軍總司令官となる。

六月下旬滿洲軍總司令部が編成せられ大山元帥は七月中旬大連に上陸して爾後直接各軍を統率した

(要圖參照)。

第六節 遼陽の會戰

一、遼陽會戰は日露兩軍主力の第一次決戰であつた。

當時彼我の兵力は我が軍十三萬五千に對し敵は二十二萬五千の絶對優勢である。

此の會戰の本戰は八月三十日—九月三日に亘つたのであつて其の激戰であつたことは兩軍主力の衝突の點から云ふても想像に難くない。

特に中央軍たる第四軍(野津軍)の右翼方面では敵兵屢々逆襲して一時は非常な苦戰に陥り戰況の推移逆睹し難いものがあつた。

然し本會戰の特色は此の主力正面の戰況が見極めが付かない時機に第一軍主力が孤立して太子河を渡河し敵中深く突いて其の背後に迫まつたことである。

敵は此の徒涉殆んど不可能なる太子河に依り日本軍の兵力分離するを待ちて各個に撃破せんと待ち構へて居たので直ちに首山堡附近の陣地を遼陽設堡陣地の線に後退せしめ總豫備隊及抽出し得たる兵力を以て決然第一軍主力に向ひ攻勢に轉じて來た蓋し至當の處置と謂ふべきである。

然しながら敵將「クロボトキン」大將に確たる決心なく部下又疲勞を名とし日本軍の最も危機を捉へ

遼陽附近會戰兩軍要圖



此の時機は日軍として最も危機にして我が第一軍の勇敢なる突出と共に彼の決然たる攻勢移轉決行せられたならば或は各個撃破の悲運に陥りしやも計き難き情況なりしなり

て、乘、ず、べ、き、好、機、た、る、此、の、新、攻、勢、決、行、の、不、可、能、を、述、べ、中、々、命、令、に、服、從、し、な、か、つ、た、の、で、遂、に、實、行、半、途、に、終、り、其、の、雄、圖、空、しく、沙、河、以、北、の、線、に、退、却、す、る、の、已、む、を、得、ざ、る、に、至、つ、た、の、で、あ、る。

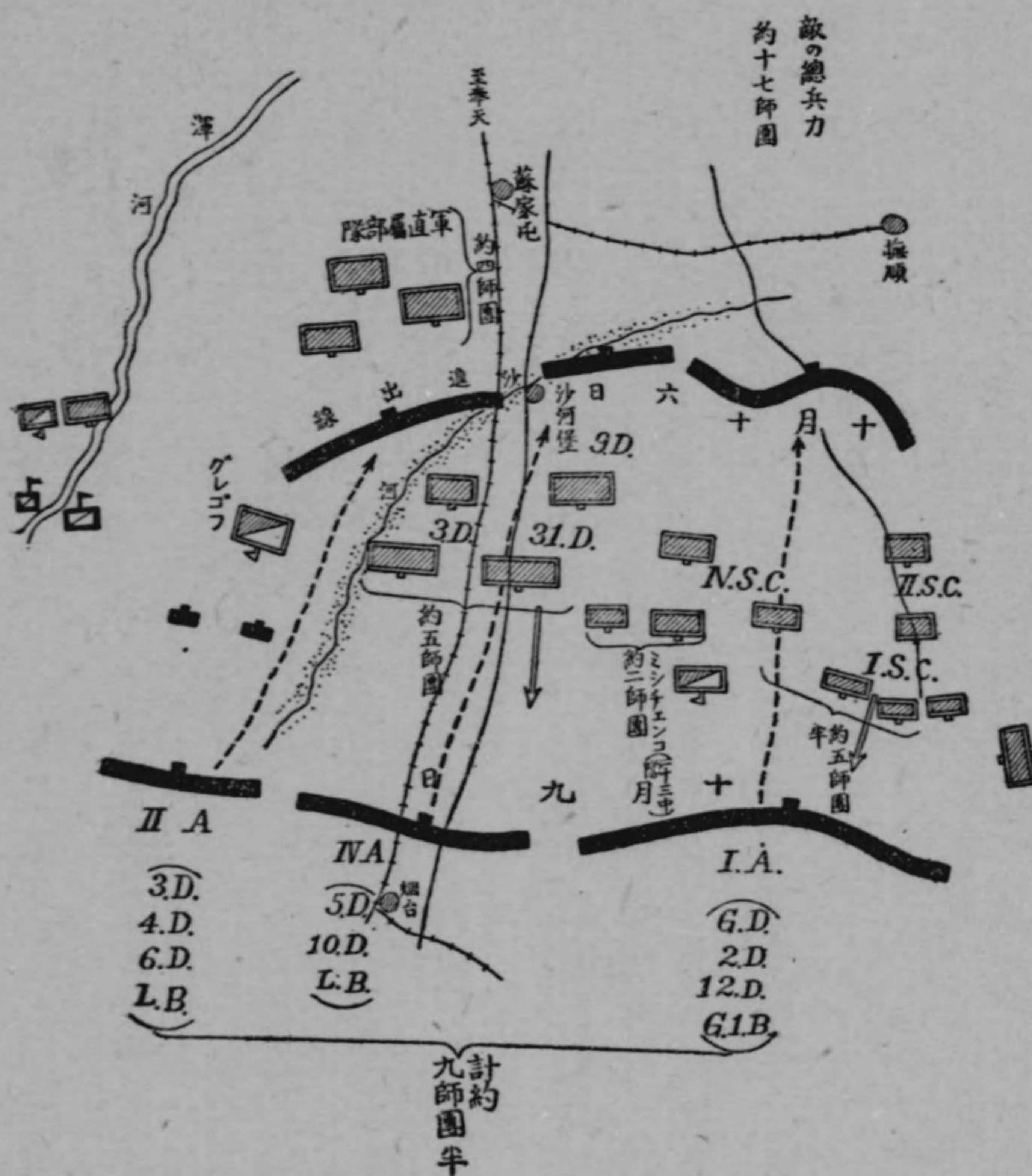
斯、の、如、く、し、て、我、が、軍、は、遼、陽、占、領、の、目、的、を、達、し、た、が、敵、の、死、命、を、制、す、る、こ、と、出、來、ず、彼、を、し、て、悠、々、退、却、せ、し、め、た、こ、と、は、誠、に、遺、憾、の、こ、と、で、あ、つ、た。

之、れ、は、彼、我、兵、力、の、相、違、が、餘、り、に、も、大、き、か、つ、た、こ、と、に、關、係、す、る、は、勿、論、な、る、も、又、我、が、軍、に、は、彈、藥、の、缺、乏、が、甚、だ、し、く、之、が、爲、殆、ん、ど、追、撃、す、る、こ、と、が、出、來、ず、遼、陽、附、近、太、子、河、兩、岸、の、地、區、に、兵、力、を、集、結、し、次、の、會、戰、を、準、備、す、る、の、已、む、な、き、狀、況、に、立、ち、至、つ、た、こ、と、も、亦、主、要、な、理、由、で、あ、る。

第七節 沙河會戰（初めて露軍が攻撃し來れる戰鬪）

一、沙河の線に兵力を集結したる露軍は爾後損害の補充を得十月八、九日頃から攻勢に轉じて來た之が即ち沙河會戰であつて日露戰爭間に露軍が全力を擧げて攻撃前進した最初にして而かも最後のものである其の一般關係は左の圖の通りである。

沙河會戰我彼兩軍戰鬥要圖



斯かる上から見ても此の會戰は露軍司令官に十分なる勝算があり相當確乎たる決心の存したことは疑ふの餘地がない之に對して我が軍は遼陽戰後の補充は大體に於て終つたが彈藥等軍需品の整備は未だ整はなかつた而して彼我の兵力は概ね遼陽會戰の時と大差がない。さて此の際に我が軍が如何なる作戰に出づべきかは一大問題であつて滿洲軍總司令部内に於ても攻撃、防禦の二案が有つて容易に決せなかつた。

大山元帥は斷然我も又攻勢を採るべく決心し露軍に對し約半數の十二萬餘の兵力を以て十一日より全軍攻勢前進に移つた。

斯くて日露兩軍は太子河、沙河の中間地區に於て一大遭遇戰を惹起し我が軍は處々局地的には苦戰せるも遂に敵を撃破し十六日には概して沙河の線に進出することが出來た之が所謂沙河の會戰である。

然るに兩軍が此の沙河と云ふ徒涉容易な小河を挾んで自然と停止してしまつたのは矢張我が軍の彈藥が續かなかつたことが一大原因である。

第八節 沙河の對陣及黑溝台の會戰

一、斯かる間に滿洲には嚴寒が訪れ兩軍は沙河を挾めるまゝ近きは敵と五、六百米を隔て、冬營し所

謂沙河の對陣となつたのである。

此の對陣間我が軍は次に來るべき奉天附近の會戰を豫期して著々準備を怠らなかつた第八師團が新に滿洲軍に屬せられたのは此の時である。

黑溝臺の會戰

然るに明治三十八年一月下旬に至り敵は其の總兵力の約三分の一約十萬五千を以て我が左翼方面に向ひ大舉攻勢に出て來て我も新銳の第八師團に左翼方面に在つた數箇師團(總兵力約五萬四千)を以て同じく攻勢を取らしめ約四日間の激戦の後遂に敵を撃攘した之が有名な黑溝臺會戰である。

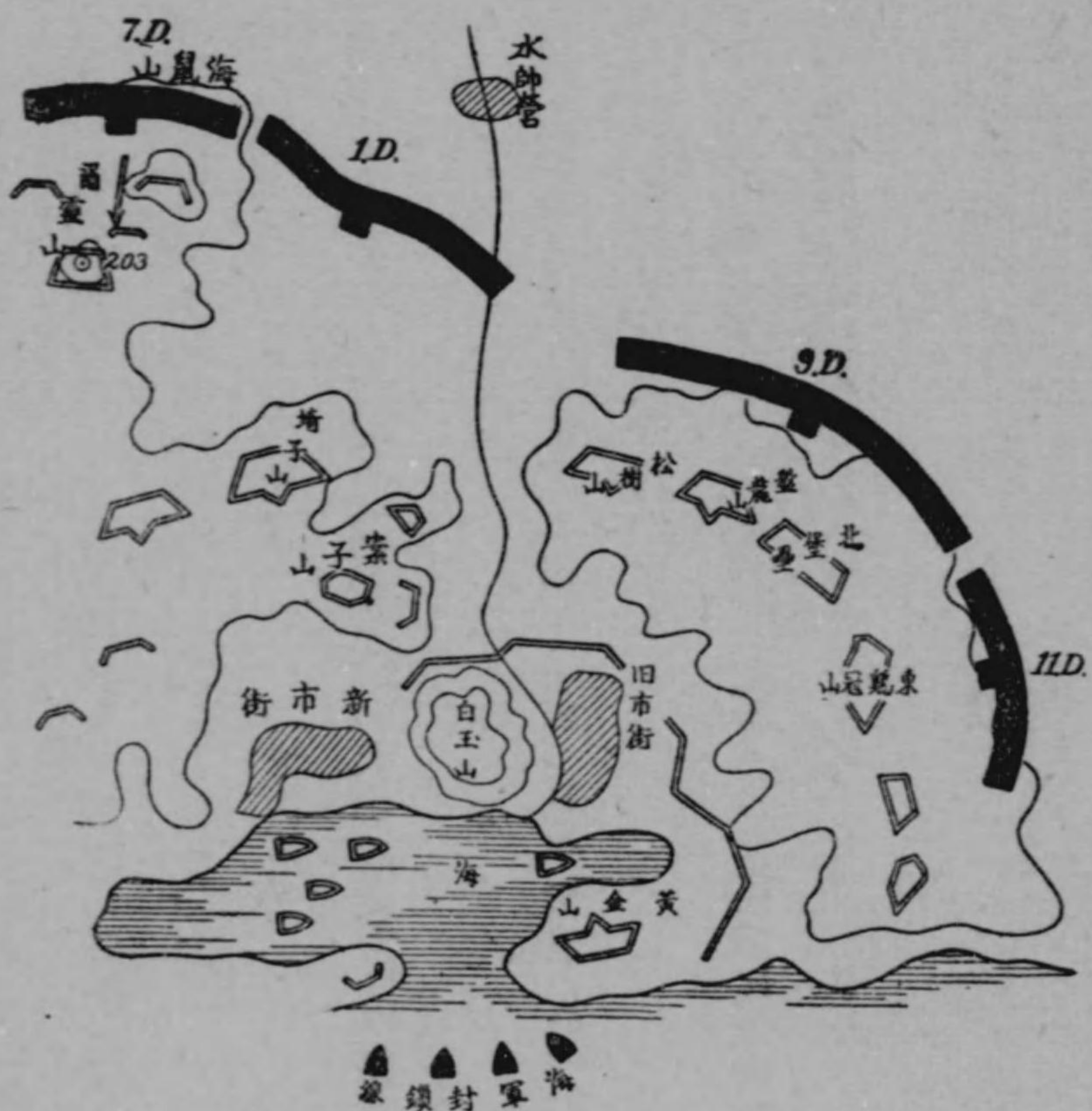
又例の「ミステチエンコ」騎兵集團が大舉して營口方面に現はれ我が兵站線を襲ひ後方を擾亂せんと企圖したのは之より稍、前のことである。

第九節 旅順攻略

一、旅順要塞攻略に任ぜる第三軍(乃木軍)は明治三十七年八月十九日—二十四日に互り第一回、同年十月下旬第二回の總攻撃を行つたが莫大なる損害を生じて何れも不成功に終つたので愈、最後の總攻撃として十一月下旬に第三回總攻撃が實施せられ我が軍は數日に互り肉弾又肉弾精力の有らん限りを盡くして苦戦奮闘屍山血河の惡戦たりしも容易に成功せず宜ろ攻撃は精魂盡きて將に挫折せんとするの形勢となつた。

そこで乃木大將は計畫を更め新に軍に増加せられて到着したばかりの第七師團を右翼方面に増加し

旅順要塞攻防概見要圖



二〇三高地の攻撃に全力を集注し十二月五日辛じて此の要地を占領することが出来た。此の二〇三高地は旅順防禦地帯中の最高地にして旅順の港灣は悉く一望の裡に收め敵艦船砲撃の觀測所として最良なると他面敵要塞の背面を瞰制し指呼の間に望み得る要點であるから彼我共に全力を盡くして攻、防のあらゆる手段を盡くしたのである。

當時二〇三(爾靈山)に於ける激戦の情況は乃木大將の「鐵血山覆山形改」に依つて能く盡くして居ると思ふ。

此の二〇三高地の陥落したので旅順の運命は愈、旦夕に迫り翌三十八年一月元旦敵將「ステツセル」は遂に我が軍門に降を乞ふに至つたのである。

旅順が陥ると第三軍は惡戦苦闘の勞を慰する暇もなく直ちに奉天戰參加の爲秘密裡に北進の途につき滿洲軍主力の左翼後に集結を終つたのは二月二十日であつた。

第十節 奉天會戰

一、奉天會戰の機運は漸く熟し我が軍は此の間各軍の戰闘序列に多少の變更を加へた我が軍の作戰計畫は概略左の如き態勢で戰闘を開始した。

鴨綠江軍 (第十一師團、後備第一師團、軍司令官川村大將)をして滿洲軍に策應するため右翼山地

方面より撫順方面に前進して敵の側背を脅威せしむ。

第一軍 成るべく多くの兵力を以て敵の左翼を脅威せしむ。

第四軍 は現在位置附近に攻撃を準備す。

第二軍 敵の右翼に向ひ攻撃。

第三軍 渾、遼兩河の中間地區を前進し敵の右側背に向ひ機動を行ひ攻撃せしむ。

總兵力後備旅團を合して約二十師團

露軍の配備

第一軍 「リネウエツチ」大將の率ゆる十師團半、高臺峯より萬寶山に互り更に支隊を以て遠く東方馬群丹以東を守備す。

第三軍 「ピリデルリング」大將の率ゆる七師團、萬寶山、李大人屯北方間本道の東西に互る。

第二軍 「カウリバルス」大將の率ゆる十師團半、第三軍の右翼に連繫し四方臺に互る。

總豫備 三師團半(内二師團は中央後他は右翼後)

合計 三十師團半

二、會戰の經過

1、鴨綠江軍の第十一師團は旅順陥落と共に一月下旬行動を開始し一路鳳凰城附近に向ひ連日行軍

にて集中し二月二十日迄に軍は全部の集結を終り二十二日より直ちに前進を開始し猛烈に當面の敵を攻撃した時に寒氣凜烈積雪皚々神州男子の意氣既に廣漠たる滿洲の野を呑むの概があつた敵將「クロバトキン」大將は此の攻撃に牽制せられ我が第三軍（乃木軍にして旅順要塞攻略に任じたる部隊）主力が此の方面に向つたものと判断して之に對應する爲同方面に總豫備隊の移動を始めた。

2、一方第三軍（乃木軍）は二月二十七日迄に絶對秘密の移動により滿洲軍の後方地區に集結し直ちに繞回運動を開始し又中央正面にある滿洲軍の主力第一、第四、第二の各軍は第三軍の繞回運動と相呼應して三月一日より總攻撃に移つたのであるが、敵の陣地は到る處堅固なるのみならず其の兵力も亦優勢であつた爲我が軍の之に對する攻撃は極めて困難に陥つた。

然し此の間第三軍は著々敵の側翼に向つて繞回を続け又第二軍主力は逐次渾河右岸即ち我が左翼方面に移動して敵の弱點に逼つた爲戰鬪漸次有利に進展し激戦九日の後敵を全く包圍し之を殲滅せんとするの勢を示し三月十日には遂に奉天を占領することが出来たが惜しいかな兵力不足の爲見す／＼長蛇を逸したことは誠に千歳の恨事であつた。

若し當時我が軍に尙一箇師團たりとも多くの兵力を有して居たならば必ずや露軍を完全に捕捉殲滅して復起つ能はざるに至らしむることが出来たであらう。

此の會戰に於ける敵の兵力は前述の如く三十師團半にして兵員約三十五萬我が軍は約二十五萬彼私の戰線約百六十キロ（四十有餘里）に互り正に有史以來の大戦であつた斯くて兩軍主力は再び英額邊門、昌圖、奉化の線に相對峙し彼我共に銳意兵力の増加に努め來るべき決戦を準備しつゝあつたが九月上旬遂に休戦となつた。

第十一節 支作戰の狀況（北韓及樺太の攻略）

一、是より先き三十八年一月旅順要塞の我が有に歸するや豫て我に好意を寄せ居たる米國大統領は近く日本の爲講和斡旋の勞を取るべきを仄かすに至つたそこで大本營は其の場合に處し有利なる地位を克ち得んが爲奉天附近主力方面の決戦準備に意を注ぐ傍ら韓國内（咸鏡道）に進入しある敵を驅逐すると共に成るべく速かに樺太を領有せんことを企てた北韓方面作戰の爲には先づ一月下旬新に編成せられたる後備第二師團を用ゆることとなつた。

然し其の一半は當時元山、咸興附近に在る部隊を以て充用したので直ちに二月中旬より北進の途に就かしめ主力は波羅的艦隊の進出を目前に控へて海軍の掩護を受け得ざる情況となりしかば已むなく四月下旬元山に上陸し逐次増加し來れる敵を壓迫し九月上旬會寧附近に進出した時休戦の令下る。

二、樺太上陸攻略戰

此の作戰は奉天會戰直後計畫せられたのであるが時恰も波艦隊の接近に依り海軍の協力を得る能はざりしため自然中止の形となつた。

然るに五月二十七日の日本艦隊の絶對的優勝となり且陸の奉天會戰、海の對島海峽附近の殲滅戰の結果六月講和會議開催の議が成立したので我が大本營は會議を促進し且立場を有利ならしむる爲樺太に兵を進め他面北關軍の兵力を増大して深く烏蘇里地方に進入せしめ又滿洲軍主力をして敵の増大せざるに乘じ更に攻勢に轉ずる腹案を立てた。

然し其の多くは種々の關係で實行せられなかつたが樺太の占領は第十三師團（四月中旬新に編成完結）を以て任せしむるに至り該師團は七月上旬より下旬に互り夫々約其の半部を以て各々樺太南部及北部の攻略に任じ忽ちにして全島を我が有に歸した。

第十二節 講和

一、陸に海に我が皇軍の眞價を發揮しさすがの露國も世界的地位よりして甚大なる打撃を蒙りつゝも尙ほ陸軍は極東支那の一部たる滿洲作戰の結果に過ぎず將來北滿併に西比利亞に於て決戰を企圖し必勝の信念ありと稱し容易に屈せざりしも米國大統領は茲に兩國に講和會議の開催を提議し八月上

旬より兩國委員「ポーツマス」に會し幾多討議の後講和條約の締結を見之と略、同時に出征軍に對し休戰を命じ斯くて二十箇月に互りし未曾有の大戦は我が國の光輝ある大捷裡に其の終結を見たのである斯くの如く日露戰爭が我が軍の大勝に歸した事は實に大元帥陛下の御稜威に依ることは勿論であるが又我が陸海軍の勇戰奮闘と國民の熱誠極る後援等に歸すべきものが少くない。

唯作戰上より此の戰爭の經過を通觀して遺憾に思ふのは常に連戰連勝を博しつゝも遂に敵に徹底的打撃を與ふる機會が無かつたことである而して其の主因は兵力の懸隔甚だしきと彈藥等の補給が十分でなかつたことに歸せなければならぬが爾來我が國の操典は改正せられて追撃、捕捉殲滅を高唱して眞の戰勝は追撃によりて敵に止めを刺すにあらざれば價值がないとまで推獎し殊に最近の作戰要務令、歩、砲の改正新操典は徹底的なる追撃の實行と捕捉殲滅を國軍の本領とせられたる所以である。

第二篇 第一次世界大戦の梗概

第一章 戦争の起因

一、世界大戦勃發の遠因、近因に就ては之を一般史學殊に外交史の研究に譲ることとして茲には單に動機に就て軍事的に考察を試みんとする。

聯合國(英、佛、露、米其の他)側から言はしむれば戦亂勃發の動機を獨逸の禍心即ち窮極に陥りたる一種の威嚇政策と挑戰的態度から起つたものであるとし同盟國(獨、澳其の他)側は之に對して頻りに辯明を試み聯合國側の陷穿に墜ちて開戦を餘儀なくされたものだと言主張する。

要するに孰れが烏の雌雄を知らん哉で公平なる見解としては概ね左の如く言ふて居る。

獨逸は「サライエヴォ」事件(「セルビヤ」青年の奥匈國皇太子に對する拳銃にて射殺事件)に乗じ其の常套手段たる軍備を背景とする一種の威嚇手段に依り其の世界的政策の一步を進めんとしたのであつて眞に戰意の有つたか否かは疑はしく遂に一旦振り擧げたる拳を引込みし損ねて戦亂勃發となつたと云ふのが實際であらうと思ふ。

然しながら獨逸が愈々立ち上るについては軍事當局としては相當周到綿密なる準備と畫策が整然と立案せられ十分の對敵確信を以て居たであらうことは著者等が此の大戦前から獨逸の對佛、對露軍

の作戰方針は常々兵學研究上の話題となり結局迅速敢果なる電撃にて佛の巴里を攻略し其の間東部國境に於て露軍の動員完結の緩慢なるを利用し一時守勢作戰をとり對佛戰果を得ると共に神速なる兵力移動に依りて一擧に露軍を殲滅するは獨軍不斷の根本方針なることを知つて居た點から見ても輕擧立ち上がったものでない事だけは想像されるのである。

尙ほ次の理由に依り獨逸としては開戦の時機は一日も速きを有利としたる點を窺知する事が出来る。

1、露國は日露戰役に於て被りたる創痍より恢復し特に佛國の後援に依つて其の軍事施設は逐日改善せられ獨逸としては對露戰略關係は一日も速きを可とす。

2、佛國は一九一二年頃より頓に尙武的に覺醒し著しく其の戰備を改良擴張し一九一三年には三年在營制を復活し兵力頓に増加したるのみならず日を追ふて精銳の度を加ふべく佛軍の弱點たりし野戰重砲の不足も著々補備せられ歳を出でずして獨逸軍を凌駕するに至ること。

3、對佛神速作戰の見地よりして中立侵犯を豫期する白耳義が一九一三年以來軍備の改革擴張を圖り一九一八年には其の完成を見るべく白國を通じて行はんとする對佛迅速作戰は白軍抵抗力の増加に依り困難となること。

要するに開戦せんとする時機の選定は獨の概して希望する時であつたことは慥かであつた。



二、七月二十三日奥國が塞國に對し強壓最後通牒を送るや露國は翌々日に動員準備に著手した。奥國が塞國に宣戰を布告するや翌二十九日露國は直ちに奥國々境方面の軍隊を動員した。そこで奥國も此の露國の動員に愈々緊張して奥國全軍の動員となり將に奥對露、塞の對立は一瞬にして兵火に見へんとした。

獨逸は元來奥國との同盟關係よりして先づ外交手段で露國の動員を阻止せしむると共に自身も亦直接動員準備に著手したので露國は躍氣となりて七月三十一日獨逸に對し全露軍の總動員となり獨逸もそれでは相手にならうと總動員を始めた。

事を平和の裡に解決せんとした外交手段たる動員中止の交渉が却つて獨逸の對露最後の通牒となり國交斷絶の因となつた。

露國の動員が何故斯くも獨逸に衝撃を與へたか。

これは獨逸が東に露、西に佛の強敵を控へ前述の通り獨逸の勝目は一に露軍の戦備緩慢に乗じ先づ佛國を撃つて更に露軍を破るに在るから露軍の動員を座視して其の戦備を完結するの日を藉すは自ら勝利を放棄する形になるからである。

時の獨逸參謀總長「フアルケンハイン」將軍も開戰は露國の動員に依りて餘儀なくされたと述べて居る。

三、佛國に對する處置

開戰の直接動機は對露の動員關係であるけれども露、佛の公然たる攻守同盟國である佛國に對して如何なる處置をなすべきや。

然かも獨逸に對して七〇年戰以來の佛國民の舊怨は深刻に全國民に徹底せられある關係上決して指を喰へて中立傍視するわけは斷じてないこれが獨逸としては重大なる問題であつた。

單に中立の宣言に空頼みして對露作戰に専念することは許されぬ處である従つて愈々獨、露開戰に際しては佛國に對し戰略上の保證を得なければならぬ即ち佛國に對し次の條件を突附けんとした。

「獨露開戰に當り佛國が中立を嚴守する意あらば其の保障として「ヴェルダン」「トゥール」の兩要塞の軍事占領を獨逸に許すべし」

所が佛國はこれを受けとる前に決然として其の態度を闡明して斷乎露國と攻守同盟の實行に移る決意をした。

歐洲の雄を以て自他共に許して居る當時の佛國が如何に平和熱に浮かされて居ても斯の如き佛國境の堅門を明け放せとの侮辱的條件に服するわけではない。

茲に完全に獨、奥對佛、露の開戰の幕は切つて落されたのである。

第二章 大戰勃發前後英の態度と參戰

一、八月二日獨逸は白國に對し獨逸軍の其の國內通過を強要し聽かずんば武力を以て強行手段を採るべく中立蹂躪の要求を提出した。

白國は元來飽くまで中立擁護を主義として自國防衛の爲動員を行ひ同時に關係諸國に中立尊重の提議をなし特に白國王は獨逸皇帝に親書を贈り中立を懇請した。

然し獨逸は豫め決定しある作戰計畫に従ひ白國を通じて北佛に進入を敢行する爲前記の最後通牒の形式を以て國土通過を強要し同日獨軍は「リュクスアンブルグ」に侵入し電光石火的に「リエージュ」要塞を平時編成の部隊で急襲して遂に攻略した。

英國は白國中立擁護を尊重すると稱して大戰に参加す。

白國は獨逸の最後通牒を受くるや直ちに英に救援を請ひ翌三日斷乎として獨逸の要求を拒絶し奮然として對獨戰を開始したこれは佛國としては非常に驚異の眼を以て迎へられ且白國の雄々しき態度を賞讃し列國の同情を惹いた。

斯の如き情況に於て英は戰意を決し佛國に告ぐるに獨艦隊にして英佛海峡を通過して佛海岸を攻撃する舉に出でんか英海軍は斷乎として之を阻止するであらうと申出でた。

元來英は大戰勃發迄は例の老獪打算の本性より其の態度は甚だ曖昧であつて獨逸としては十中八、九は英の中立を信じ又各種の條件を以て英の中止を獲んことに努力したがさすがに白國中立を尊重するとの名義で起つて參加することになつた。

第三章 西方戰場に於ける獨、佛兩軍の作戰計畫の概要

第一節 獨軍作戰計畫の概要

一、獨は十九世紀の末葉「シュリーフェン」元帥が參謀總長たりし時代に策定したもので一九〇七年大「モルトケ」の甥たる小「モルトケ」が其の後任となつてからも踏襲した計畫で乃ち露軍の戰備整はざるに先だち東守西攻して佛軍を根本的に覆滅してから露軍を衝かんとするのであつた之の爲疾風迅雷的に佛軍を撃破するには瑞西と「リュクスアンブルグ」間に限界せられ且堅固に防備せられある正面を避け優勢なる兵力を以て白國を通過し佛の東北地方に殺到し佛軍の左翼を席捲しつゝ左へ左へと戰線を旋回し遂に百八十度の方向變換を成就して佛軍を瑞西國境に壓迫殲滅せんとする壯大なるものである。

今次の歐洲大戰に於ても佛の「マヂノ」の堅塞突破を避け白國平野に英、佛聯合軍を誘致し一舉に決戰を求め遂に之を捕捉撃滅の戰果を獲得し潮の如く佛の東北地區に殺到し一部を以て「マヂノ」線を

人跡未踏の大森林を踏伏して強襲し之を突破遂に旬日ならずして巴里を攻略し佛をして軍門に降伏せしめたる戦跡は前大戦の失敗により爾來二十年間練りに練つた終始一貫せる對佛作戰の完遂であつたのである之が爲動員師團數百十四、兵數二百二十五萬を左の如く集中した。

西方戰場(對佛軍)

野 戰	四十五師團
豫備及補充	二十三師團
後 備	七師團

合計八十五師團、外に騎兵九師團(全軍の四分の三を充當す)

東方戰場(對露軍)

野 戰	六師團(三軍團)
豫 備	三師團
後 備	五師團

合計十四師團

外に騎兵二師團(全軍の約七分の一、素質は豫、後備兵團を主力とし西方戰場に比すれば雲泥の差あり)

第二節 佛軍作戰計畫の概要

一、一九一一年「ジョツフル」元帥が參謀總長の任に就き從來の攻勢防禦を改め絶對的とも云ふべき攻勢主義に基いて策定したものに源を發し大戦劈頭に實施せられたるものは一九一三年策定の第十七號作戰計畫と稱するもので此の作戰計畫の基礎は獨逸軍の採るべき作戰方針を次の二つの場合に判斷して樹てたものである。

- 1、白國の中立を犯す事なく東方國境のみより突進し來る場合。
- 2、白國の中立を犯す場合。

但し此の場合でも「ムーズ」河西南方の平地迄に手を伸すことなかるべし。

此の兩種の想定に應じ左の如き基礎配備をなす。

「ローレンヌ」地方に於て獨軍と決戦をなすを目的とし全兵力を五軍に編成す。

第一乃至第三軍及第五軍の四軍を瑞西國境より「メジエール」附近に互り第一線に排列し第四軍を第三軍の後方第二線に置き尙ほ豫備師團集團(四師團)を第五軍の後方北部佛國に配置し而して第三軍中には攻勢前進間「メツツ」要塞の攻圍に充つべき豫備六師團を含ましてあつた。

斯の如き基礎配備に集中が終り愈、攻勢に發進するに際しては獨逸軍の動作、判斷第一に該當する

ときは第五軍を右に寄せて第三軍と併列せしめつゝ概ね原形の配備の儘國境を出發して北部「ローレーヌ」に於て決戦を行ふべく若し判斷第二の如くならんか第二線に在る第四軍を第三、第五軍の中間に挿入し正面を正北に擴張しつゝ攻撃前進を起し白國の東部「リュクサンブル」州地方に於て主力の決戦を求めんと欲したのである。

佛軍の動員編成兵力

- 野戰 四十八師團(二十四軍團)
- 豫備 二十三師團分(内師團に編成せられたるもの十八)
- 後備 二十師團分(内師團に編成されたるもの僅かに三)

合計約九十一師團(五軍に區分す)

外騎兵十師團

英軍の派遣兵力(參戰直後)

四師團、騎兵一師團

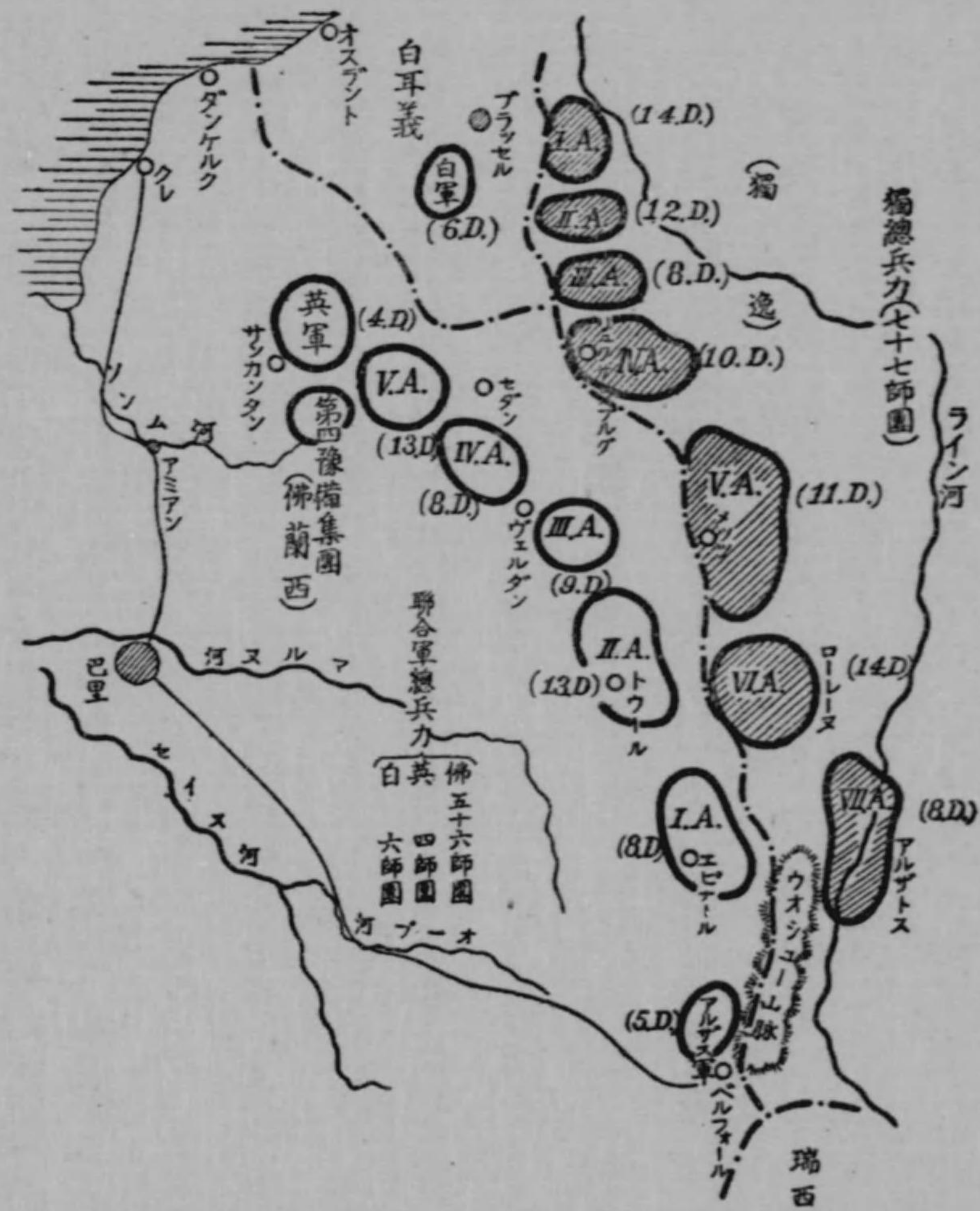
白軍

六師團、騎兵二師團

別に「リエージュ」、「ナミュール」、「アンベルス」の守備兵力約八萬

要するに西方戰場に於ける獨對英、佛、白聯合軍の兵力關係は獨は稍劣勢であるが之を補ふものは其の精銳と統帥の卓越とである。

圖要中集軍兩るけ於に場戰方西



第四章 東方戰場に於ける露、獨、塙軍の作戰計畫

第一節 露軍の作戰計畫と集中

一、露軍は當初獨軍が主力を露國方面に使用する場合を顧慮し慎重なる態度を取り其の主力を敵國內に凸出せる波蘭地方に集中するを危険として安全なる「コヅノ」「グロドノ」「プレストリトウスク」の線に集中するの豫定であつたが開戦と共に獨軍の主力が佛國方面に使用せらるる事明らかとなるや主力の集中地を前方に移し且全力の集結を待つことなく先づ「ガリチエン」に於て塙軍を破り同時に速かに東普に侵入して塙國方面の作戰と相俟つて「ワルシャウ」地方の南北兩側の危険を除き將來進んで「シレジエン」州に侵入する準備をなし且西方戰場に於ける獨軍を東方に牽制して佛軍に策應せんとした。

此の方針に基き露軍は當初左の如く二方面に分れて集中した。

西北方面軍（三軍内二軍は東普侵入の豫定にして一軍は豫備軍なり）兵力約三十四師團、「ウイ
ナ」及波蘭北部地方

西南方面軍（五軍）兵力約四十九師團

波蘭中部「イワゴロツト」附近より「ルブリン」「ホルム」を経て東方「ロヅノ」「フロス

ノロウ」附近

全軍は「ニコライ、ニコライウツチ」大公統帥の任に當つた。

第二節 獨、塙軍の作戰計畫と配備

一、獨軍は先づ西方戰場に於て決戦を求むる主義に依り露國方面に對しては單に露軍の侵入を防止するの程度に止め第八軍（約十四師團と騎兵二師團）のみ東普に配置し然かも精銳なる野戰師團は六箇を算するに過ぎず他は豫備又は後備兵團であつて「シレジエン」州には僅かに後備一軍團を配置したるのみにて全然持久防禦を主とする守勢作戰を採つた。

二、塙軍は最初主力を以て塞軍を粉碎するの計畫であつたが未だ其の作戰に著手せざるに露軍に對し危険を感じたから塞軍に對しては十九師團を充て爾餘四十五師團を以て「ガリチエン」に集中した。主力は中部及西部「ガリチエン」に配置せられ東普にある獨軍と協同して露軍に衝き其の西進の銳鋒を挫き西方戰場に於ける決勝の後獨軍主力の轉戦し來るを待たんとした。

三、東部地方に於ける兩軍の集中併に配備情況の概要左記の通り。

獨對聯合軍第一會戰要圖

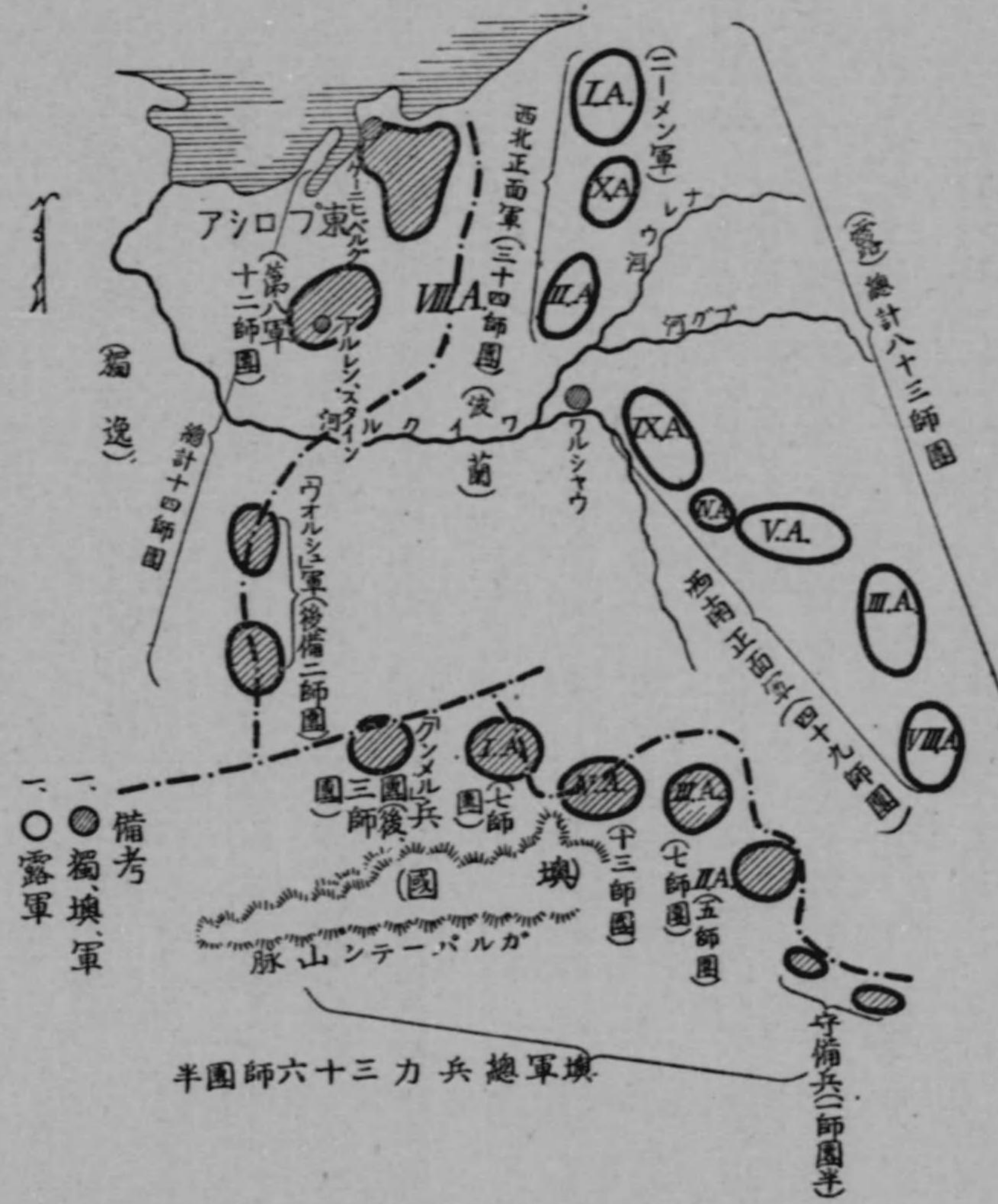


一、獨軍の戦闘情況

第五章 兩軍主要戦闘經過の概要

第一節 西方戰場(獨、對佛、英)の第一次會戰

東部戰場(獨、奧、露國境)兩軍集中要圖



作戰要務令と戦史の對照研究

八月二十一日最右翼第一軍(十四師)は「ブリュッセル」南方に達す。
第二軍(十二師)は豫備、近衛及第十一軍團を以て「ナミエ」要塞の攻圍に著手し爾餘は「シアルロフ」附近に進出す。

第三軍(八師)「ジヴェ」附近にて「ムーズ」河を渡らんとす。

第四軍(十師)、第五軍(十一師)は白國東南部「アルデンヌ」の錯雜地内に陣地を占領して佛軍の正面突破に備へあり。

第六軍(十四師)、第七軍(八師)は「ローレーヌ」より「アルサス」に互り佛軍と交戦殊に「モルヒンゲン」の陣地に佛第二軍(十三師)を迎撃したる後「ナンシイ」方向へ追撃中。

二、佛軍の戦闘情況(同日)

第一軍(八師)は一部を以て上「アルザス」に侵入しあつて其の主力は佛領「ローレーヌ」の東部地方に位置す。

第二軍(十三師)は獨領「ローレーヌ」に於ける攻撃失敗の後「ナンシイ」東北方の「グラン、クロネ」の丘陵に向ひ退却中。

第三軍(九師)、第四軍(八師)は「トゥール」附近より國境に沿ひ西北方に互り「メジエール」附近に至る間に東北面して攻撃を準備しあり。

第五軍(十五師)は白國內「サンプル」河と「ムーズ」河との境する三角地帯に位置す。

英軍(四師)は佛第五軍の左翼「モンヌ」南方地區に位置す。

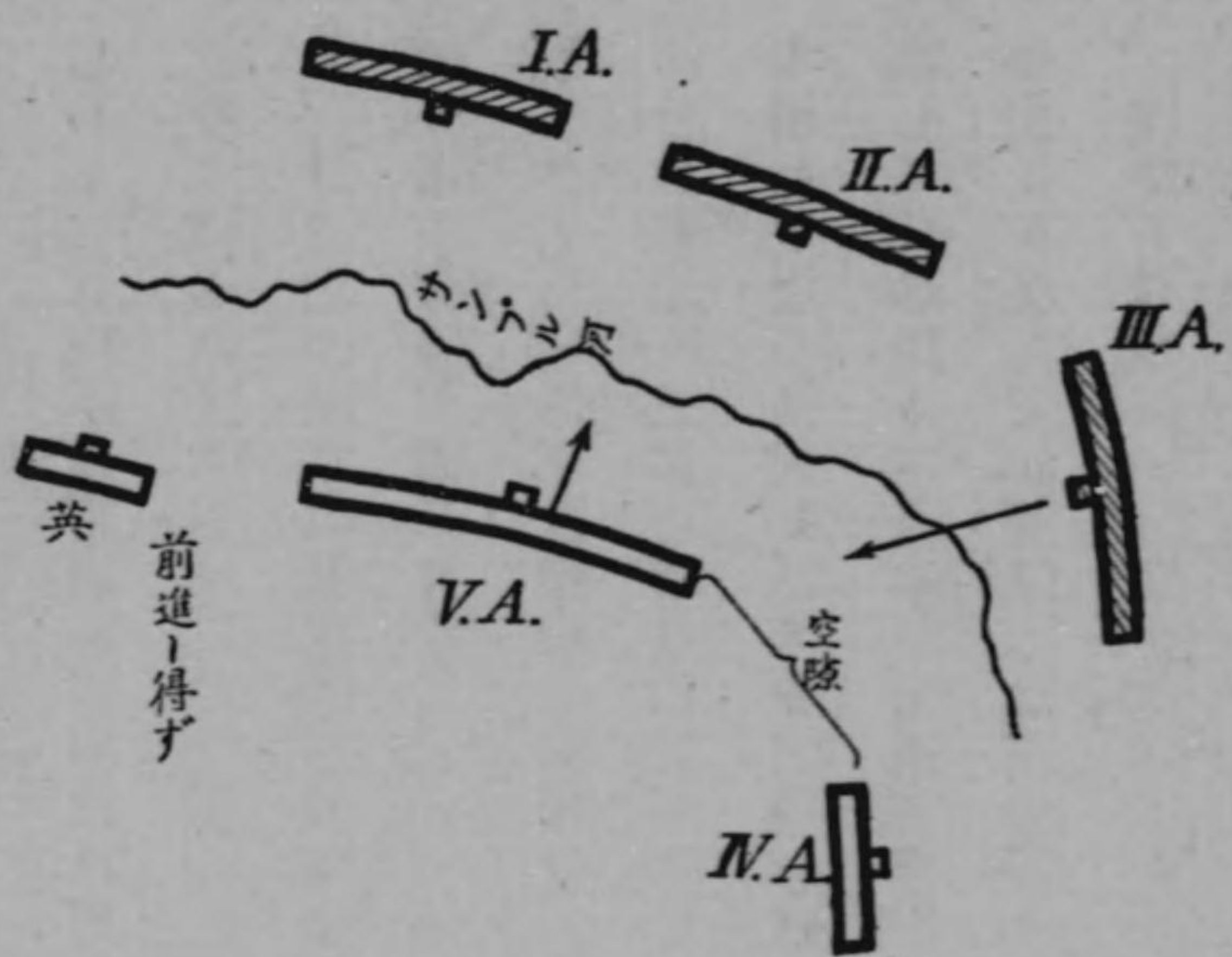
三、兩軍戦闘經過の概要

1、佛軍の攻撃多くは失敗に陥る

佛軍總帥「ジョフル」將軍は二十二日を期し聯合軍に總攻撃を命ず之に於て概ね左の如き結果となる。

第三、第四軍(佛の中央軍)二十二日直ちに攻撃を開始し最も勇敢に攻撃を實行したるも或者は森林地帯にて濃霧中不意に獨軍と遭遇し大混戦を演じ全線に互り至る所混亂に陥り不成功に終る。

第五軍(佛最左翼軍)は「サンプル」河を越へて攻撃前進すべき當面の獨軍頗る優勢なるを知ると同時に右翼には第四軍との間に空隙あり左翼は英軍の前進準備未だならざる爲兩翼危険を感じ前進するを得ずとなし當日は「サレブル」河南方地域に在つて敵を待たんとす。



軍司令官「サンルザック」は此の苦境に立ちて如何に善所すべきや迷ひ進退谷まゐるの心情であつたらしく然し部下の軍團長の中には軍司令官の態度を齒齧しと自ら進んで現在獨軍が勇敢に「サンブル」河を渡河前進中なるを黙視し得ずとなし斷乎攻勢に出たものもあつたが凡て此の不統一なる攻撃は悉く獨軍に撃退せられ不成功に終る。

第五軍の攻勢移轉又失敗

翌二十三日第五軍は眼前に進出せし獨軍に攻勢移轉を實行したが右翼方面にては「ムーズ」河を渡河せし獨逸第三軍を撃退したが昨日佛第四軍の攻撃失敗と英軍正面及び左翼に頗る優勢なる獨軍現出し危険の情況に陥るや攻撃を斷念し夜暗に乘じ退却を始む。

而して此の退却は全然第五軍司令官の獨斷に出でたもので之を總司令官に報告して一般退却方向の指示を促したが英軍には何等の連絡もなさずして實施した。

2、英軍の情況

英軍司令官「フレンチ」元帥は「モンズ」附近に於て四師團と騎兵一師團を率ひ對獨作戰を準備せしが元來聯合軍の弱點であり又缺點である精神的の結合なく只だ己れは自由の立場に於て佛總帥の拘束を受くるを欲せず従つて其の行動佛の意の如くならず尙ほ之の第一會戰に於て佛第五軍と密接の連繫を有するに係らず意思の疎通を缺き協同動作不十分であつた。

此の事情の下に英軍は二十二日「モンズ」「モーブウジエ」地方に在つて佛第五軍一部の失敗を知り且少くも三軍團以上の獨軍が英軍の正面及左側に迫るを知りて不安其の極に達し二十三日朝來優勢なる敵の攻撃を受け苦戰慘敗の後夜に入り辛じて退却す。

3、要するに佛軍は第三、第四軍を以てする主攻撃は失敗に歸し第五軍、英軍は退却し白軍は何等の期待もなし得ず只だ右翼方面の第二軍が一度は失敗せしも退却後「ナンシイ」の丘阜に獨軍の猛攻を支へつゝあつて多少兵力の餘裕ある事のみが恃みで結局佛軍は之の會戰の結果敗退の窮況に陥り佛軍總司令官の採るべき方策こそ眞に國家安危の岐るる處であつた。

今次大戰に於ても獨軍潮の如く巴里に向つて進攻し來るや佛軍總司令官の作戰指導は益々困難となり遂に首相が「神の援助による奇蹟を待つのみ」と悲鳴を揚げたのは遂一箇月許り前であつたが矢張第一次大戰でも同様の國難に逢著したのであつた。

4、獨軍の強襲成功

獨軍は豫定の如く第一乃至第三軍は攻撃前進を續け第四、第五軍は二十二日早曉當面佛軍の前進を知るや急遽發進し佛、白國境一帯にて英、佛聯合軍と戰鬪を交へ其の結果は前述の如く獨軍至る處有利に發展して佛軍を窮地に陥れしめた。

二十日より獨第二軍の一部は「ナミュル」要塞の攻撃に著手し二十五日全要塞を攻略し約二軍團の

兵力餘裕を生じ斯くして獨軍は即戰速決主義の實現に多大の光明を感じ西方戦場の將來を非常に樂觀する事となつた。

四、第一次會戰の觀察

此の第一次會戰に顯はれたる獨、佛兩軍の戰術的價值殊に精神的狀態に就ては兩々相下らざるものがあつたが唯だ軍隊の指揮、運用に於て佛軍は獨軍に及ばざる處あり總體的に不利の形勢に陥つたのである。

而して此の際佛軍を驚かしたのは獨軍の機關銃と野戰重砲の威力であつた當時獨、佛軍共に其の有する機關銃數は同等(歩兵一聯隊に六銃)であつたが獨軍の使用法適切なりしたため佛軍は獨軍が非常に多數のMG.を有するやの感を抱いたと告白して居る又獨軍は佛の優良なる野砲に惱まされたやうだ。

第二節 東方戦場に於ける「タンネンベルヒ」附近の會戰

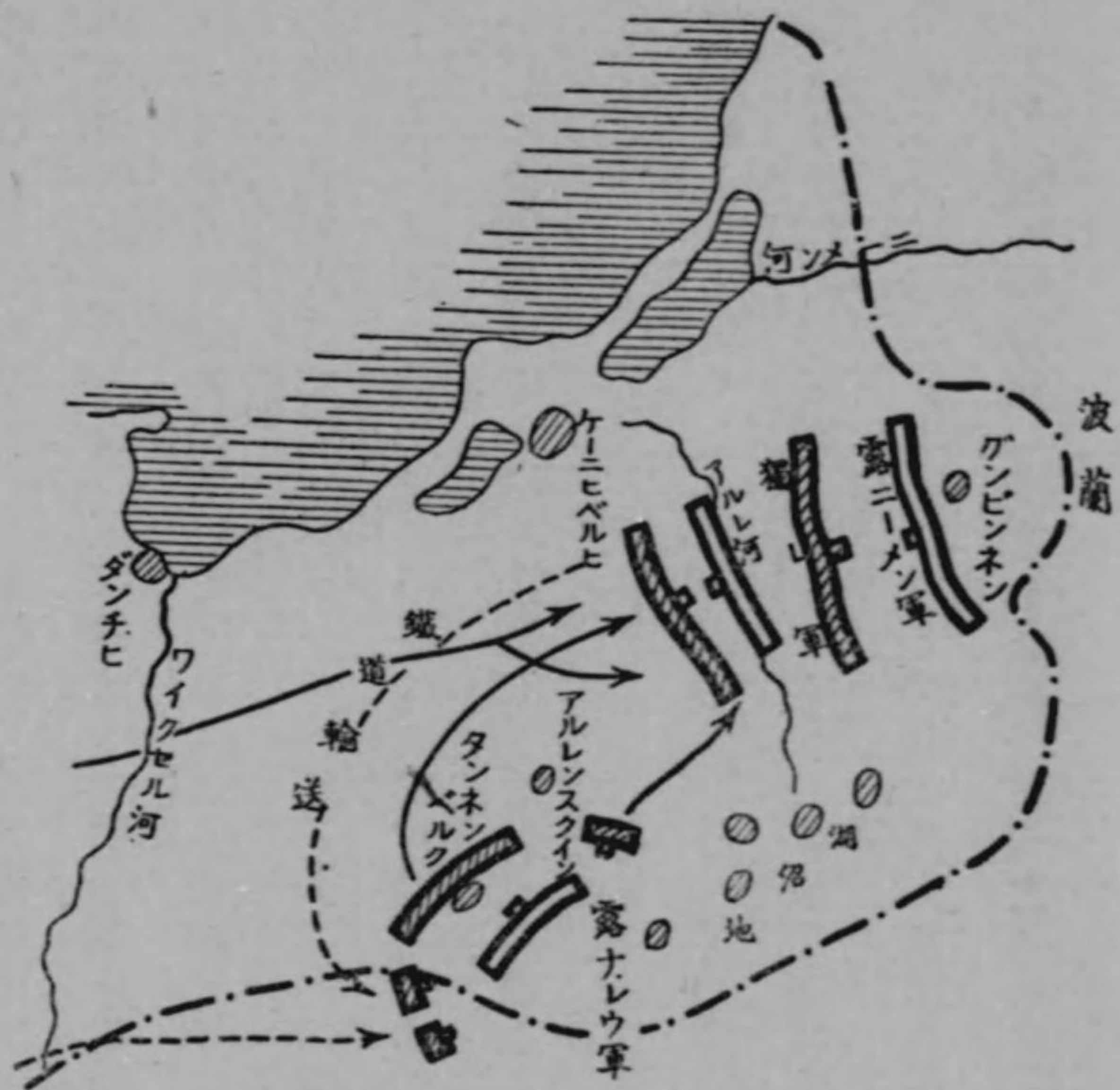
一、「タンネンベルヒ」會戰前の東普方面戰況

「レネンカンブ」將軍の指揮する露の「ニーメン」軍は獨軍主力が佛國方面にありて對露軍には極めて小數且素質劣れる獨軍なるを觀破し東普地方に潮の如く進入し來り遂に「ゲンピンネン」附近の戦闘

を惹起し獨第八軍の主力は善戰露軍の前進を拒止したが衆寡敵せず逐次退却の已むなきに至る。

他方獨軍の「サムソノフ」軍も露軍に壓迫せられ今や將に獨國東普一帶地區は露軍の馬蹄に蹂躪せられんとする悲境に陥ち入り一舉「ワイクセル」河畔に退却して露軍を拒止せんとする劣悪なる作戰を採らんとせり。

二、「ヒンデンブルグ」元帥の英斷にて「タンネンベルヒ」附近にて露軍を各個に壊滅す。此の敗退の責を以て軍司令令は革職せられ退職中の「ヒンデンブルグ」元帥は東普の危



機に直面して起用せらる「ルーデンドルフ」少將を參謀長とし豫備近衛軍團並に第十一軍團を「ナミユル」要塞陥落と共に東普に急遽増援せしめた。「ヒ」元帥の作戰方針

直ちに「ワイクセル」河畔の退却を中止し露の二方面軍が未だ分離しあるを利用し露の左翼軍「ナレウ」軍が「マズール」湖沿地の障碍地帯にて困難せるに乘じ先づ各個撃破をなさんとするにあつた。此の企圖の下に行はれた戦闘が所謂「タンネンベルヒ」會戰で今日軍事界に内線作戰の模範であつて又殲滅戰指導の典型として賞揚せらるる戦例である(後章詳細に研究する)。

其の概要は露の「ナレウ」軍が湖沼の障碍で廣き正面に分散し加ふるに露軍の特性たる鈍重性を發揮し徐々慢々の前進を利用して獨軍は之と對抗し漸次に錯雜地内に之を誘致牽制した。

其の間に北軍たる露の「ニーメン」軍に對しては獨軍の大部を竊かに鐵道輸送をして南方に轉用し「ニーメン」軍には僅かに要塞兵の一部と騎兵二旅團のみで露軍の六分の一に過ぎざる寡兵を以て對峙せしめ大膽極まる作戰を企圖した之れは畢竟其の素質を信じ露の鈍重に乗じたのである。

「タンネンベルヒ」附近に招致せし兵力中一軍團は露軍と對戰中の第二十軍團の右翼に配置して露の左翼を衝かしめ第十七、豫備軍團は露の右翼を衝いて三面合撃を行ひ全線擧つて攻撃に移り遂に完全に退路を遮斷し露軍は大混亂に陥り軍團長以下全兵力の約半數十三萬の死傷を生じ殘餘は全部捕虜となり全滅した眞に赫々たる勝利であつた引きつゞき獨軍は急遽轉戦して「ヒンデンブルグ」軍を「アルレ」河畔に迎撃して之を各個に破つた。

第三節 西方戰場「マルヌ」の會戰(獨軍の敗退)

一、獨逸軍の巴里を目ざして急追

獨軍は第一會戰に勝利を占めたが敵に徹底的打撃を與へ得なかつた然し其の戦局の前途を樂觀して大擧全線追撃に移つた。

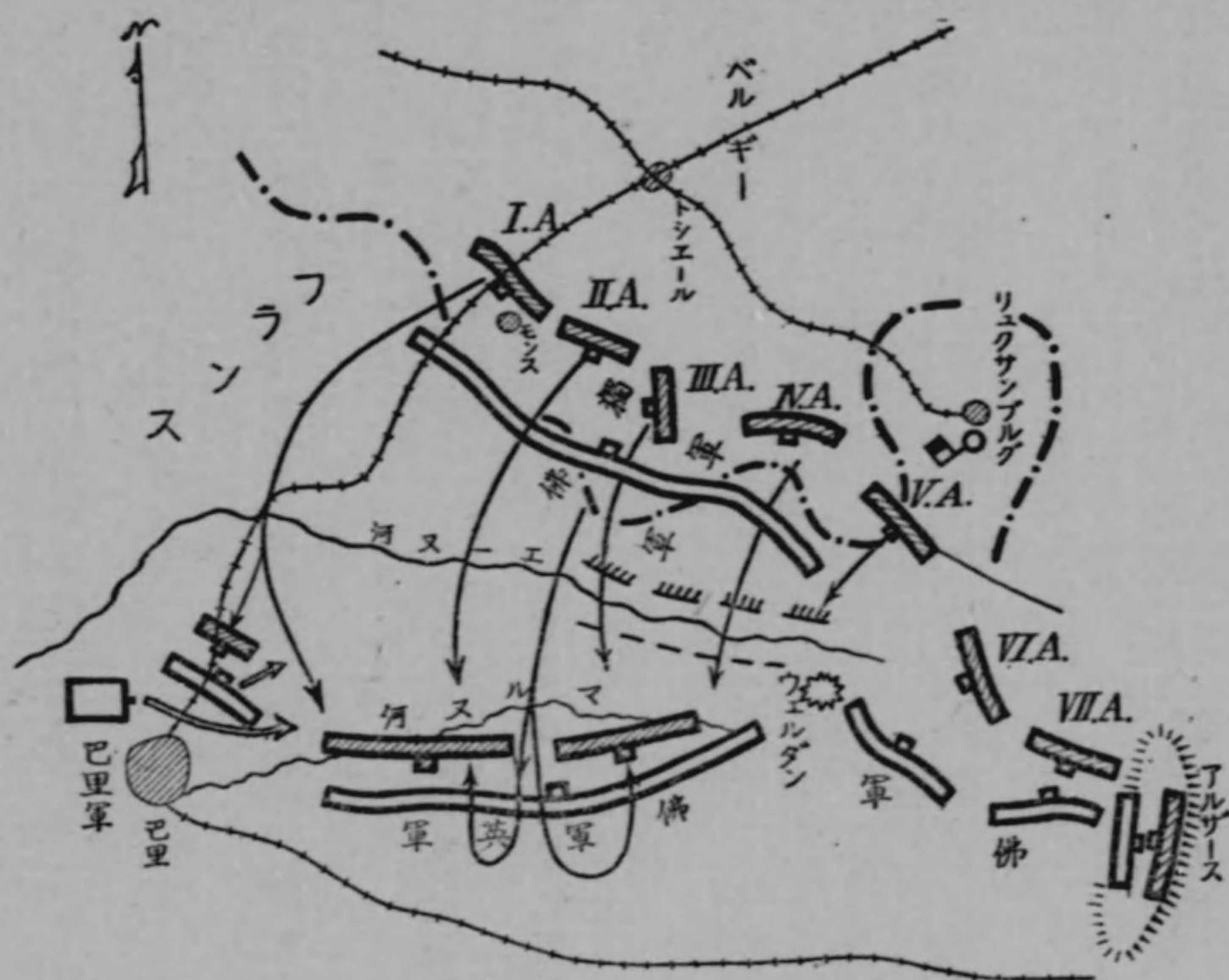
右翼軍をして方向を西南に取らしめ大規模に退却する敵の左翼包圍を試みしめ進路上の唯一の障碍たる「モーブウジエ」要塞に對しては豫備一軍團を充てて獨軍は一意追撃を續行し九月二日其の右翼が巴里北方に達するや茲に左翼包圍の企圖を捨て中央突破を決行するに變更し最右翼の第一軍をして其の行進方向を東南方に變換せしめ更に巴里東方に於て巴里要塞に對し全軍の翼側掩護に當らしめんとした。

此の時獨大本營は「リュクサンブルグ」に在り位置の關係上最も重要なる右翼方面の狀況に暗かつた。

二、佛軍の狀況と其の政府の都落ち

九月二日獨軍の急追に依り巴里危しと觀て佛政府は悲痛なる宣言を残して都を「ボルドー」に移した(今次の大戦に同じ)。

獨軍追撃と「マルヌ」會戰要圖



巴里は純然たる一大要塞となし野戦軍の據點として銳意防備の完成に力め巴里軍を編成し「マルヌ」河附近に於ける攻勢移轉の計畫を新にして左翼方面より斷行するに決し續々退却し來る佛軍の整備に努めた。

三、「マルヌ」會戰の動機と經過

巴里總督「ガリニエ」將軍は獨軍右翼たる第一軍の行動に對し九月三日飛行機の報告（飛行機が最も有效なる働きをなしたる戦例）に依り獨軍の右翼が巴里要塞に側面を曝露しつつ、東南方に移動するを知り、巴里軍を以て之を急襲するを有利なりと判断したこれを「マルヌ」河畔に佛軍の敗滅を轉換し退却途中より反轉して攻勢

に轉じ遂に獨軍を撃退し佛軍に赫々たる戦勝の榮冠を與へしめたる一大動機であつた。

所が此の頃退却中の佛軍併に英軍は第二次退却目標たる「セイヌ」「オーブ」河の線に到達しあらず従つて總攻撃に轉ずるのは稍、過早であつたが「ガリニエ」將軍は極力總指揮官「ジョフル」將軍を動かす断乎として九月六日攻勢移轉を開始し巴里軍たる佛の第六軍團は獨の最右翼に向ひ攻撃を開始した。

獨軍も此の豫想外の攻勢に右側背の危険を感じ正面の二軍團を後退して佛第六軍に對せしめしも佛軍の死力を盡す反轉攻勢は獨軍の銳鋒を挫き兩軍各處に苦戰奮闘勝敗未だ決せざる時遂に九月九日獨軍尙ほ有利の隊勢にありしも其の大本營よりの傳令により同夜より長蛇を逸して「エーヌ」河畔に後退するの已むなきに至つた。

第六章 獨、塙軍對塞爾比軍作戰

第一節 獨、塙軍指揮官「マツケンゼン」將軍の

新規創意の「ドナウ」河の渡河作戰

一、塞軍の對塙軍作戰

世界大戰の口火は塙國と塞爾比との間に點ぜられたのであるが作戰の本舞臺は歐洲大陸の他方面に

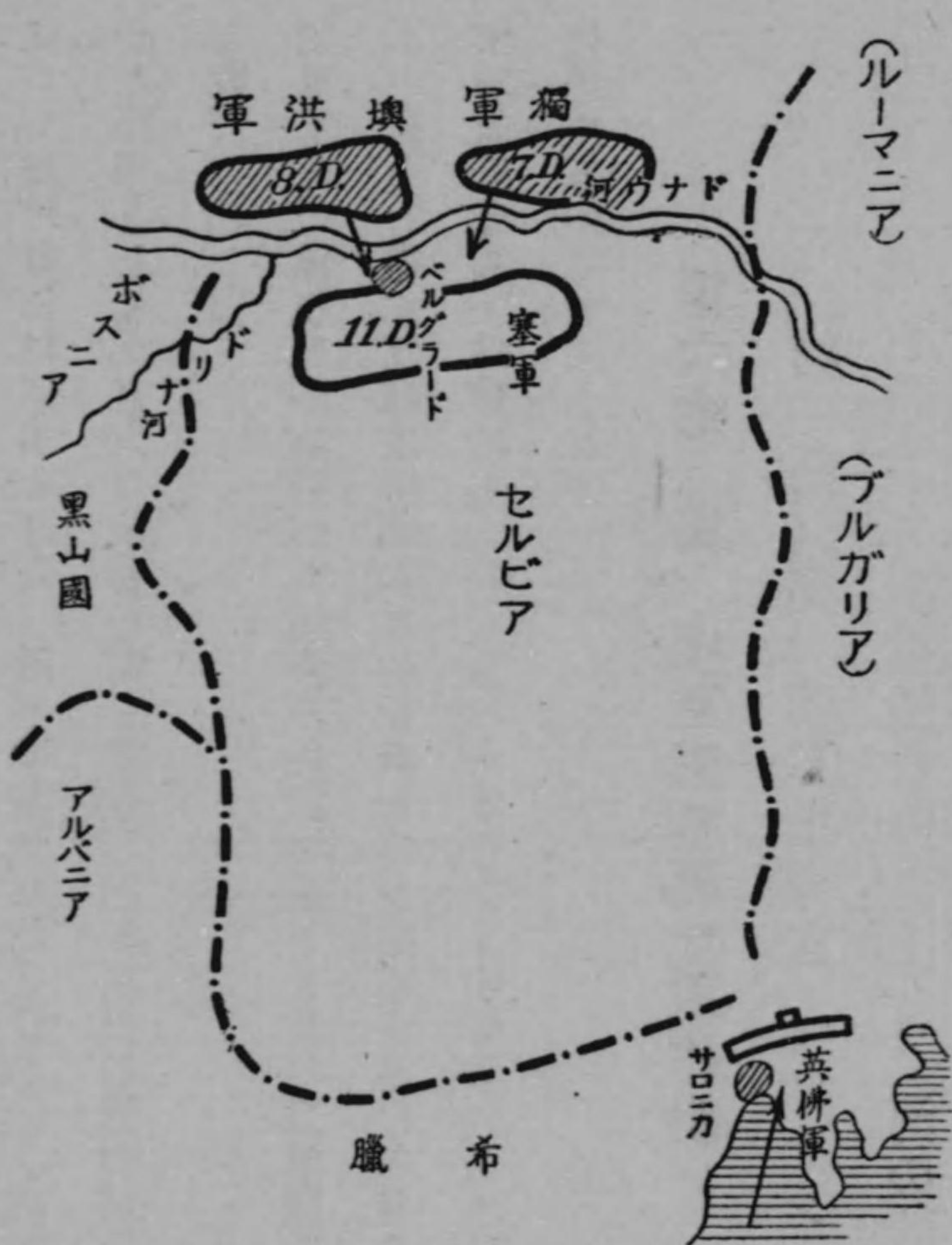
設けられ火元の方は閉却せられて居た。

大戰の初め奥國は塞國に徹底的大痛撃を與ふべく二十四師團の兵力を此の方面に集中したが對露作

戰の關係上一部を轉用せしも尙ほ十八師團の大兵を同方面に充當した。

塞爾比は元來其の國土貧弱、四邊皆陸で海口を有せず機を見て孰れかの方面に進出して海口を得んと民族發展の雄心勃々として抑へ難く其の鋭鋒の一端が世界大戰の雷管を衝撃したのである。

奥國より最後通牒を受くるや直ちに舉國動員を行ひ其の總兵力十五



師團を得其の與國黒山國も國民皆兵的に約三萬の軍隊を編成して之に協同した。

一九一四年七月二十八日來屢、奥軍と「ドナウ」河を距て又は渡河して戰を交へ一勝一敗未だ決定的

に至らず。

二、「マッケンゼン」將軍の「ドナウ」河渡河作戰

一五年九月對塞作戰に任じたる獨、奥軍の兵力は獨十師團、奥八師團であつて饒名噴々たる獨の「マッケンゼン」將軍之を指揮し其の作戰方針は奥軍の過去に採りたるものと全然趣を異にし概ね左の如き方式を採用せり。

主力を「ドナウ」北岸に絶對秘密に集中し約一箇月渡河の諸準備殊に諸材料を北岸近くに主として夜間列車にて秘送集積し附近一帶地區の住民を立退かして軍の機動防諜を完封し渡河即ち戰鬥の新方式を創意工夫し一舉に同河を渡河したる後塞國の使命を制扼すべき「モラヴァ」河谷を領有するに在りたり。

獨、奥軍は此の方針の下に最も隱密に「ドナウ」河北岸に兵力集結の後塞國の東北角及び西北隅方面に對し陽動を行ふて塞軍の注意を兩方面に惹くと同時に十月六日以來主力の渡河を「ベルグラッド」附近及「モラヴァ」河と「ドナウ」河の合流點附近に於て決行し塞軍必死の防戦に依つて死傷六萬を算するの難局に陥ちたが遂に敵の抵抗を排して九日「ベルグラッド」を占領し十一日には完全に渡河作戰に成功した。

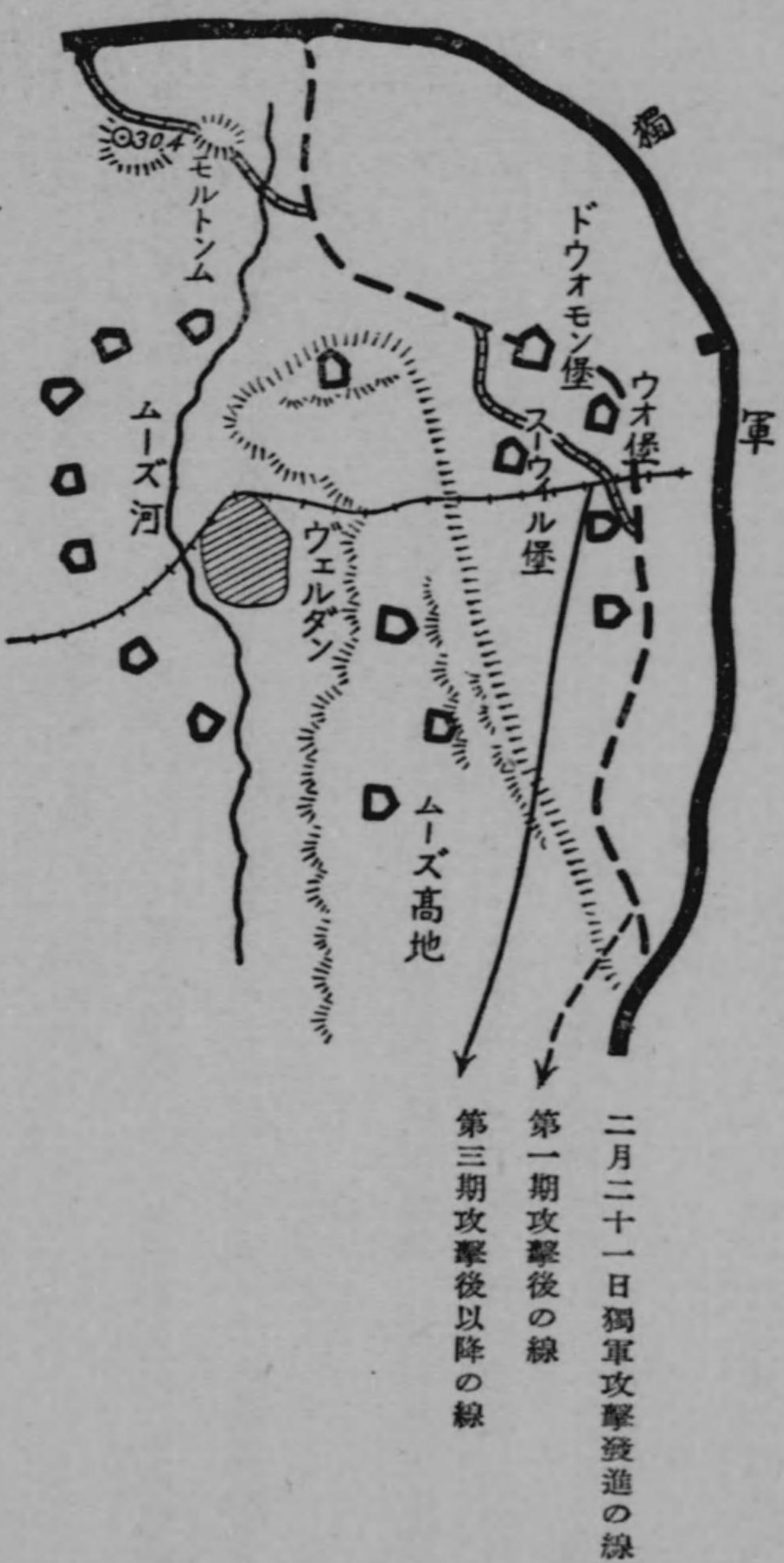
此の獨奥軍の「ドナウ」渡河は渡河作戰の一好戰例であると共に世界の軍事界に一新機軸を啓發せし

めたり。

第七章 西部戦線獨佛戰場

第一節 「ヴェルダン」攻防戦

一、獨軍が「ヴェルダン」を作戰目標としたる理由



一九一四、一九一五年は兩交戦國共戰意概して鞏く戰爭目的の貫徹に舉國一致の實を示せしが英の新陸軍建設と共に優勢なる海軍を有する聯合軍は徹底的長期戰覺悟の下に經濟封鎖を斷行し武力行使と併用し獨逸を苦しめんとするや戰爭第三年の一六年獨は遂に乾坤一擲の一大決戦に依り最後の勝利を求めんとし其の方面を西方戰場に選び「ヴェルダン」要塞を核心とする地區が其の衝點と決定せられた。

一、「ヴェルダン」要塞の價値

「ヴェルダン」は佛國東方の要點であつて「ムーズ」河に跨り古來の築城地にして東方國境要塞系の最左翼の據點として戰略上緊要なる位置を占め殊に「ムーズ」東方臺地を制扼して戰術戰略上の價値大なり防禦施設は差して新様式ならざるも特徴として堡壘線より五乃至八キロ前方に野戰陣地を構成しあり獨軍は主として獨皇太子軍をして此の陣地の攻防に終始せしめた感がある。

而して此の方面を作戰突破の目標としたのは此の地區の領有を以て佛國の戰意を奪ひ得ると信じたからである。

三、攻、防經過の概要

二月二十一日—三月二日、主として「ムーズ」河右岸地區に對する攻撃

三月三日—六月三十日、約三箇月に互り「ムーズ」河畔に攻撃を續行し六月に至り最後の努力死闘を

なした。

獨軍八師團、佛軍三師團

二月二十一日獨軍は猛烈なる砲撃を開始し翌日より歩兵の攻撃を始め「コール」森林地帯を獲得する爲壯烈なる血河屍山を越へて突進し遂に「ドゥモン」堡を攻略し漸次占領地域を擴大す。

佛軍又能く頑強に抵抗し三月二日には全く獨の攻撃頓挫す。

佛軍としては愈々獨の突破作戰たるを判断し熾に増援を送り終期には合計九師團に達し「ブタン」將軍をして同方面の指揮に任せしめた。

兩軍殊に獨軍の損害大にして死傷三分の二以上に上る部隊少からず其の補充に苦しんだ。

佛軍も又死傷三分の一に達する部隊も相當ある。

此の攻撃にて特筆すべきは「ムーズ」左岸にある佛の砲兵が常に獨軍の右側背を側射し多大の損害を與へ之が爲獨軍をして此の砲兵地區を攻略する必要に迫られ三月上旬來主として力を此の方面に用ひ有名なる死人丘「モルトンム」は彼我の爭奪戦となり最も激烈なる巷と化し三月八、九、十日の三日間は惡戦苦闘が演ぜられ慘憺たる結果を以て獨軍の敗に歸した所である。

今次大戰に佛軍に此の意氣有らば今少し頑強の抵抗をなし得たらう畢竟文弱の弊か自由の害か餘りにも脆き感がある。

四、「ヴェルダン」攻、防の結果

獨軍は攻撃方式としては今日奨用せらるる急襲法を行ひ短時間の砲撃の後歩兵の攻撃を砲撃の結果に密接に連繫する如く實施し歩、砲の協同は完全に行はれ殊に歩兵の攻撃隊形としても攻撃波と稱せらるる疎開縱深の避害隊勢を採り正々堂々の強襲を行ひしも畢竟要塞を攻略し得ざりしは獨軍攻撃の缺陷にあらずして佛軍の壯烈なる防戦の結果であると同時に獨軍が猛攻三箇月に生じたる損害は無量約五十萬人其の結果國民に多大の失望を感ぜしめ物資の缺乏と相俟ちて國內に大なる不安を醸した而して兵員の補充の困難を生じたるは爾後の作戦に多大の影響を及ぼしたのである。

佛軍は之に反し防守善戦其の成功の有形的原因は同要塞は孤立せず危急困難なる場合に相互に軍隊の増援、兵器彈藥の補充、糧秣の補給が完全に得られた點も重大であつた。

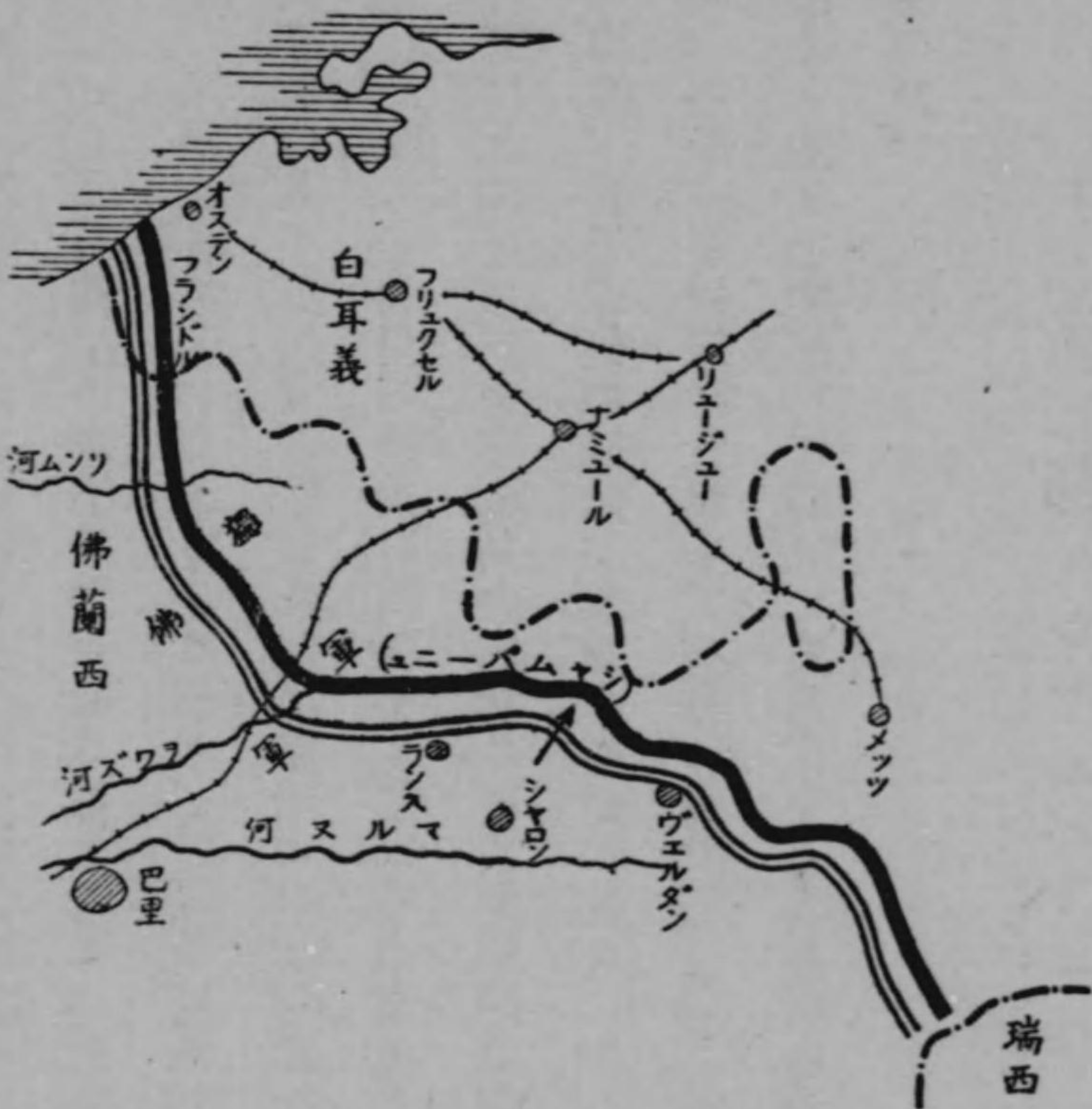
此の冬十一月佛軍は大舉して攻勢に出で「ヴォー」堡始め占領地域を奪還し十二月には例の彈幕射撃により歩兵を推進して獨軍を壓迫し翌年二月には大に之を破り佛國民の志氣を絶大に鼓舞したのであつた。

第二節 「シヤムパーニユ」の秋季攻勢

一、大戰第二年西部戦線英、佛の攻勢

瑞西より海岸に互る線に戦線は膠著して相對峙する彼我兩軍の兵力は左の如し。

- 獨逸軍 約九十二師團
- 聯合軍 約百〇四師團
 - 佛軍 八十八師團
 - 英軍 十二師團
 - 白軍 六師團(實力四師團)



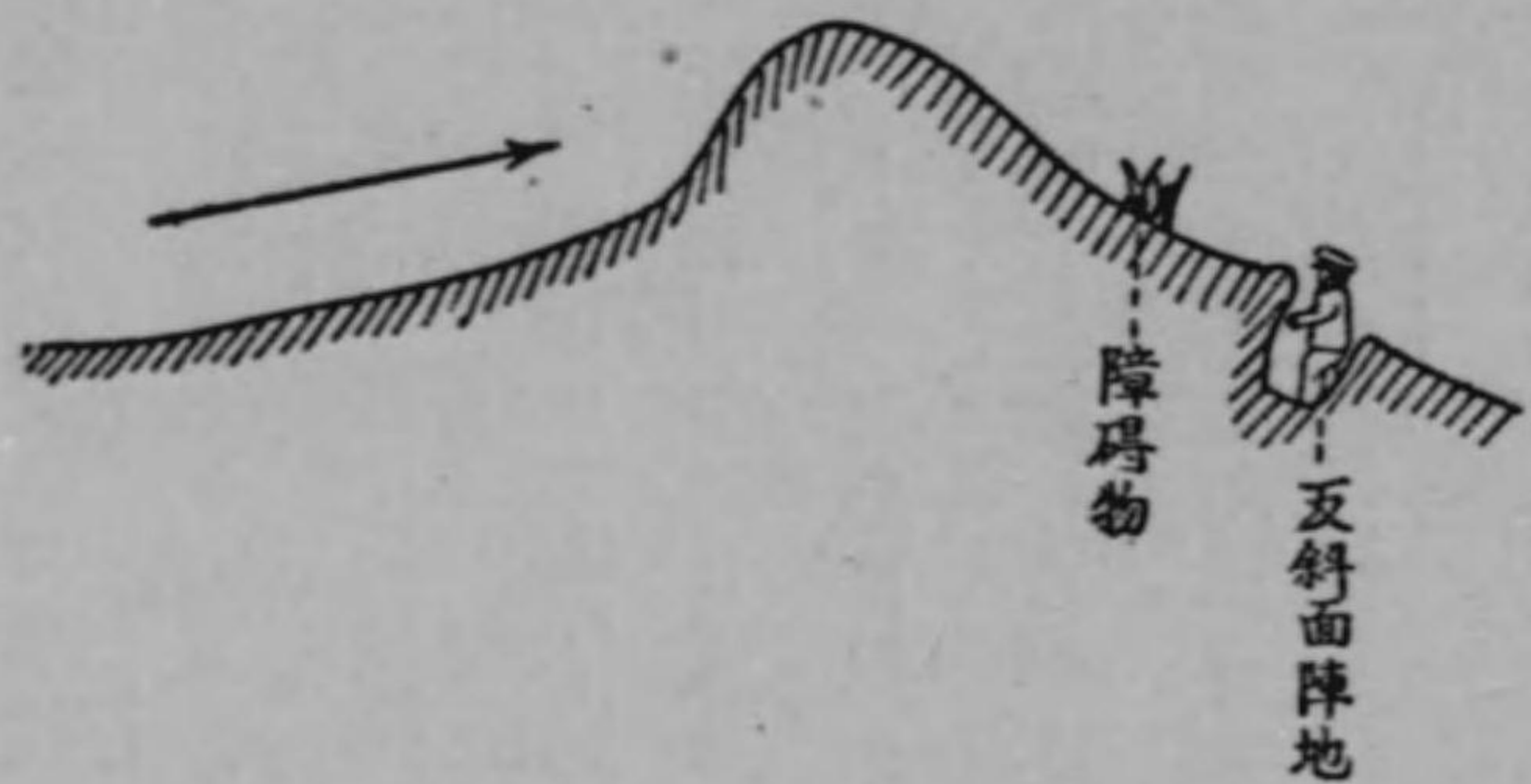
を企て春季の失敗を取り還へさんとして選ばれたる攻撃目標が「シヤムバーニユ」地方であつた。

二、佛軍の攻撃部署

佛軍は約四十キロ米の攻撃正面に對し二十六師團を配置し其の後方に騎兵八師團の大集團を準備し敵陣地を突破せば直ちに敵線内部への闖入を準備した。

九月二十二日—二十四日の三日間前古未曾有の猛烈なる準備砲撃(重砲八百七十二門、野砲千門餘にて攻撃準備より實行に互る六日間の射耗砲彈數實に約百七十萬發、日露戰役に日本軍が約一年半に互り要せし百〇三萬發に比し六日間で七十萬發多く費消す)を行ひ敵陣地を無人の境の如く破壊したる後二十五日朝より歩兵の攻撃に移り八吉米の正面に於て一舉に第一、第二の陣地を突破したが反對斜面上に造られたる敵の陣地は猛烈なる準備射撃に破壊を免れありたる第三陣地の鐵條網に引き懸かり加ふるに之を側防するM.G.に掃射せられて大損害を蒙りて攻撃頓挫し遂に九月二十七日に至り攻撃中止の已むなきに至り九匁の功を一箕に缺くこととなつた。

此の會戰に於て獨軍は可なりの危機に瀕し將に後方の陣地に引退せんとしたが最後の分秒時間の忍耐に依りて克く佛軍をして九匁の功を壊滅せしめた。



第八章 大戰の終結

一、同盟の攻撃失敗、屈伏と獨の頽勢

さすがに前後五年に亙る大戰も一九一八年獨軍が西方戰場にて最後の活躍を試みつゝある間其の與國たる奧、勃、土の諸國は窮乏甚だしく戰意に動搖を來し奧軍は獨軍に策應して伊軍に對し攻撃を行ひしも伊軍の逆襲に依りて頓挫し全戰局失敗の第一歩をなした。

巴爾幹方面に於ても九月中旬英、佛、伊、塞、希聯合軍(二十九師團)は獨、奧、勃同盟軍(二十四師團)に對し攻勢を取り疲弊したる敵軍を突破し遂に勃牙利は屈伏し一方土耳其に向ひ作戰し首都君府攻略を企圖したが遂に土も又屈伏す。

奧軍又伊軍の爲屈伏せられたると國內諸民族の離反に加へて勃、土が屈伏せしにより遂に伊軍に劍を捧げて屈伏した。

二、獨り獨逸の苦境

獨逸は一六年頃より國內の窮乏甚だしく加ふるに思想の動搖を生じ國民的團結に緩みを來たし硬軟兩派に分れ論争せしも結局軍事的形勢の優越に依り主戰派の勢を維持し戰爭を繼續せしが一八年七月聯合軍の連續不斷の攻勢に依り西方戰場の戰況頽勢に傾くや國民の大部戰意を喪ひ參謀總長「ヒ

ンデンブルグ」元帥も敗戦の免れ難きを察し北米大統領「ウィルソン」の公表せる休戦十四箇條は獨逸に甚だしく不利なるものでなかつたから同盟諸國の没落と共に孤軍奮闘刀折れ矢つきて十一月遂に正式講和を提議し米國の意を迎へて憲法を改正し國民の民主化を標榜し遂に皇帝「カイセル」二世は退位「ルーデンドルフ」參謀次長、同總長「ヒ」元帥共に職を辭し無條件的に休戦した時に一九一八年十一月十一日五時なり。

今や時去り時來りて二十有餘年獨逸國民の不屈不撓、薪嘗膽の辛苦は酬ひられ所も同じ場所も同じ列車内にて得意満面の「ヒ」總統が佛國代表に休戦條規を開陳したる感慨無量は歴史は繰返すの眞實を觀て獨、佛兩國國民の感や如何世界の情勢は刻々に變化する史實の行想や無限なりと謂ふべし。

第三篇 遭遇戦

第一章 遭遇戦に關する原則解説

其の一 遭遇戦の史的觀察

一、古來幾多の戰場に於て發生せし遭遇戦は時代の趨勢と統帥者の意志兵力、兵器に依り其の勝敗を現はし過去、日露戦役、第一次世界大戰乃至は今次の支那事變尙ほ發表せられたる範圍に於て推知し得る獨軍の「フランドル」平野及び北佛戰場に於ける各種戦闘に於て各局部毎に發生せる遭遇戦の經過を大觀して所要の綜合的判決を求むれば今次の作戰要務令に新に示されたる左記項目で凡てを知ることが出来る。

- 1、我が豫期を以て敵の不期に當る……（作令六八）
- 2、狀況不明の場合を常態とす（同六九）
- 3、縦隊の側面より不意に敵の攻撃を受くることあり（同七五）
- 4、師團長は不意に敵と衝突する場合……（同七六）
- 5、戦車を重點方面に使用……或は敵砲兵、司令部を急襲する等……（同八一）

6、戦車をして直接歩兵と協同せしむる場合の方法（同八二）

7、撤毒地域の搜索と通過併に制毒法（同九三）

8、歩、戦、砲の協同方法（同九四、九五其の他）

以上は從來遭遇戦と云へば一般的に攻勢企圖を有する彼我兩軍が相對進し其の兵力、進路、到達地點、時刻等も刻々兩軍指揮官の知得の上で衝突し戦闘を惹起し勝敗を決定するやうに考へられたるも前述の如く各種の場合に於ける遭遇戦を史的に觀察して見ると

1、遭遇戦は不期線の場合多し（沙河、黑溝臺の會戦等も師團長としては敵の南下しあることは承知しあるも刻々の敵情に關しては何等關知することなし其の他日露戦役間に起りたる場合は多く不期の状態を呈した）

2、敵狀の不明なりしこと、火器の進歩により戦闘時間の増大せしことは通常にして軍隊指揮官の指導も又花火線光式でない。

3、先制の利を失ひ果敢斷行を缺きし場合は通常失敗しあり。

4、敵に先じて要點を奪取し歩、戦、砲の協同適確にして態勢の優越を企圖せしものは通常有利の結果を獲得せり。

5、戦闘繼續時間は特種地形は別として各戦闘共其の日の中に終結を告げしものは稀なり通常戦

場、離脱は夜間に行はる。

二、要するに遭遇戦が多くの場合不期戦を以て惹起せられ此の際統帥の卓越し軍隊の志氣振ひ各兵種の協同連繫有利なる者が勝利者であることは幾多遭遇戦例の大數觀察上より立證せらるる所である。

飛行機の發達につれ彼我共に其の情況は明瞭となり不期戦が惹起さるるが如きは變態の如き觀なきにしもあらざるも事實は天候、夜間の行動(殊に將來戦にては多く夜間利用の行動多からん)等により各、其の企圖を絶對的に秘匿し常に敵の意表外に出でんとする趨勢は殊に最近著しく獎勵せられある關係上將來戦に於ても同様屢、不期なる場合多く實現せらるるならん。

特に現時愈、發達せる機械化部隊の活躍は、其の性能上迅速果敢なる機動により敵の混亂を企圖し又は後方部隊の襲撃を期待する爲各局地局部に不意且つ不規の小規模の遭遇戦を惹起することは當然ならん。

從來學習上に將た演習上に一定の型の如く練磨せられし兩軍の態勢が互格で例令ば敵の前衛が展開を完了すれば我が前衛も展開を終り敵の全力が展開を完了すれば我も又同様の状態となり互に一進一退遂に突撃で終ると云ふやうな型は實際問題としては餘り價値はなく結局凡らゆる手段方法を講じて我が戦闘準備を敵に對して優越するやうにし常に敵に對し機先を制し敵の意表外に出てて之を

混亂せしめ撃滅する指導方策が最も肝要であることを教へて居るのである。

以下遭遇戦につき作令の各條項の原則に示されたる重要な事項に關し解説をする。

其の二 原則の解説

一、遭遇戦の要訣(作令六七)

先制を獲得するにある之が爲敵に先だちて戦闘を準備し有利の状態に展開し戦闘の初動より戦勢を支配すること緊要である。

これは改めて説明するまでもなく從來遭遇戦と云へば一も二もなく先制獲得の意味で吾れ勝ちに戦場に飛び入り能事終りとなすの弊害が有つたが此の先制とは上は高級指揮官より下は一兵に至るまで能く機宜に適する戦闘遂行上の著意と手段を實行し戦術又は戦略上の手段を夫々の職權に應じて迅速果敢に決定し諸兵種又協同戮力して搜索、要點奪取に努力敵の企圖を妨害して戦闘の準備を整へ、攻撃の態勢を完了してこそ始めて先制の利を獲得すと云ひ得るのである。

有利の態勢に軍隊を展開し戦闘と初同……とは如何なる意義であるかと云へば

1、軍隊を統一して戦闘に參與せしむる場合

イ、速かに決戦を企圖する正面の決定

- ロ、迅速なる展開完了
- ハ、成し得る限り適當なる距離に敵を包圍的態勢をとること
- ニ、砲兵威力を最も有利に使用する著意と歩、砲の緊密なる協同
- ホ、要地、要點(砲兵の觀測所を含む)の占領
- ヘ、戰車使用方面の決定と其の區署
- 2、逐次に展開する場合

所謂前衛が敵に對し其の弱點(敵の不利なる状態)等を觀破し又は本隊展開を有利ならしむる爲獨力攻撃を開始せし場合にありては飽くまで前衛の戰闘を有利ならしむる手段を講じ我が兵力特に兵器威力に於て其の優越を發揮し地形上の利益を獲得し其の戰力を擴大して敵を壓倒し得る如く展開するのである。

要するに先制の利を得んとするは單に形式上の態勢をとりたりとて何等の効果あるものでなく飽くまで戰闘力の要素たる戰闘の諸準備の完了茲に各級指揮官の情況に應ずる戰機の看破及び捕捉其他戰闘初期に於ける指揮を適切ならしむることが遭遇戰指導の要訣であらねばならぬ。

二、我が豫期を以て敵の不期に當るは先制獲得の第一要件である(作令六八)。

本條は作令に新に示されたることで遭遇戰としては理想的に先制を獲得し得る狀況である。

之を戰史に徴するに奉天會戰中撫順附近の近衛師團が敵の退路に迫り已むを得ず露軍を應戰せしめたるが如き或は遼陽會戰中高梁畑の中に於て屢、發生せし半不期戰の遭遇又は歐洲大戰中に發生せし戰例中佛、白、獨國境の會戰特に東方戰場「ガリチエン」會戰の一局部戰に於て之を認め得べく就中獨、露兩軍の「ロツズ」附近の會戰中「ガルユツ」附近の戰闘は露軍側としては不期的に遭遇したる戰例である。

斯の如く幾多の實例に鑑み成し得れば常に諜報と搜索により敵をして不期ならしめ其の意表に出でて常に先制の獲得を得ることが肝要である所以である。

三、各種の手段を盡すと雖も狀況明確ならざるを常態とし……(作令六九)

戰場に於て狀況を速かに審かにし敵の戰略、戰術上の企圖を判斷し得る程度に精確なる情報を得ることは實際問題として殆んど不可能なることが常態である。

上空よりする飛行機、地上よりする騎兵の各種搜索は勿論有效適切なる各種情報獲得に努力するも前述の如く天候、氣象、敵の妨害、反撃、其の企圖の秘匿行動は容易に真相を捉へ得ざる事多かるべく殊に近時各列強軍の採用する夜間利用の戰前機動は愈、擴大せられ不意且突嗟的に現出せんとする傾向あるに於ては一層敵情を明確に知得することは困難であると云ひ得るのである。

然らば敵情不明なるの故を以て遲疑荏苒して何等なすことなきかと云へば大なる誤りである何んと

なれば遭遇戦は飽くまで先制の利を獲て有利に展開し初同の第一歩より戦勢を支配せねばならぬから最初の迅速適切なる決意如何は最後迄大影響を來たし遂には敵の爲壓倒さるるに至る不利があるからである。

各級指揮官としては各種の手段を盡くして搜索すると共に全般の状況殊に任務に基き其の企圖を劃定し戦場の地形を判断し自主的に戦闘指導の方針を定め之に適應する如く迅速に部署をなし決然戦勢を支配せねばならぬのである。

四、師團長は敵と接觸の機近くに至れば任務に基き一般の状況を判断し速かに決戦を求めんとする方面の決定と其の企圖を部下指揮官特に前衛司令官に明示して行動の憑據を與へ且本隊の各部隊をして成るべく速かに戦場に到着せしむる處置すること(作令七〇)。

遭遇戦指導要領としての根本的原則であつて行軍—戦闘の轉移關係を明確に示し特に師團長として敵情、地形の不明は覺悟の上で極力當面の搜索に依り得たる状況を基礎として任務に基き一般の状況を判断し己れの企圖を決定して前衛司令官に一刻も早く之を明示し其の行動を意途に合せしめねばならぬ。

要約すれば左の順序に指導することとなる。

1、速かに決戦を求めんとする方面の決定

2、企圖を速かに前衛司令官に明示して行動の憑據を與へる

3、本隊の各部隊を成るべく速かに戦場に到着せしむる處置

(各部隊の分進、進路の指示、所要の掩護地點確保の指示、砲兵を有利に使用等)

4、各縦隊に適當なる前進方向を指示して包圍の態勢を成形せしめ努めて多くの兵力を以て益、遠く敵の側背を脅威せしむること

(今日迄の戦例中敵の翼側を包圍し勝利の原因をなしたる例は頗る多く特に各局部的に包圍を行ひ戦勝の因をなすもの多く就中敵に對し潰滅的の大打撃は眞に敵の側背深く進入する徹底的包圍の敢行にあることを知らざる可らず彼の第一大戦初期の「マルヌ」河に向つて怒濤の如く追撃せし獨軍が巴里軍の起死回生の側背逆襲的攻勢に依り一舉に攻守形を轉じて佛軍の反轉攻勢を成功せしめたるが如く如何に翼側包圍の肝要なるかを知ることが出来る)

要するに遭遇戦と雖も上級指揮官の意圖外に奔逸することは絶對に出来ないが戦況は刻々に變化し各局部毎には豫期せぬ戦闘が隨所に展開さるることは陣地攻撃と著しく趣を異にするから各級指揮官の獨斷専行は多くなるが其の指揮は飽くまで百方手段を盡して上級指揮官の意圖に合し大局的見地よりして全軍の戦勝を目標とし局部の戦果に満足することなく機動と先制に心懸けねばならぬ。

五、搜索及掩護と諸兵種の行動(作令七一)

搜索の必要な事は何れの戦闘に關しても凡ての場合に然りであるが特に遭遇戦では彼我共に狀況不明なる場合が多いので若し一方軍が萬難を排し有力精確なる狀況を知つたとなれば其の戦闘の勝敗は已に戦はずして明瞭であるから苟も搜索に任ずる諸兵は徹底的努力に依り自己の搜索に勉むると共に他面敵の搜索を極力妨害せねばならぬことは自明の理である。

そこで空中勢力の關係と彼我飛行機の優劣によるがなし得る限り速かに高級指揮官が待望しある敵の前進部署なり兵力、到着地點、時刻等を時々刻々適時適切に報告するのが最も肝要であるが如何にせん獨舞臺で飛ぶ場合の外必ず相對的の敵機もあり天候、氣象を加はつて平素の演習でも中々思ふやうには行はれぬものである況んや戰場殊に優秀、多量と誇る某國軍に對し如何に精神的威力と猛訓練の技能を以てしても豫期通りには行かぬ又地上搜索の騎兵としても同一狀況にありて適時適切に精確なる報告を期し難いけれども事苟くも全軍勝敗の分かるる重大なる責務を負擔する以上、全滅を期し萬死を冒して其の本務に邁進せねばならぬのである。

騎兵部隊としては今一つ大切な事は豫想戰場と確定せば要地要點の確保が將來友軍の展開據點となり砲兵推進の掩護を成形し一種の掩蔽物をなして敵の意表外に出づる唯一の肝要なる手段となるのである。

六、前衛の行動に就て(作令七二)

遭遇戦に於ける前衛行動の適否が如何に大切であり前衛司令官が戰機に通曉しあると然らずとにより全軍の勝敗を左右するかは今更述ぶるの要なきも敵に對し絶對に先制の利を占め戦闘の初動より戰勢を支配し常に優越の隊勢を以て本隊の展開を企圖の如く導かねばならぬ重大の責務があるされば本條に則り二、三肝要なる原則につき解説して見やう。

- 1、本隊指揮官の企圖を十分承知し之に満足と與ふる如く行動するを本旨とし時によりては不期戦を惹起せる場合獨斷前衛を部署して機を失せず戦闘の初動を有利にせねばならぬ。
- 2、戰場たるべき範圍内の要地、要點は神速果敢に奪取確保するの警意と手段を要する之が爲前衛獨力にて戦闘を開始することもある。
- 3、砲兵を有利に使用する爲情報の収集特に火制すべき目標の所在を明確ならしめ特に砲兵の觀測所を速かに提供することが肝要である。
- 4、狀況不明なるか地形地物の關係上全く不期の戦ひを開始したる場合は從來の戰史に屢々認むる所で前衛司令官としては絶へず此の場合の處置を稽へ愈々實現せば何等の躊躇なく斷乎として敵を攻撃し戰場の要點を速かに占領し上級指揮官に決心の資料と行動の自由を得せしめなくてはならぬ。
- 5、前衛獨力にて攻撃する場合

イ、敵が不利なる情態にあると看破せし時

ロ、前衛の神速果敢なる行動に依り我が本隊が不利の状態を脱却し得ると判断せし時

ハ、戦鬪を惹起するとも必ず奪取すべき要地、要點を先制により占據せんとする時

ニ、追撃中敵主力の行動を制肘するため其の後衛部隊又は側衛を積極果敢に攻撃するを有利とする時

6、前衛砲兵の用法

前衛砲兵は迅速に歩兵戦鬪に協力し得るを主眼として前衛司令官としても第一に良好なる觀測所を提供し砲兵隊長の意見を尊重して積極的に敵の展開を妨害し成し得れば砲兵の最大射程を利用して交通路上の要點に射弾を集中して敵主力の行動を妨害し精神的痛撃を與へて敵を不利なる状態に陥らしむるを要す之れが爲飛行機との連絡は勿論なるも氣球の利用は高度大なる展望觀測に有利なる協力を求め得るものとす。

7、配屬戰車の用法

遭遇戦に於ける前衛配屬戰車は近時列強共著しく其の用法を重視し今次大戰に於て獨軍が破竹の勢を以て聯合軍を突破せしも要は有力なる戰車の強襲と之に伴ふ歩兵、機械化部隊の突進の結果である。

されば我が作令にも戰車をして緊急なる歩兵戦鬪に參與せしめ或は好機に乘じ砲兵とか司令部の如き指揮組織を奇襲せしめ戦鬪初期に於ける敵の士氣を挫折せしむることを要求してゐる。

七、遭遇戦の戦鬪指導の要領に就て(作令七四)

1、逐次展開

敵の弱點を捕捉し神速に之を攻撃せんとするか………(イ)

前衛の既に獲得せる利益を確保或は増大せんとする場合………(ロ)

右(イ)(ロ)の場合には各縦隊及逐次到着する本隊の各部隊をして直ちに戦鬪に加入せしむ。

2、全隊を統一して展開

狀況之を要せざる場合にして師團長としては通常諸隊を展開せしめ歩、戦、砲の協同關係を律してから歩兵の攻撃前進を開始せしむるを可とすることがある。

要はこの爲に立ち遅れたり先制の利を奪はれたりしては斷じて不可なので最小限度の時間と方法によりて歩、戦、砲特に歩、砲の協同を律し歩兵の展開終るや否や直ちに前進と云ふ段取りにならなければ折角の遭遇戦が守勢となり初動から敵に支配せられて遂には各方面共壓倒、包圍の隊勢にならぬやう嚴に戒めなければならぬ。

八、側面より不意に敵の攻撃を受けたる場合各指揮官の處置(作令七五)

歐洲大戰及今次支那事變の體驗より新に規正せられたる各級指揮官が斯の如き不期遭遇の場合に於ける處置すべき件を明示せられたもので概ね左の著意が必要である。

- 1、其の附近の指揮官は直ちに果敢なる攻撃を執行する。
- 2、其の方面の上級指揮官、各縦隊(梯團)長等は斷乎たる決意を以て機敏なる行動に出で速かに其の上級指揮官に連絡して報告する。
- 3、凡て遲疑逡巡は嚴禁たると共に局所の狀況に眩惑せられ全局の判斷を誤らぬこと。
- 4、攻撃部署は拙速を尙ぶ。
- 5、過度に戦闘正面を擴大せざること。
- 6、特に歩、戰、砲の孤立を戒め且適時豫備隊を控置して逐次統制ある戦闘指導をなすこと。
- 7、隣接して前進中の部隊は他縦隊の戦闘に際しては直ちに敵を包圍する如く機を失せず戦闘に參與すること。

九、不期戰に於ける師團長戰鬥指導と其の處置(作令七六)

- 1、全局の判斷に基き速かに主動の地位を獲得す。
 - 2、決戰方面を決定し機を失せず各方面に惹起せる戦闘を統一する。
- 要するに本狀況に在りては兎角混雜し易く従つて各級の指揮適切を缺き各兵特に歩、砲の協同緊密

ならざるに至り自然各個の戦闘に陥り易く其の總戦力を統合し難きを常態とするから出來得る限り明確なる方針を定め不期の狀況に牽かるることなく確實に部下を掌握して諸兵の協同を律し必要なる豫備隊を控置し狀況の變化に應ずると共に警戒を嚴にし敵機械化部隊の奇襲を豫防し斷乎たる決意を以て戦闘を指導すべきものである。

此の際の飛行機の活躍は大なる價值を發揮するから之を有すれば遺憾なく犠牲的に其の能力を發揮せしめねばならぬ。

一〇、敵が我先んじて戦闘準備を完了すべきを察知したる場合(作令七七)

本狀況に於て特に注意すべきは

「展開區域の選定を適切にし且必要なる兵力を展開する迄眞面目の戦闘を避くるを要す」

此の意義を十分に呑み込まんと遂には立遅れて消極的となり守勢となり不利なる態勢に陥ることとなる。

元來遭遇戰は實際敵狀不明を常態とし一々手に取る如く察知し得るものでないことは前述の通りで敵が砲兵を急進せしめて我に對し射撃を開始したとか或は歩、騎兵の一部が已に戦場の要地を占めたとか位で敵は我先んじて戦闘準備を完了したりと速斷するは禁物である然らばどの程度の狀況ならば本文の如き處置をとらねばならんかと言へば此れ亦一定の型式を示して垂範するの愚となる

虞あるから勿論明示は出来ぬが要は前衛司令官の明敏なる一般觀察と眼前に展開せる敵情を基とし周到なる搜索の報告に依り判断するより外にないのである高級指揮官としても飛行機、騎兵部隊の諸報告を綜合して判定せねばならぬ。

此の際砲兵の使用に就て砲兵を有効且適切に使用するは敵の歩兵若しくは我が歩兵の行動を妨害する敵砲兵を極力制壓するにある。

特に前衛砲兵は廣地域を射撃し得べき陣地を占領するに勉め要すれば其の陣地を適宜分散するのと。

之が爲第一に著意するは最も良好なる觀測所の獲得であつて司令官としては極力之を領有せしむる必要がある。

分散配置目的は勿論各方面に射界を廣く求むると共に其の配置に依り敵を欺騙せしめ戦況判断を誤らしむるに效果あるものである。

一、警戒部隊敵と接觸し若しくは其の一部戦闘を開始するに至り始めて敵の已に防禦しあるを明かにしたる場合(作令七八)

此の場合展開は陣地攻撃に準ずべしと雖勉めて積極機敏に動作し以て敵に準備を與へざるにあり。

即ち敵としては何等かの理由により守勢的展開を先んじたるものなれば我は此の機を看破して敵に寸隙を與へず従つて我の展開せざるに乘じ決然攻勢に轉ずるが如き弱點を暴露せず斷乎として概ね左の如き處置を實行するを要す。

- 1、積極的に敵の警戒部隊の如きは之を撃退す。
- 2、速かに砲兵の射撃準備を完了せしめ歩、砲の協同を密接ならしむ。
- 3、攻撃準備等に手間取ることなく各級指揮官は輕快神速に攻撃部署を決定して其の實行に著手せしむること。

二、師團命令に示すべき主要事項に就て(作令七九)

- 1、決戦を企圖する方面の明示

之れは師團長が現在迄に得たる諸情報に基き自主的考察の下に其の主力を使用し砲兵威力の協力を之に伴はしむる方面の意義にして攻撃重點とは稍、趣きを異にしあるは遭遇戦の性質上已むを得ざる所なり。

例へば「師團は主力を以て日本街道以北の地區より敵の左翼方面に向ひ攻撃せんとす」と云ふが如し。

- 2、歩兵の爲示すべき事項

イ、第一線に出すべき部隊

ロ、攻撃前進方向

陣地攻撃と違ひ敵が展開中なるか或は未だ展開せざるか等の極めて微妙の時機に示すべきものなれば通常は著明な地區（一文字山或は摺鉢山）地物（二本松より左白壁の家に互る間等）に向ひ攻撃前進せしむる如く指導するのである。

ハ、攻撃目標

これは概ね敵の展開線が豫知せられたるか或は敵が我に先んじて展開したやうな場合に某部隊は（イ）村に某部隊は（ロ）村に向ひ攻撃すべしと概ね指示し得るのである。

ニ、展開區域

狀況に依り示し得るので必ずしもと云ふ意味はないが統一展開の場合には通常明示するのが各部隊の混淆を來すことを防止し得て都合がよい例は歩兵第一旅團は（イ）村より（ロ）村に互り展開し……とするが逐次に前衛の戦闘に参加するやうな場合には何んとしても示しやうのない場合が多いから寧ろ某隊は前衛の右翼に連繫して展開し……と云ふことになる。

ホ、戦闘地域

之を示し得る場合は敵の展開線が概ね現實的に判定し得たる時にして例へば某隊は某部隊の右

翼に展開し滿鮮街道（含む）以西の地區より（イ）、（ロ）村に向ひ……。

然しながら敵の展開線も位置も未だ明確ならざるが如き場合には示さんとするも示し得ざるので強ひて之を示す時は却つて實狀に適せざることとなる虞れがあるのである。

三、戦車の爲すべき事項

遭遇戦に於て戦車の活躍は先制の利を占め我が態勢を優越ならしむる上に多大の効果を來すもので現在併に將來戦に於て其の使用の適否と活動とは戦局を支配するに重大の價値を有す。

イ、歩兵部隊に配属する時は左の件を明示す。

配属すべき戦車兵力、時機要すれば配属期間等

ロ、師團長直轄する時は左の如く指示す。

攻撃目標若しくは協同すべき部隊

戦車行動の要領

任務達成後の行動等

狀況により單に達成すべき目的のみを示して行動せしむる

四、砲兵の爲すべき事項

イ、火力運用の準據となるべき大綱

之れは師團長の企圖する戰鬪指導の方針に適應せしむる如く初めより狀況を判斷し戰鬪の推移に應じて適確に歩、戰、砲の協同火力を發揮し得る如く指示するにあり。

即ち最初前衛の戰鬪に協力すると共に敵の展開を妨害し敵砲兵の行動併に射撃を制壓し引き續き(イ)村方面の師團決戰方面に主火力を集中せしむる等砲兵火力の運用上の準據を與ふ。

□、陣地と爲すべき地域

遭遇戰に於ける砲兵の陣地となすべき廣き意味の地域を指示し砲兵隊長をして戰鬪目的併に技術上適當に夫々砲兵を配置せしむるのである例へば砲兵隊は(A)村北側地區附近に陣地を占領し……と示せばよいのである。

唯だ考慮すべきは其の地域を示すに成るべく進入容易で展開迅速、地幅又充分で附近に優秀良好なる觀測所のある事である。

ハ、歩兵に配屬すべき兵力及時機

狀況の推移を判斷し將來右翼隊に砲兵一大隊を配屬して敵の左翼突破を容易ならしめんとする時等は豫め其の意圖を歩、砲隊長に指示して戰鬪計畫を考慮せしめ置き時機は師團長自主的に決定するを本義とするも或は狀況により命ずるかは一に當時の狀況に依るものである。

5、騎兵、高射砲、工兵、飛行機、通信部隊、豫備隊等の指示事項は後章戰史研究と共に狀況に即

して解説することにする。

6、命令下達の方法

イ、通常先づ各別に命令し速かに展開の行動若しくは攻撃前進せしむ。

ロ、次で要すれば合同の命令を以て全般を統一す。

要するに遭遇戰に在りては先づ各別に命令して速かに展開に移り攻撃前進せしむるを本則とし爾後狀況の判明するに従ひ歩、戰、砲の協同を適切ならしむるを有利とする場合に要すれば合同の命令を下すのである。

一三、戰車の用途(作令八一)

師團長は戰車を左の如く使用するを通常とす。

1、重點方面に於ける歩兵の決戰參與

2、戰勢を左右すべき好機の捕捉

イ、要點の爭奪

ロ、敵の展開混亂に陥らしむ

ハ、砲兵、司令部の急襲

3、敵戰車活動せる狀況に於ては我が戰車を以て之が撃破せしむ此の際我が砲兵、飛行機を成し得

る限り協力せしむ。

第一の場合即ち歩兵の決戦に参加する戦車の兵力大なるときは直接協同する戦車群と挺進する戦車群に區分して使用することあり。

一四、歩、戦の直接協同要領（作令八二）

之の場合主として歩兵指揮官の企圖に依り歩、戦の攻撃部署は決定せらるるも要は戦車として左の戦闘任務に服するのである。

1、適時我が歩兵の攻撃を妨害する敵の重火器等を攻撃するを通常とす。

其の要領

攻撃目標の状態、地形に應じ歩兵の正面若しくは側方より之を使用し通常聯隊長以上に於て自ら之を使用す。

2、挺進戦車

有力なる戦車群を遠く挺進せしむる場合例へば敵の後方遮断或は砲兵陣地の奇襲等特別なる目的を有する場合には之が支援の爲機動性を有する機械化部隊（乗車歩兵、装甲自動車、装甲牽引砲兵等）の快速掩護隊を配屬せしむるを有利とす。

一五、工兵の用途（作令八四）

1、砲兵の展開援助（主として交通作業）

2、戦車、輕装甲車の行動援助

3、要すれば敵機甲部隊を阻止の爲應急所要の作業

4、將來砲兵陣地の變換を考慮して必要なる作業偵察と準備

以上の用途に充つる爲工兵の大部を前衛に配屬しあれば適置に所要の兵力を直轄とすること緊要である。

一六、消毒部隊の用途（作令八五）

通常重點方面の第一線部隊に配屬す時として第一線部隊の直後に跟隨せしめ適時之を使用することもある。

瓦斯防護の爲輕易なる防毒具は所要に應じ之を適時第一線部隊必要の人員に分配す。

一七、彈藥補充について（作令八六）

輜重兵聯隊長に左の件を命ずると共に各隊に通報す。

1、彈藥交付所の位置

2、彈藥の種類と數量

3、要すれば交付すべき部隊、交付開始の時刻、その他必要事項

一八、歩、砲攻撃要領(作令八七、八八、八九、九〇、九一、九二)

1、展開と隊形

各自所要の搜索及警戒を嚴にす特に不期戦の場合に於て然りとす。

地形、氣象の利用に注意するも之が爲時間を要することは適當でないが勉めて地上、天空に對し遮蔽することの著意は大切である。

氣象は荒天の時は上空視察に考慮少く黄塵萬丈の如き場合は彼我共に不期遭遇が多く一面又大に利用も出来る。

隊形と運動に顧慮すべきは敵砲火及上空よりの視察である。

地形に應じ適時適切なる隊形の選擇と行動の迅速により敵砲火の損害を避けることが肝要である遭遇戦の初期に於ては敵との距離も尙ほ遠く其の砲兵の射撃準備も十分でないのが通常であるから先づ敵の目視を避けることが第一主義で漸次敵に近接するに至らば損害を避くる手段と方法を専念にせねばならぬ何れにせよ自己の任務達成のためには迅速に行動し所要の目的を達成することが肝要である。

2、歩兵の前進隊勢

イ、第一線部隊は成るべく長く集結せる態勢を以て敵に近接す。

ロ、敵砲兵の有効射撃を被る顧慮あるに至れば適置疎開す。

ハ、狀況必ずしも明確を缺く場合多きため初めは十分なる縦長區分を爲し戦況の變化に應じ得ること。

ニ、第一線部隊は巧に機動を行ひて各當面の敵の弱點を衝き之を壓倒するに勉むること。

3、歩兵の戦闘

イ、戦闘を開始せば火力と運動との調和に依り敵を壓倒す。

ロ、我が戦車及砲兵との連絡を密切にし巧に其の戦果を利用し絶へず近迫す。

ハ、豫備隊と第一線部隊との關係位置。

通常決戦を企圖する方面に於て爾後の使用に便なる如く位置し上空及側背の警戒に任じつゝ地區より地區に前進す。

4、砲兵の戦闘

戦機に適應する如く概ね左の二方法に依り戦闘を指導す。

即ち主力を以て逐次戦場に現出する敵の歩、砲兵を壓倒し以て全局に於ける先制獲得を成す。

或は當初より歩兵直接協同の兵力を大にし歩、砲の協同を緊密ならしむ。
前衛砲兵について

前衛が任務を達成完了したならば師團長としては砲兵隊長の令下に復歸せしむるのが通常であるが状況に依りては前衛は獨力戦闘を開始し勝敗未だ決せず本隊砲兵も續々之に参加して今や酣なると云ふやうな場合には寧ろ配屬的の性質を有するに至り之を復歸せしむることが却つて戦闘威力を減殺し延いて師團の戦力を殺ぐことになるから餘程其の時機を觀破して好機にやらねばならぬ之れ本文に連絡略、成り各部隊を確實に掌握し得るに至る迄依然前任務を繼續せしむるを通常とすとある所以である。

長射程砲射撃について

砲兵任務を有爲に達成する爲には成るべく早く敵情を明らかにすることが肝要で之が爲配屬飛行機と密接に協力し速かに敵の到達地區、攻撃部署を知り成し得る限り長射程の射撃に依り敵部隊を混亂せしめ或は要地、要點に射弾を集中して展開を妨害するは最も有效適切なる手段である。

砲兵の射撃目標

攻撃前進の初期

主として敵砲兵及遠距離より射撃する敵M.G.等を射撃し歩兵の前進掩護

次期は

主火力を専ら敵歩兵に集中して直接我が歩兵を支援し一部を以て敵の砲兵或は其の後方部隊を制

壓す。

状況に依りては當初より主なる火力を敵の歩兵に集中して壓倒するを必要とす。

一九 撤毒地域の搜索と制毒(作令九三)

速かに搜索し許す範圍に於て迂回するを得策とするも已む得ざれば輕易なる防毒具を使用して通過し所要に應じ制毒の處置を講ずるも要すれば強行通過を行ふを斷行す。

制毒は戦況、撤毒地域の狀態、使用し得べき資材等を考慮し必要なる事項を命ず。

二〇、歩、戰、砲協同の要訣(作令九四)

歩、戰、砲の協同目的は戰車及砲兵をして歩兵の任務を達成せしむるのが主眼である即ち歩兵は飽くまで我が戰、砲の獲得せる戦果を利用して之を擴大するので豫め三者としては其の目的を達成するに必要な要綱を協定し飽くまで確實なる實行性を堅持し其の効果を期待するのである。

遭遇戦の性質上刻々變化する状況に處し獨斷協同機宜を制するに遺憾なからしむることが緊要である。

戰車をして歩兵の突撃と略、同時に突進せしむる場合

陣地攻撃の要領に準し歩、戰、砲協同の關係を協定す。

戰車を敵線深く挺進せしむる場合

本場合併に敵の重火器を攻撃せんが爲步兵に先行して敵中に突進せしむる場合に於ても砲兵爲し得れば步兵砲は適時敵の對戰車火砲を制壓し或は發煙彈射撃を行ひ必要なる支援を行ふと共に我が戰車に危害を及ぼさざる如く注意するを要する。

二、飛行機の地上戦闘に直接協同する要領(作令九七)

遭遇戦の特性に應じて有力なる飛行部隊の地上戦闘に協力する要領としては爆撃とM.G.を以てする地上掃射の二法あり通常爆撃に依る法が多く用ひられあるも戦機に投ずるM.G.射撃も屢實行せられ其の效果特に士氣上の影響大なるものがある。

飛行機の攻撃目標

敵の重要な部隊就中機甲部隊、包圍行動中の部隊、有力なる砲兵等

敵側の要點(主なる橋梁、隘路、觀測高地、主要路の集合地點等)

以上は之れより研究せんとする遭遇戦の戦史を右に列舉したる諸原則に照合して其の理解を容易ならしむる爲に述べたるものにして戦史に示す狀況上統帥者の決心、處置、諸兵の協同殊に歩、戰、砲の緊密なる協同が時代の變遷と科學の進歩兵器の新設により如何に特徴を教へたるかを會得する資材である。

古來原則は戦史より戦史は尊き犠牲と體驗より求め得たる不磨の歴史であるされば一文一句も之れ悉く骨肉を捧げ血河を流して得たる教訓たるを偲び眞劍に之を味ひて身を戦況の裡に置き心を戰場に馳せて研究するの要がある所以である。

第二章 東普「グンビンネン」附近の遭遇戦

(一九一四年八月十九、二十日、世界大戦)

其の一 獨、露兩軍の編成及裝備

一、「グンビンネン」附近の會戦は獨逸第八軍(軍司令官大將「ブリトウイツ」)對露第一軍(軍司令官大將「レンネンカンブ」)との會戦にして兩軍の兵力概要左の如し。

獨逸軍

軍司令官大將 ブリトウイツ大將

騎兵第一師團 (騎三旅團(六聯隊) 騎砲三中队 自動車隊)

第一軍團(歩二師團、野砲二旅團其他)

第十七軍團

豫備第一軍團(豫歩二師團、豫野砲二旅團)

後備混成第二旅團 (後歩二聯隊 同騎二中队 同砲一中隊)

第三篇 遭遇戦

露西亞軍

軍司令官大將 レンネンカンブ大將

軍騎兵團

近衛騎兵第一、第二師團

騎兵第二、第三師團

騎兵第一師團(二十四中队、騎砲十二門)

第三軍團(二師團[歩三二大隊]砲九六門)

九五

「プロドブリユク」支隊（後歩二旅團豫騎七中隊野砲二中隊）
豫備第三師團

第四軍團（右に同じ）

第二十軍團（右に同じ）

狙撃兵第五旅團（歩八大隊砲八門）

二、兩軍兵器の比較

歩兵銃は兩軍共概ね優劣なし。

野戦砲兵兩軍共加農及輕榴彈砲を有す。

獨軍は一九〇二年式十五榴を主砲とす（最大射程七、五〇〇米）

露軍の野戦重砲は開戦前全軍を通じ僅かに八箇大隊開戦前後佛國より供給を受けしものを除けば舊式にして威力十分ならず。

三、編成の概要

1、獨逸軍團

歩兵二十四大隊、騎兵八中隊、野砲二十四中隊（一四四門一中隊六門）重砲兵四中隊（十六門一中隊四門）

2、露軍團

歩兵三十二大隊、騎兵六中隊、野砲十二中隊（九十六門一中隊八門）重砲二中隊（八門）

3、編組の優劣

露軍は重砲の數に乏しく通信及搜索（主として飛行機）機關に於て獨軍に比し遜色あり。

殊に重砲は平時團隊に配屬せられあらざりしを以て露軍兵卒中には戰場に於て始めて獨軍より此の重砲火の洗禮を受けしもの多く志氣上大なる不利の感響を蒙れり。

「ゴザック」騎兵の價値は其の名聲の偉大なるに比し既に日露戦役に體驗せし如く實力之に伴はず

其の二 東普地方の地形及防備の概要

一、「ニーメン」河「マツール」湖沼地帯及「ナレヅ」河の地障は附近國境の諸要塞と相待ちて作戰上の骨幹を形成しあり。

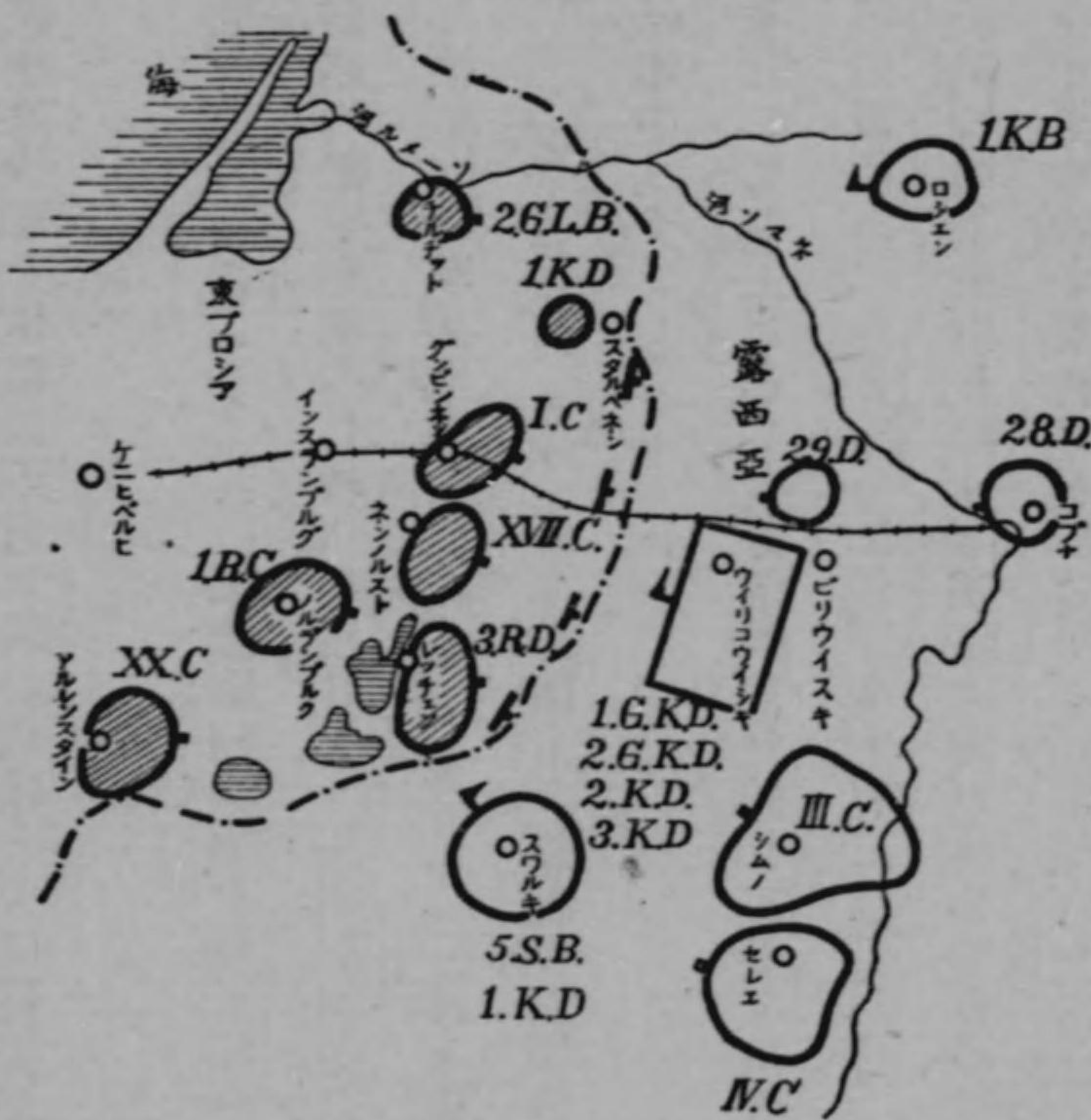
「マツール」湖附近は世界稀に見る湖沼地帯にして其の數二千五百に達し而かも此の間森林を以て蔽はれ東普人は此の地方を目して「河流の迷宮」と稱す附近の森林は多く密林にして單獨兵の行動を許さざる所多きも人造林は小部隊の行動に支障なし湖水は溜水池にして運動戦には多大の妨礙を呈するも其の中間地帯は軍隊の行動を許し従つて行軍の爲めには大なる障礙を呈せざるも展開後の前進及退却等には大なる障礙を呈する所なりとす。

道路は良好にして到る處に通達し軍隊は路外の運動を行ひ得べく騎兵の運動亦支障なし。

要圖第一

露獨兩軍集中要圖

八月十四、十五日



備考

- 一、○露軍 ●獨軍
- 二、K.D. は騎兵師團、I.C. は第一軍團
I.R.D. は豫備第一師團、L.B. は豫備旅團
- 三、▲獨國境守備隊

露軍は西北方面軍命令に基き八月十四日朝來行動を開始し獨の國境に向ひ前進十六日夕要圖第二の位置附近に到達す。

第三、第四軍は連續三日間、二十五乃至三十五露里の行軍を行ひ軍隊は行軍に慣熟せざるため疲勞

甚だしく休養を必要とする状態にあり。

而して後方機關の整備及各縱隊間の連絡等に於ても缺くる所あり。

此の間彼我の先遣部隊は國境線に於て互に偵察戦を行ふ。

露軍遂に獨國內に進入す。

八月十七日朝露軍は國境を通過し東普地方に進入を開始す各師團の國境通過時刻は軍命にて規定せざりしを以て諸隊は其の欲する如く出發行動に就きし爲連繫統一を缺き第四軍團の如きは所命の地域に到達することを得ざりしが故に第三軍團の左翼師團たる第二十七師團は其の側翼を獨軍に對し暴露し遂に其の攻撃を受けて撃退せられ爲めに十八日十四時迄其の前進を中止するの已むなきに至る。

五、獨軍の機動的戦勝

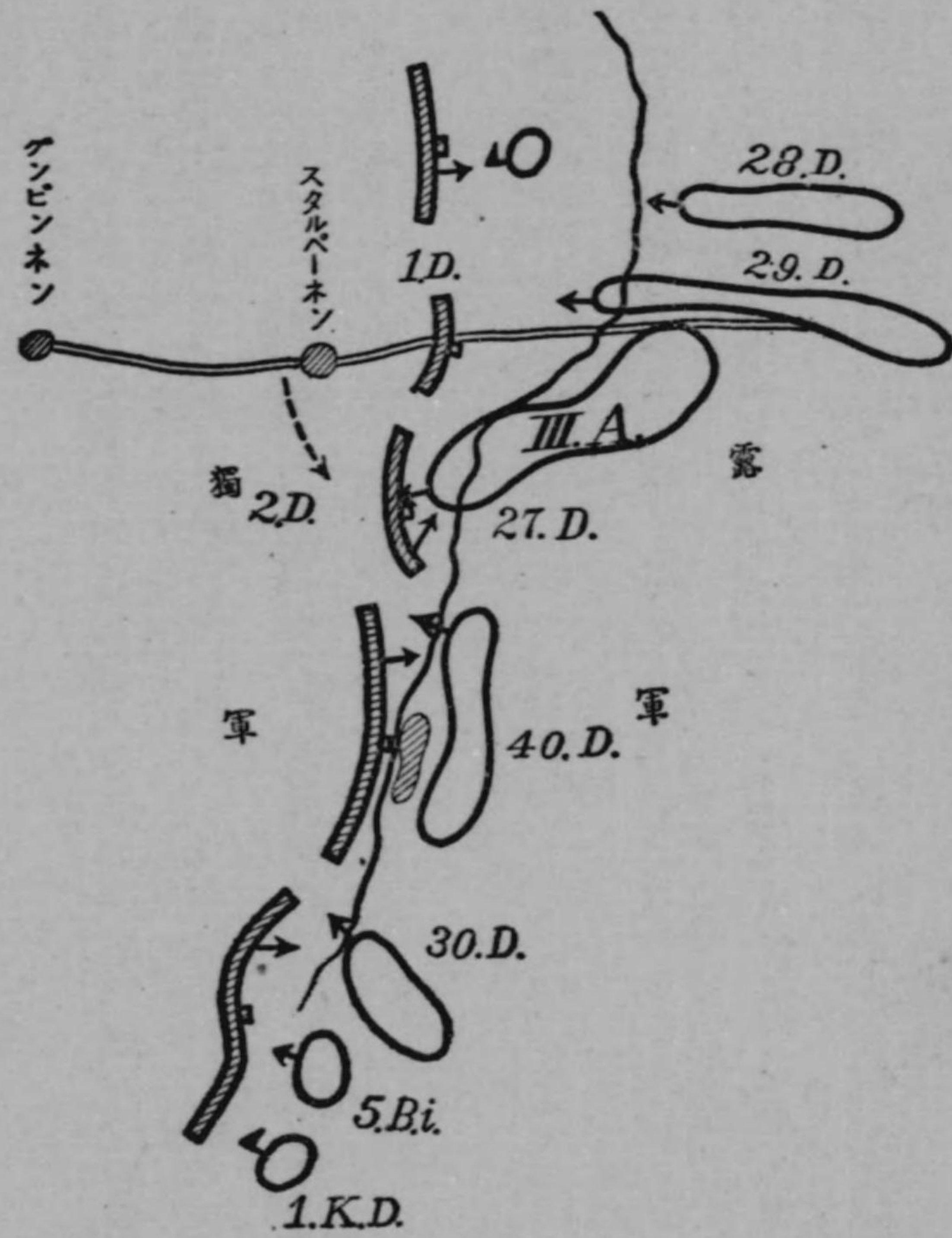
獨第一軍團に屬する國境守備隊は此の日「スタルペーネン」附近に守備しありしが露軍の西進を知るや之に一撃を加へんとし第一師團を以て「スタルペーネン」附近の要地を保持せしめ第二師團を以て露第二十七師團の左側背に迂回し敵の警戒十分ならざるに乘じ不意且つ神速に包圍を實行し徹底的に打撃を與へて之を國境線に壓迫し俘虜三千を得何等露軍の反撃を受くることなく此の夜「グンビンネン」に向ひ赫々たる戦果を獲開戦劈頭一大痛撃を與へて歸還す（之を「スタルペーネン」の會戦

と稱す。

要圖第二

露軍國境線進併に獨軍の勢攻

(タルベルネン會戰)



其の四 「グンピンネン」附近の會戰

梗概

一、露軍の行動概要

一、八月十四日露軍司令官は獨軍の全線に互り退却しつつあるを察知し十四時追撃行動を開始し敵と遭遇することなく「ミングシチメン」「スタルペーネン」「ラコウエン」「セースケン」の線に達す。

軍司令官は獨軍は東普國境地帯を放棄し引き續き西方に向ひ退却するものと判断し左の要旨の命令を下達す。

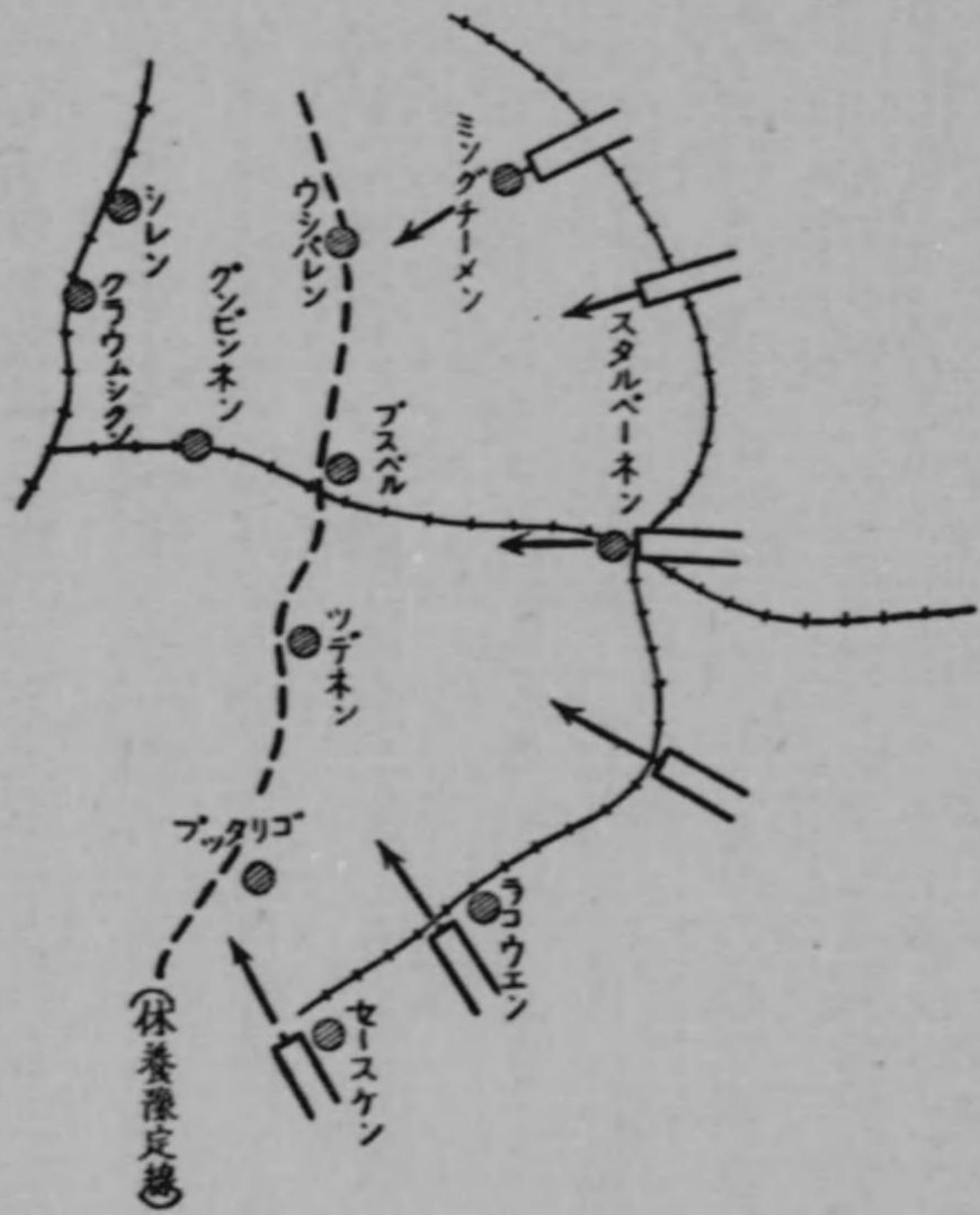
軍は明十九日「ウシバレン」「ブスベレン」「ソネデン」「ゴリダツプ」の線を占領し二十日は全軍同線附近に於て休養せんとす。

二、露軍の作戰全く齟齬す

餘りに意氣揚々と全軍鋒を連れて國境内に進入し獨軍の遁るを追ふて與みし易しと敵を侮り二日後の到達豫定線に休養命令を下達せる軍司令官は翌十九日行進を起すや忽ち軍の右翼方面(28、29師團及騎兵軍團)は獨軍の反撃を受け前進意の如くならず。

露軍追撃到達線要圖

八月十八日

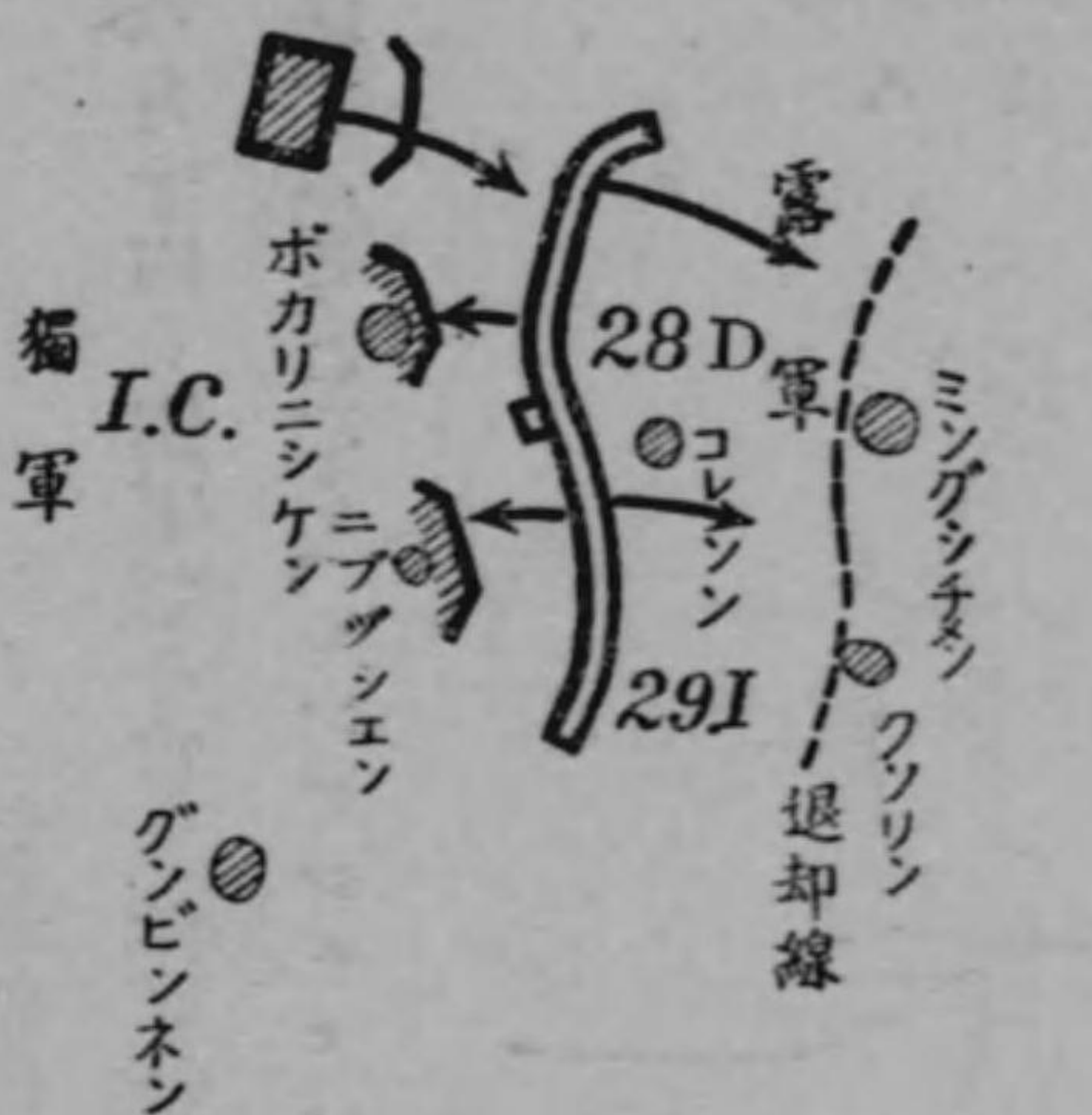


左翼方面(第二十及第三軍團)は概ね豫定の線に達せしも前面一帯に獨軍頑として對峙し一步も退く模様なし。

加ふるに獨軍は「シーレン」、「クラウムシケン」停車場(獨軍の左翼方面要圖參照)に續々下車するの情報に接し騎兵軍團は之を攻撃する目的を以て該方面に前進中獨軍後備混成第二旅團に迎撃せられ辛うじて之を撃退せしも日没と共に退却するの已むなきに至る。

三、第二十軍團長の情況判斷を誤り部下師團の敗退

軍團長は獨軍は依然として西方に退却するものと判斷し部下師團に對し追撃態勢の儘前進の續行を命ず。



然るに第二十八師團は敵が「ボカリニシケン」「ニブツシケン」の線に陣地を占領しあるを知り後衛陣地ならんと誤り周到なる攻撃を準備することなく直ちに攻撃せしも獨第一軍は待ち構へたる露軍の暴進に一大痛撃を與へ斷乎として露軍の右翼百〇九聯隊方面に向ひ攻撃に轉し遂に之を壓迫し露28師團は退却するに至り「ミングシチメン」の線に敗退す。

軍團長は獨軍退却すとの先入主となりあるため此の28師團の

敗退せる戦闘を餘り重大視せず敵情判斷に甚だしき誤解を有し此の日十三時第一軍司令官に左の電報報告をなしあり如何に敵情判斷を誤りありしかを知るに足らん。

第二十八師團に對する敵は其の兵力大ならざるものの如く「グンビンネン」附近より東北方に互り警戒網を形成し我が大規模の包圍に對抗せんとするもの如し予は敵の右翼を攻撃し之を北方森林地帯及我が軍騎兵團方面に壓迫せんとす之が爲第二十九師團は「グンビンネン」附近の敵集團に對し左翼を警戒しつゝ「コレンソ」「ブスベルン」の線に向ひ前進を繼續し且歩兵の一部を以て第二十八師團を援助す第二十八師團は其の主力を左翼方面に使用し以て敵の右翼を攻撃する如くす尙ほ諸報告を參酌するに第二十八師團長の如きは現實獨軍に撃破せられつゝも當面の敵は單に其の主力の退却を掩護しある騎兵に過ぎずと觀察しあるが如き迂愚なる判斷をなしあり。

第二十八師團は右翼歩兵一〇九聯隊の敗退の影響を蒙り全師團は獨軍の攻撃に堪へ得ずして總退却を始め加ふるに獨騎兵團が我が師團の側背に進出して脅威する爲各隊混亂其の極に達し秩序全く紊亂し連繫なく殆んど各個に退却せり。

隣接しある第二十九師團も最初獨第一軍團の攻撃を悉く撃退しありしも第二十八師團の敗退の結果之に連繫して夕刻「クメリン」の線に退却す。

其の左に在る第二十五師團も獨第三十五師團の急襲を受け堪へ得ずして「ソヂネレン」村より退却を

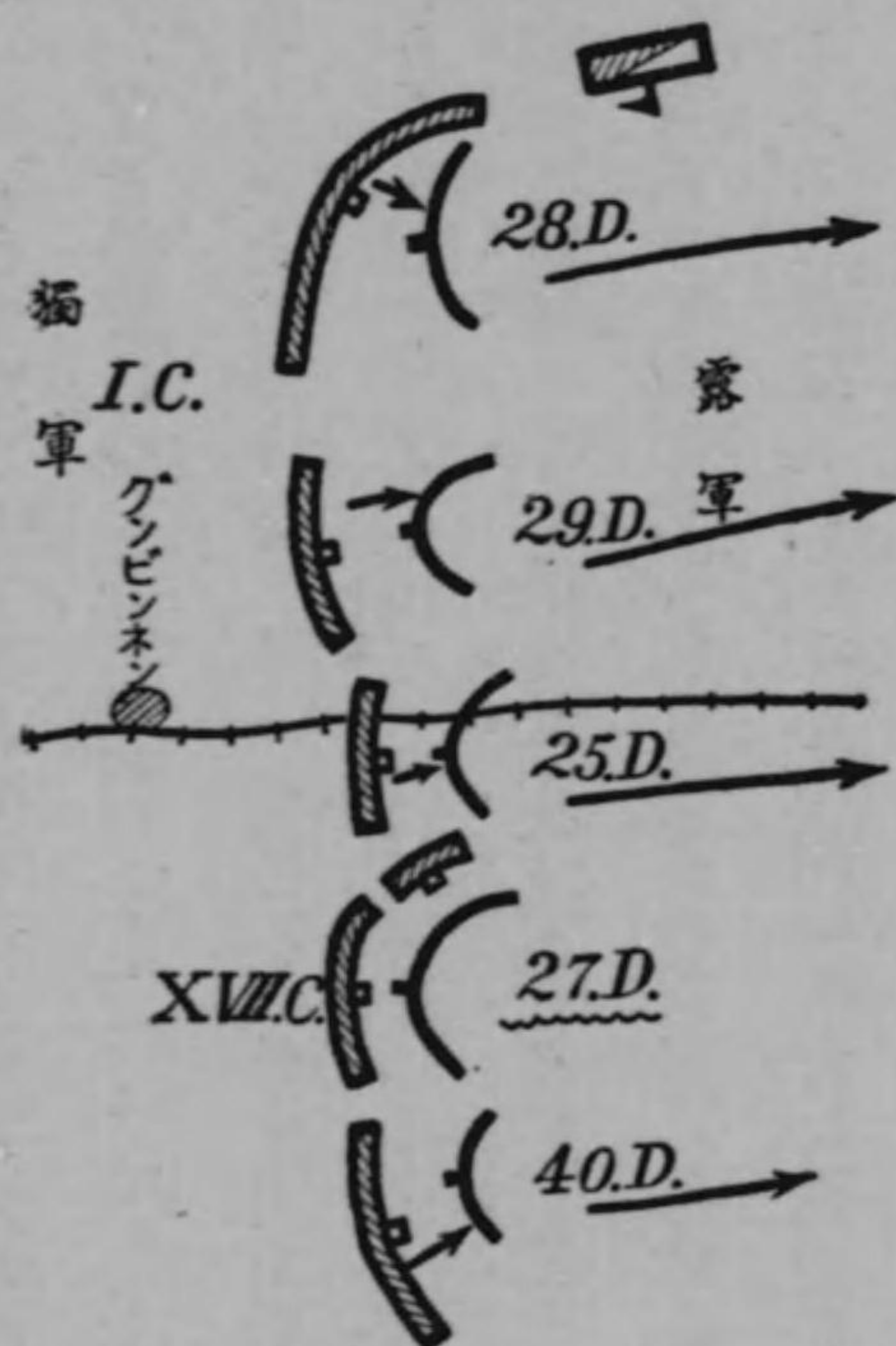
開始したるため其の影響は第二十五師團主力は勿論左師團の第二十七師團にも及ぼし戦況概して非
況なり。

四、兩翼師團退却するも依然として強敵を拒止し自ら攻勢に轉ぜし第二十七師團長の意氣

第二十七師團は當面の獨軍第十七軍團より
猛攻を受けしも終日頑強に抵抗を續け一歩
も退かず。

此の時兩翼師團は獨軍の壓迫を受け退却を
始め師團の兩翼は全く敵の爲に包圍せられ危
機刻々に迫りしも師團長は頑として死守を
命じ死傷續出するも其の位置を堅持し執拗
に繰返す攻撃波を防止しつゝ夕刻に至り斷

露第二十七師團奮闘要圖
八月二十日



乎として攻勢に轉じ赫々たる武動を輝かして戦場の英雄となり獨軍の火炮、彈藥車及千名以上の俘
虜を得以て「グンピンネン」會戰の露軍一敗の雪辱を遂げたり。

2、獨軍の行動概要

一、獨軍司令官の作戰計畫

露軍の獨露國境進入に對し獨軍としては其の守備部隊を以て成し得る範圍に於て其の前進を拒止し
其の隙を發見せば極力攻勢に出で已む得ざるに至れば「グンピンネン」附近に於て決戦を企圖す。
之が爲軍司令官は第一軍團(歩兵大將「フォン、フランソワ」の統率する歩兵第一、第二師團(歩兵八聯
隊)獵騎兵二聯隊、野砲第一、第二旅團(一四四門)重砲一大隊(一六門)飛行機一四機其の他)を豫定
の如く「グンピンネン」附近に後退せしめたる後二十日拂曉より全軍(露第二軍に對するものを除く)
を擧げて露第一軍に對し攻撃を開始す。

二、獨第一軍の攻撃部署(「グンピンネン」會戰に於ける)

第一師團及其の令下に屬せられたる「プロドリユク」支隊(長中將「プロドリユク」後備歩兵一旅團、
「エルサス」旅團、騎兵七中隊、野砲二中隊、重榴砲二中、十加一中隊)を以て「グンピンネン」附近
を守備せしめ第二師團を攻撃豫備として左側後に控置す。

三、豫備隊たりし第二師團の包圍攻撃經過と第一師團の攻勢動作

軍團命令に依り第二師團併に騎兵第一師團は十九日二十一時「エスゼルニンゲン」東方地區出發「マ
ルウイシケン」西北三百米の「サスベーネン」に至り二十日四時迄に「マルウイシケン」以北の地區に
展開し曉霧を利用し攻撃目標を當面露軍の側背に向ひ突如として攻撃を開始す。
防禦陣地を占領しありし第一師團は「スプリングン」―「カンナピンネン」の線に於て相對峙しありし

が二十日三時半より激烈なる砲撃を當面の露軍に對し實施し友軍第二師團の包圍行動を牽制し其の成果を待ち八時より一齊に攻勢に轉ず。

「プロドリツク」支隊は依然として本道兩側地區を堅固に守備しあり。

四、右翼にありし第十七軍團の戦況

第十七軍團は「ダルケーメン」及其の北方地區より前進し二十日二時「ワルテルケーメン」、「アウグストベーン」、「ロンテ」河の線に達し拂曉前進を繼續し其の令下たる第三六師團は「ソデーネン」に第三五師團は「スチルクベーン」に向ひ前進せり然れども露軍の配置堅固にして容易に該陣地を占領するを得ず。

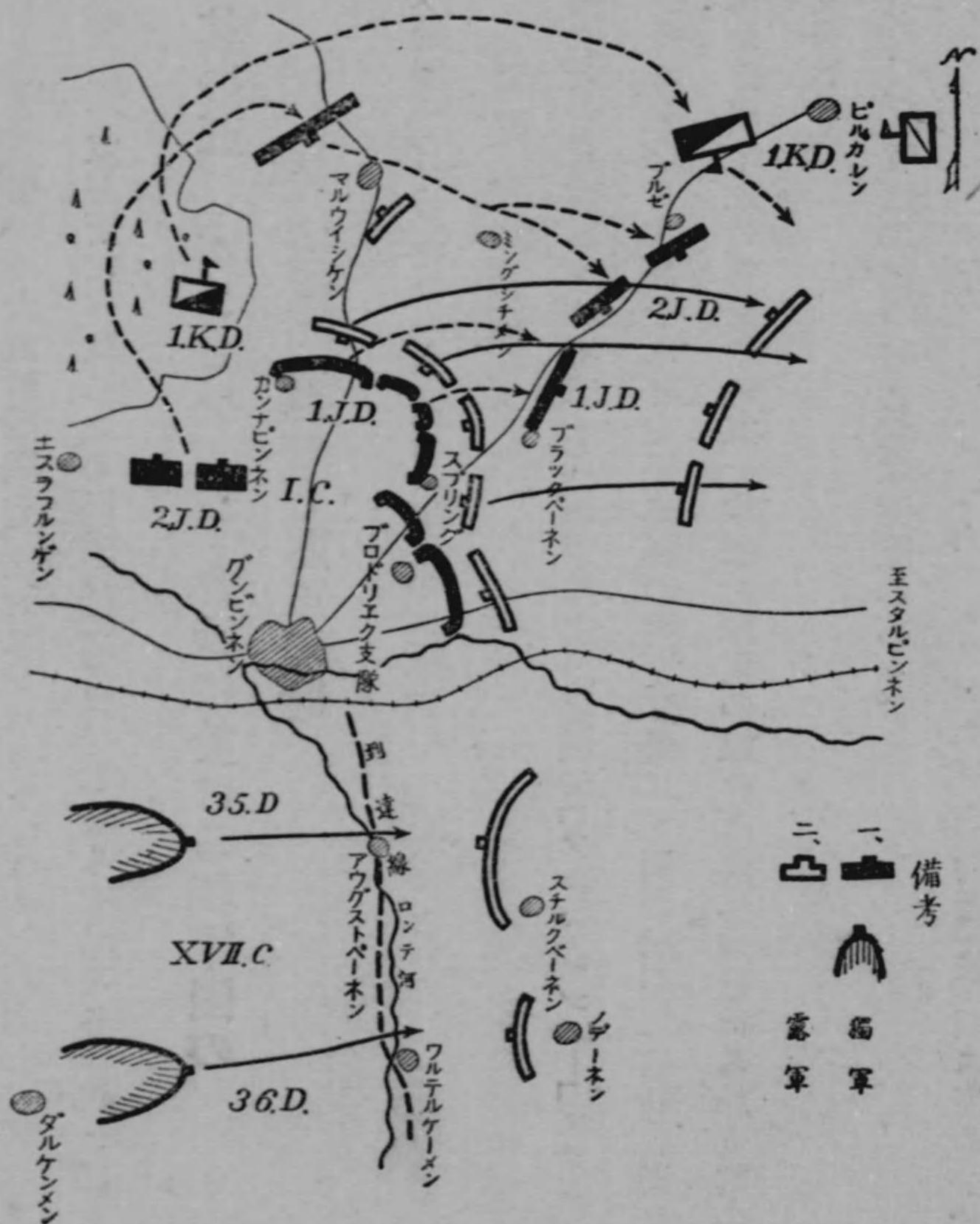
五、獨軍司令官は我が左翼方面は稍、戦況有利に發展し各所に遭遇戦を演じ徹底的の打撃を未だ與へ得ず。

左翼方面の第十七軍團は戦況意の如くならず且露第二軍方面に派遣せし第二十軍團の戦況亦有利ならず軍の背後を脅威せらるるの状況にあるを知り此の夜二十三時諸隊に令するに「ウイスラ」河西岸に向ひ退却するを以てせり。

此の「ウイスラ」河は東普唯一の大河にして獨逸參謀本部が平素より對露作戰に際し西攻東防の戰略防禦戦となせし所なり。

「ンネンビング」附近會戰經過要圖

日十二月九年八



が「ラアドシエン」に到着したる後行動を開始すべき旨を附加す。
本命令の缺點！

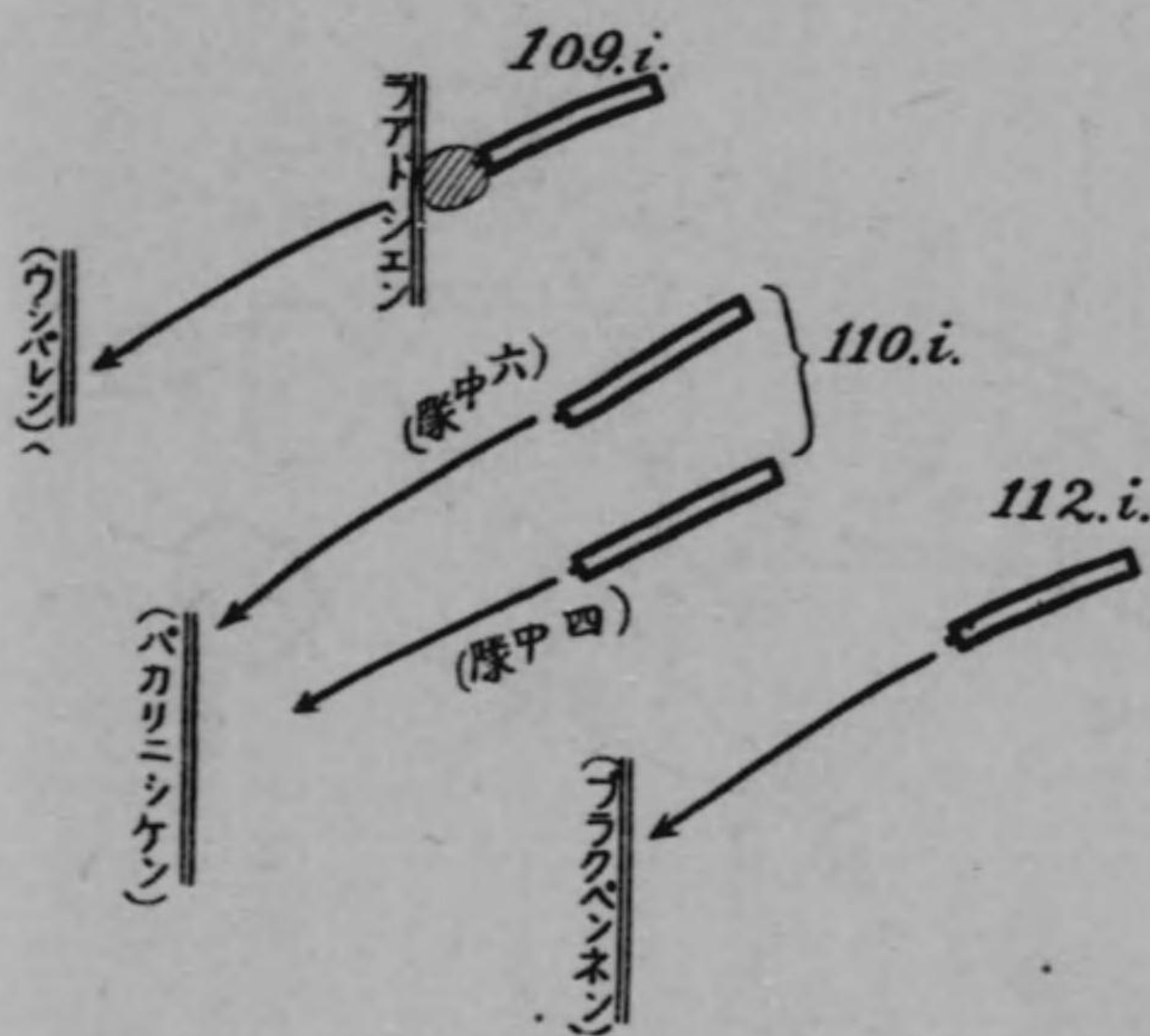
此の命令は各聯隊の戦闘任務、行動區域、協同動作等に就て何等記することなく又各部隊の出發時刻さへ明示せられず。

されば各部隊の行動は殆んど各個各別に實施せられ連繫もなく協同もなし後章に述べんとする開戦初動に於て混亂を呈し全く戦はずして其の勝敗を卜するを得たり。

3、右縦隊たる歩一〇九聯隊の行動（先遣任務を受け「ラアドシエン」を占領すべき任務を有す）と師團主力の前進。

一、歩一〇九聯隊の行動
歩一〇九（歩兵一大隊、M.G.四、砲二十四門）は十二時四十分何等の抵抗を受くることなく「ラアドシエン」に到達し之を師團の前衛たるべき歩百十聯隊長に通報す。

第二十八師團前進隊勢
日九十月八



二、前衛司令官たる一一〇聯隊長は概ね右記要圖の隊勢にて右縦隊は師團の前進目標たる「バカリニシケン」を占領すべく而して左縦隊は之の攻撃に協力せしむ。

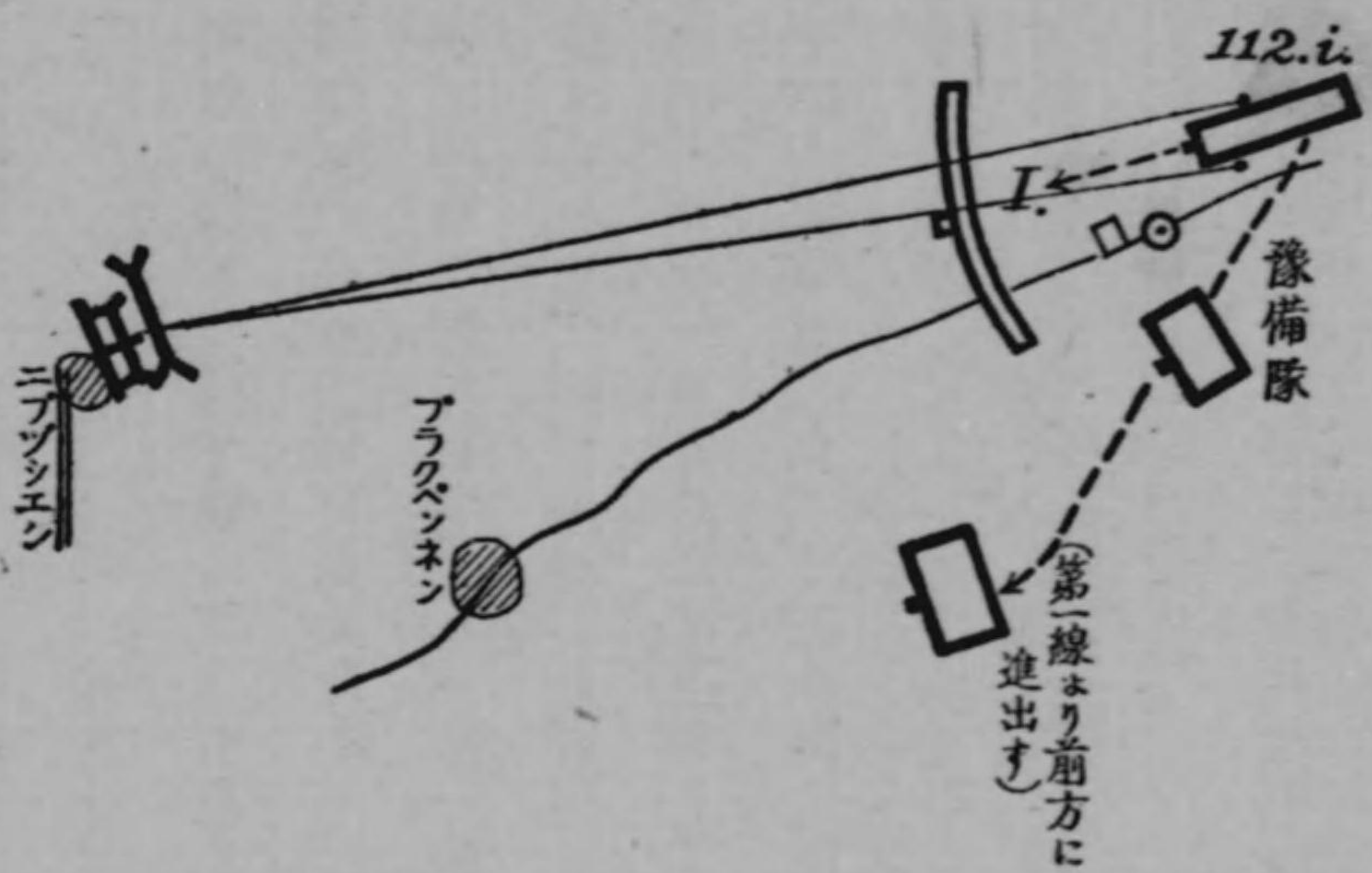
三、師團本隊たる歩一二聯隊は師團長より督促を受けて始めて十三時二十五分砲十六門と共に「ブラクベンネン」に向ひ前進を開始す。

4、獨軍の砲撃開始と露前衛は混亂しつゝ遂に展開す。

露28師團の前進開始を認めたる「ニブツシン」（要圖參照）附近に待機しありし獨軍砲兵約三中隊は一齊に砲撃を開始し主として露の前衛たる一一〇聯隊に猛火を集中す之が爲死傷續出隊伍又亂れ前進するを得ず附近の地形を利用し前進を停止するに至り遂に何等の理由なく前進目標たる「ブラクベンネン」東方地區に展開し（聯隊は當時七中隊より成り他は爾他の任務に服しあり）第一大隊を第一線第五、九、十三中隊を豫備とし聯隊長は第一大隊長に攻撃目標を「ブラクベンネン」と命ず。

大隊長は直ちに所命の目標に向ひ前進す此の時豫備たる三箇中隊は如何なる誤りありたるか第一線大隊の左前方に進出せり。

要するに不期的に獨軍に砲火を集中せられ聯隊長以下確乎たる信念と適切なる處置を缺き無暗に展開して其の任務の指示適確ならず斯の如き奇異なる現象を呈するに至る。



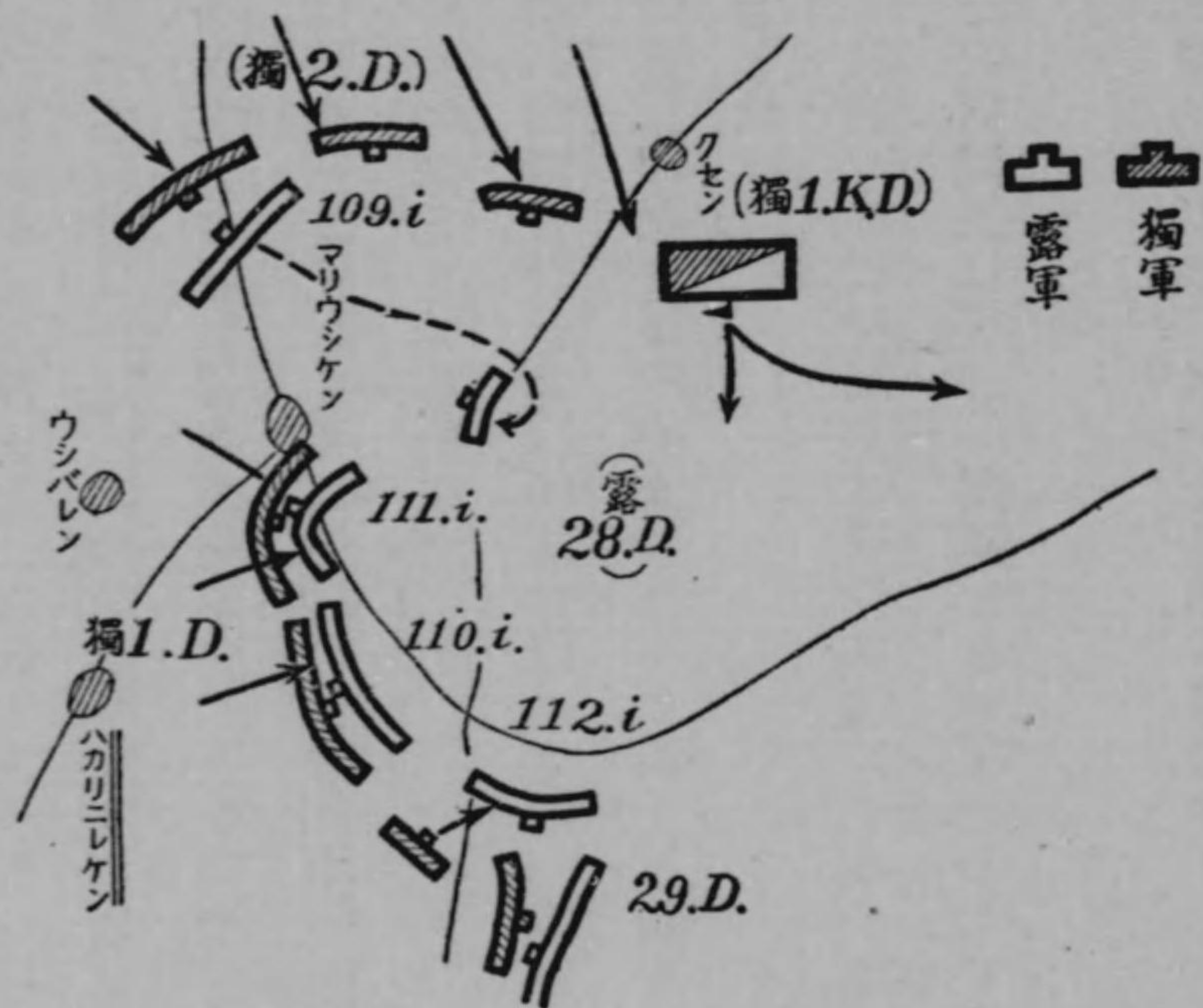
- 5、此の日第28師團の戦闘指揮は全く其の命令系統亂れて指揮掌握頗る適切ならず。
 之が爲師團内の各部隊は自己の任務、行動區域は素より其の聯隊の令屬關係及隣接部隊の位置すらをも知らざりし如く之を例せば
 歩一〇聯隊の如きは師團命令にてロスイススキ少將の令下に入りたるが如きも他の記事には「戦闘開始と共に第一一二聯隊長は第一一〇及第一一二聯隊を併せ指揮すべき命令を受領せり」等のことありしが如き是なり。
- 6、十九日夜露第二十八師團は辛うじて各、其の目的地に達し獨軍と至近の距離に相對するや俄然獨軍の機動的作戰に依り攻勢をとられ露軍敗退す。

二十日の戦況

一、師團の右側背に突如曉闇を破つて獨軍の強襲

獨露兩軍戰鬥要圖

八月二十日



十九日の夜半師團は概ね左記要圖の如き隊勢にあり右翼隊たる一〇九聯隊は「バカリニシケン」を包圍せんとして獨軍の反撃にあひ頗る苦戦し聯隊長負傷し代理亦斃れ戰鬥意の如くならず終夜獨軍に苦しめられ辛うじて現状を維持す。

師團長は右翼隊の危急を救ふべく夜半三時軍團長に報告して増援を求め隣接第二九師團長に協力を要求し又右側にある獨立騎兵旅團長に對し我が右翼に協力を希望する等百方手段を盡すと共に直ちに歩一〇九聯隊の六中隊を増援として「ウシバレン」に派遣し一〇九聯隊長の令下に入らしむ。

此の増援部隊は軍團豫備より急遽夜間派遣せられ更に状況全く不明の右翼隊に増援を命ぜられ疲と夜暗の爲適確なる行動をなし得ず。

二、二十日拂曉に至るも師團命令徹底せず。

師團内の各隊は我が右翼方面に優勢なる獨軍の攻撃を受け銃、砲聲盛んに起り曉の闇は兩軍の喊聲に依り破られ右翼隊として突出しありし一〇九聯隊は逐次壓迫せられて敗退し獨軍は之に尾して漸次右側背に肉迫し獨の騎兵師團は快足を利用し師團の背後に迫らんとす。

然るに師團主力方面は師團が攻撃すべきや防禦すべきやの企圖さへ知る所なく斯くする内に獨軍砲兵は猛火を集注して死傷續出し各隊長は一時獨斷的に其の地に作業を実施し敵砲兵火の下に曝されて如何ともする能はず。

獨軍は第二師團及騎兵第一師團を以て迂回し露軍の右翼を包圍し四時を期し重輕砲の全火力を集中して包圍攻勢なるや正面に在らし第一師團も八時攻勢に轉じ歩、砲の密接なる連繫の下に攻撃前進を始む。

露軍第一線聯隊長は情況を師團長に報告すると共に我が榴彈砲の來著と共に射撃を開始し其の援助の下に師團長は一一一聯隊をして現地を死守せしめ一一〇聯隊をして直ちに攻撃を實行せしむ。

茲に兩軍潮の寄するが如く互に砲兵協力の下に攻撃前進をなす。

三、九時前後の彼我兩軍の戦況

獨軍の繞回運動に依る包圍攻勢と正面よりする攻撃は勢頗る猛烈にして28師團は要圖の如く逐次壓迫せられ各方面よりする優勢なる獨軍歩兵の攻撃前進、露軍損害の多大なること及獨軍が我が師團右側背を全く包圍せるを知りたる師團長は各聯隊に一步も退く可らざるを嚴命せしも之を遵奉するに忠實なる部隊は全滅し然らざる部隊は逐次敗退をなしつつあり。

遂に一一一聯隊は獨軍の全く包圍に陥る。
九時—十時の間獨軍は北方より歩一一一聯隊を完全に包圍し第一線と聯隊本部間の連絡を遮斷し殆んど全滅的慘狀を呈す。

爾餘の部隊も必死勇敢に奮闘せしも遂に耐へ得ずして退却を始め或は包圍せられたり。
軍隊の指揮統帥は全く行はれず右往、又左往して秩序紊亂し遂に露軍は敗退せり。

四、八月十九—二十日に互る第二十八師團の損害

	將校	下士兵	M.G.	火砲
109.i.	一〇	六五五	四	
110.i. (四大隊)	三〇	二二三一	五	
111.i.	三四	二一五〇	八	

計 28.B.A. 112.i.

二四	一七三六	六
六	一七三	八
一〇四	六九四五	二二三
		八

第三章 「グンピンネン」附近の會戰より得たる教訓と

原則との對照

其の一 露第二十八師團の戰鬪行動に就て

一、隨意退却せる敵を追撃中の軍隊は次に執るべき敵の新企圖を顧慮して前進し、情況を適切に判断し其の新企圖に出でたるを判知せる時は、軍隊を統一して戰鬪に加入せしむるを要す。

獨軍は「スタルペーネン」の會戰(國境第一回の會戰)後隨意退却して「グンピンネン」附近に於て露軍と決戦し之を撃破せんとするの企圖を有しあり。

當時露第二十八師團長は十八日の前進開始前に左の情報を知りつゝも尙ほ敵情判断を誤り獨軍の新企圖に陥り慘敗せり即ち

イ、「ニブツシエン」(師團の前進目標とせる地區の西南側)附近に獨軍歩、砲兵部隊堅固に陣地

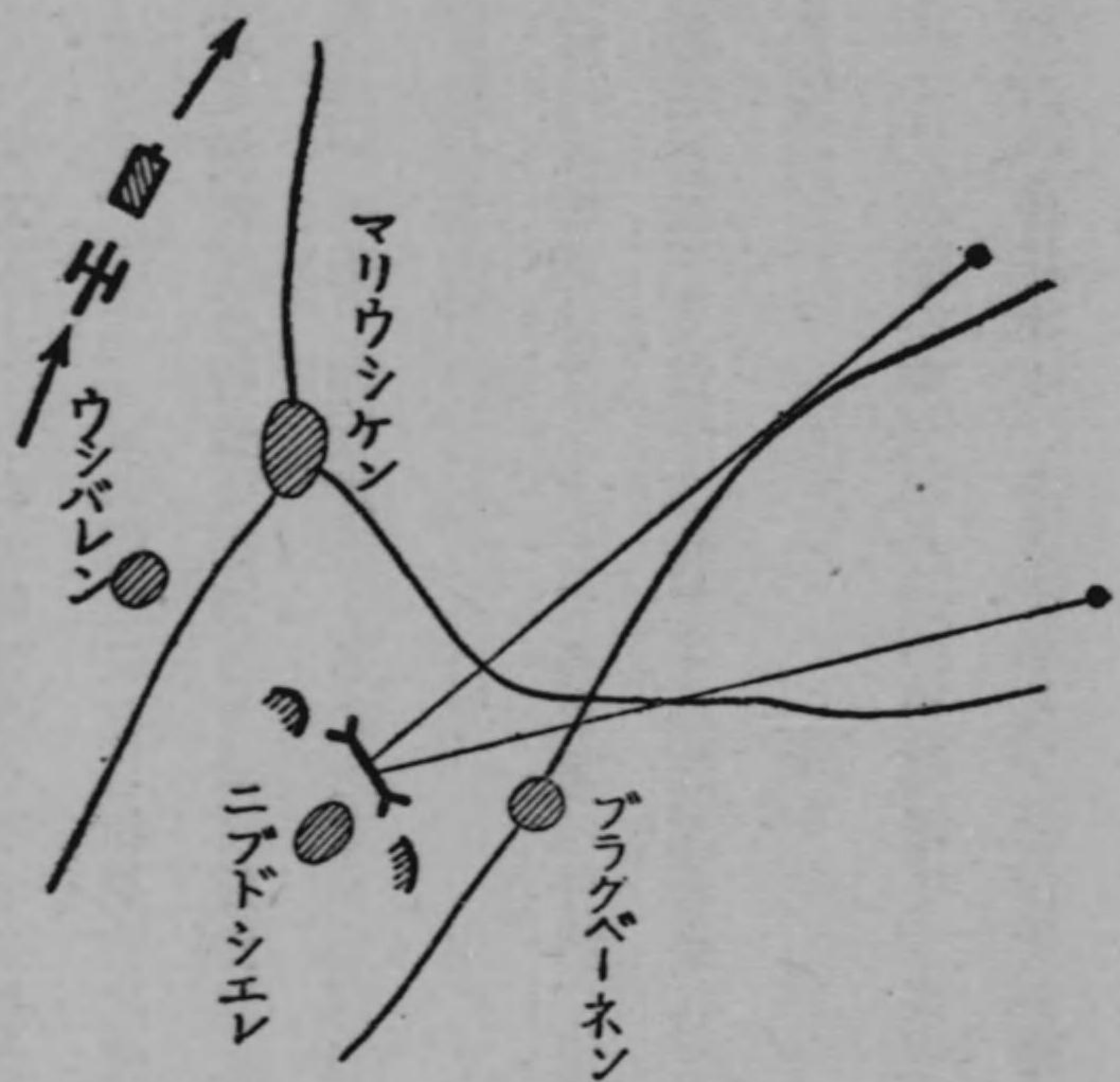
を占領しあること。

ロ、「ブラクペーネン」「ウシバーレン」「マリウシケン」の前面に徒歩せる騎兵、歩兵、自轉車隊等の偵察隊の現出しあること。

ハ、「マウリシケン」「ヨドシエン」西北方地區に於て砲を有する敵歩兵南方より北方に向ひ移動しあること。

ニ、歩一〇聯隊は運動を起すや「ニブツシエン」より砲撃を受く。

ホ、歩一二聯隊は「ブラクペーネン」に達するや等しく砲撃を受く。



以上の諸狀況を判知せば師團長としては獨軍は決して依然西方に退却を續行するものに非らず必ずや何等かの新企圖を策するならんと考慮すべきは當然ならん。

然るに其の判断適確を缺き且何等慎重の顧慮なく單に軍團命令に従ひ前進を繼續し其の日午後に至り敵前近く各隊をして不統一に前進せしめ豫て準備せる獨軍の機動的攻勢移轉の爲歩一〇九聯隊は

慘敗を喫して敗退し延ひて諸隊も混亂に陥り歩一一一聯隊は全く包圍に陥り師團司令部又退却するの餘儀なきに至り辛うじて後退後一時陣地を占領して停止するを得たり。若し師團長にして以上の状況を的確に判断し獨軍の新企圖を速かに察知し各隊を統一して戰鬪を準備し且つ加入せしめしならんには斯る十九日の失敗は演ぜられざりしならん。要するに露軍の上下左右の連繫全く不十分且各指揮官の果斷を缺くものにして斯の如き不期戰に於て作令七五、七六「其の附近に在る指揮官は直ちに果敢なる攻撃を執行し各級指揮官は斷乎たる決意を以て機敏なる行動に出づると共に速かに上級指揮官に連絡して當面の状況を報告し左右隣接部隊と密接に連繫し遲疑逡巡することなく局部の状況に眩惑せられず……」の原則は明確に吾人に教へある所以なり。

二、師團の統帥適確ならずして各部隊の任務、協同動作共に不明確不確實なり。

1、師團長は十九日十二時二十分師團命令にて各部隊に前進を命じたるも其の任務の附與適確ならず即ち

歩一一二聯隊の如きは前進の爲師團より督促を受くるが如き又歩一〇九聯隊は「ウシバーレン」占領後其の任務達成しあるに係らず敵斥候を撃退するや之に尾して全聯隊更に南方に向ひ突出せり。

師團としては連繫上遂に歩一一二聯隊を歩一一〇聯隊の左翼に進出せしめざるを得ざるに至る。

此れ何れも任務の附與適確ならず只だ單に前進を命じたるに過ぎざる過失なり。

2、敵前至近の距離に於て諸隊慢然自失して何等處置せず。

只だ前進を命ぜられたるのみの諸隊は慢然として敵に近接し而かも何等確定的任務を承知するなく前進し歩一一二の如きは敵の砲撃を受け狼狽して過早も甚だしく敵兵も見ずして展開（疎開に非らず）せり。

歩一〇九は無警戒に突進して敵陣地に衝突し俄然反撃を受けて敗退するに至る。

若し師團にして當初の命令適確にして各隊の行動能く統一せられしならば敵が「バカリニシケン」附近に停止しありしことを縱令遅ればせにせよ承知しあらば各隊は尙ほ適切に處置し得たりしならん。

3、二十日の師團命令は攻撃か防禦か其の目的を示さず。

敵前至近の距離に到達したる師團として二十日の命令に各隊に攻撃すべきや將た防禦すべきやの適確なる任務を授けず従つて各隊は只茫然として敵砲火の下に地物を利用して停止しあるのみ。歩一一一聯隊を「ウシバーレン」に差遣して歩一〇九の敗退後の外翼掩護に備へたるも之れ又其の任務明確を缺きたるが如き是れ畢竟同日拂曉より獨軍が機動的に行ひたる攻撃に對し遂に悲惨な

る失敗に陥るに至りし大なる原因なり。

三、翼側師團は常に外翼に縦長區分を保持するを要す。

作令九〇にも明示されたる如く戰團の進捗に伴ひ敵の薄弱部たる側面に使用するを得るのみならず我が外翼に於ける不時の事變に備ふるを要すればなり而して戰團の當初萬已むを得ざる關係上之を缺きたる時は爾後速かに地形、時機を利用し兵力を轉用し之を設くるを要す。

師團が十九日の衝突により失敗し「ウシバーレン」に急に六箇中隊を派遣して翼側掩護に任じたるも之れは單に正面の延伸に過ぎず。

然るに二十日拂曉よりの獨第二師團の包圍攻撃に遭遇するや此の新部署は何等の效果なく一連托生共に敗退せり。

或は兵力の不足とも云へるが今少し側方後に位置せしめば或は獨の包圍に對し其の側背を包圍し得しやも知れず而かも其の處置は十九日夜暗を利用し實行し得られしなり。

之に反し獨軍は左翼側後に強大なる縦長區分を控置し二十日に於ける包圍の目的を達成し得るに至れり。

四、正面戰團の靱強となりし今日の戰團に在りては敵は常に側背に策動するを豫期し該方面の搜索は戰團間と雖も特に深き考慮を拂ふを要す。

獨軍第二師團は夜暗を利用し機動的に包圍を企圖し大移動を行ひ拂曉俄然露軍の側背に向ひ攻撃を決行す。

然るに露第二十八師團は七時三十分に至り漸く之を知れり是れ全く翼側前に於ける搜索の顧慮を缺きたるに因るなるべし最も師團長としては右側にある友軍騎兵師團に信頼せしとは云へ各隊又自ら其の搜索に努め且連繫に努むるの手段に出でざりしなり。

若し此の搜索に關する注意ありたらんには或は若干の敵情を知り遅くとも若干の準備をなし對抗の方法を講じ得しならん師團長に此の著眼を缺きたるは遺憾とす。

作令七一「飛行機、騎兵其の他搜索に任ずる部隊は各、其の任務に應じ廣く前方及側方を搜索して敵情就中其の兵力の分配到著地點及時刻等を迅速に報告(通報)……」

作令七〇「師團長は機を失せず各縱隊に……包圍の態勢を成形……兵力の大なるに伴ひ益、遠く敵の側背に向はしむること緊要なり」。

五、戰況不利なる時徒らに隣接部隊に協力を求むることなく自ら之を醫するの策をとり獨力戰勢挽回に努力するを要す。

師團長が十九日午後失敗せるに係らず二十日單に其の正面を「ウシバーレン」に延伸するに止まり何等他に處置を採ることなく翌日獨軍の包圍により危殆に瀕するや左隣接の第二十九師團に協力を求

むる數度に及び哀願的に督促するも遂に其の要求を充す能はず第一線部隊に其の位置を固守すべきを命ぜしも他に策案を施すことなかりし爲徒らに損害を大ならしめたり畢竟他力本願主義に效果の尠きことを知るべし。

第二十九師團の協力し得ざりし理由としては

蓋し露軍の特質たる協同連繫の精神乏しき故もあるならんも實際問題として第二十九師團も亦敵の猛攻を受け隣接部隊を顧みる遑なかりしは明かなり即ち操典にも明示しある如く「己れ危殆に瀕する時は他も亦同一情況なるを偲び濫りに他隊の援助に依頼することなく獨力各種の手段を盡くして頽勢を挽回するの方策を講ずるものとす」の眞髓を知るを要す。

六、不意に敵と遭遇したる場合師團長以下の處置に就て

二十日八時前後に於ける露軍の苦戦に陥るや師團長としては殆んどなす所なく其の右翼方面は刻々狀況は危機に瀕するを知るや只だ第二十九師團長に對し協力を求むるのみにて第一線部隊に對しては現在位置を死守せよと命ずるのみ。

然も隣接師團長は繰り返し再三増援を希望するも之が實現せず十一時頃師團は總退却を開始し何人も統制し得ざる混亂状態に陥れり。

作令七六「師團長は不意に敵と衝突せば全局の判斷に基き速かに主動の地位を獲得すると共に決戦

方面を決定し機を失せず各方面に惹起せる戦闘を統一するを要す……不期の戦況に率かるることなく、確實に各部隊を掌握し混亂を豫防し……」に明示せらるる所以なり。

七、近時の戦闘には側面に意義を有するに至りし關係上卓絶なる指揮官を有する團隊を部署するの要あり。

「ゲンビンネン」附近の會戦に於ける第二十八師團の敗因は常該師團長の統帥拙劣によるもの蓋し多大なり。

而して當時の隣接團隊は第二十八師團の潰亂により側翼危険を感じ遂に退却せざるを得ざるの狀況に陥れり。

本會戦に於て外翼師團たりし第二十八師團の行動は露軍の作戦に多大の意義を有せしものなり若し夫れ該師團の統帥にして卓絶せしならんには露軍をして斯かる状態に陥らしめざりしならん。

要するに敵の包圍に對し又は敵を包圍せんとするは近來益々顯著なる作戦指導なりされば之に對し適切に情況に應じ處置せしむるためのみならず好機を捕捉し敵の側翼に逼迫せしむる爲にも亦必要なればなり。

八、攻者は飽くまで攻者たるの利益を十分發揮することに務め以て徒らに敵に致さるることなきを要す此を缺きたる攻者は必ずや防者の係蹄に陥るべし。

攻者の利益は自ら欲する如く常に主動の位置に立つに在り。

然るに露軍の行動を結果より見るに全く敵に釣られし感あり今露軍の行ひし所を觀察すれば何れの時機に主動の位置に立ちしや敵が砲撃を開始すれば師團命令も下達せられざるに第二線に位置する軍隊が戰況の如何に係らず展開し然かも其の聯隊の狼狽は第二線にあるべき豫備隊が反つて第一線より前方に進出するが如き奇現象を呈し(一二二聯隊前述參照)或は敵の斥候が隨意に退却するや豫定の目標を越へて前進するが如き(一〇九聯隊)悉く敵に致されたるものと謂はざるべからず斯く致されたる軍隊は當然の報酬として多大の打撃を受くるは自然にして二十八師團の敗退は蓋し當然の成行と謂はざるべからず。

九、獨軍の豫期戰に對し露軍の不期戰は勝敗已に戰はずして明かなり。

作令六八、「我が豫期を以て敵の不期に當るは先制獲得の第一要件なり……」

露軍師團長は豫め各種の處置を講じて適時適切なる情報を得ることに勉めず極言すれば無搜索にて前進し突然敵より砲撃せられ初めて前衛部隊は搜索を始めしが如きは失態も甚だしきものと謂はざるべからず。

一〇、作戰命令の傳達は迅速にして時機に適合せざるべからず。

露軍第三軍團長は十九日二十二時二十分に下したる翌日の部署に關する命令は第二十五師團長に對

し適時下達せられたるも其の傳達迅速ならず爲めに二十日五時には師團は新位置に就かざるべからざる時刻なるに係らず師團長は此の時漸く軍團命令を受領し師團命令を下達す。

而して本命令に依り何時諸隊が行動を開始せしや明らかならざるも歩九九聯隊が八時漸く「グデン」に達せる狀況より判斷せば師團諸隊の行動が軍團長の意圖に合せざりしこと蓋し遠しと言はざるべからず。

戰鬪の結果より觀察すれば若し師團にして所命の時刻に指定の位置に到着しあらんか二十日拂曉「ロミンテ」河を通過し攻撃前進せる獨軍に對し本戰鬪の如き不期戰を交ふるに比し或は尙ほ有利なる戰鬪を交へたるやも計られず之れ拂曉迄に部署の變更を終らんとせし軍團長の意圖は適當なりしも其の命令傳達に於て時機の適切を缺く所あり此の結果を招致せり。

一一、指揮官は戰鬪指揮上特に其の位置の選定に注意するを要す。

露第二十五師團長は此の日「グルチェン」に在りて戰鬪を指導せり戰鬪酣なるの時第一線を距る正に六キロ米なり其の警戒部隊が六時以來敵と交戦して退却の止むなきに至り又歩兵九九聯隊が十時以來敵と激烈なる戰鬪を交へある状態に於て十時五十分漸く戰鬪に關する師團命令を下達せり其の命令の時機に適合せざりしや知るべきのみ之れ前哨部隊の報告等が其の處置適切ならざりしや謂ふまでもなしと雖も要は師團長の位置遠きに過ぎ適時報告を受領し得ざりしことも亦大なる原因なるべ

し。

一二、隣接部隊併に歩、砲協同の適否は戦闘の勝敗に重大なる關係ある例證。

十九日露第二十五師團左右兩前哨部隊が其の兩翼に於て著しき間隙を有せしに拘らず兩前哨共之を知りたるも終夜之が補綴の手段を講ぜず慢然放置せり。

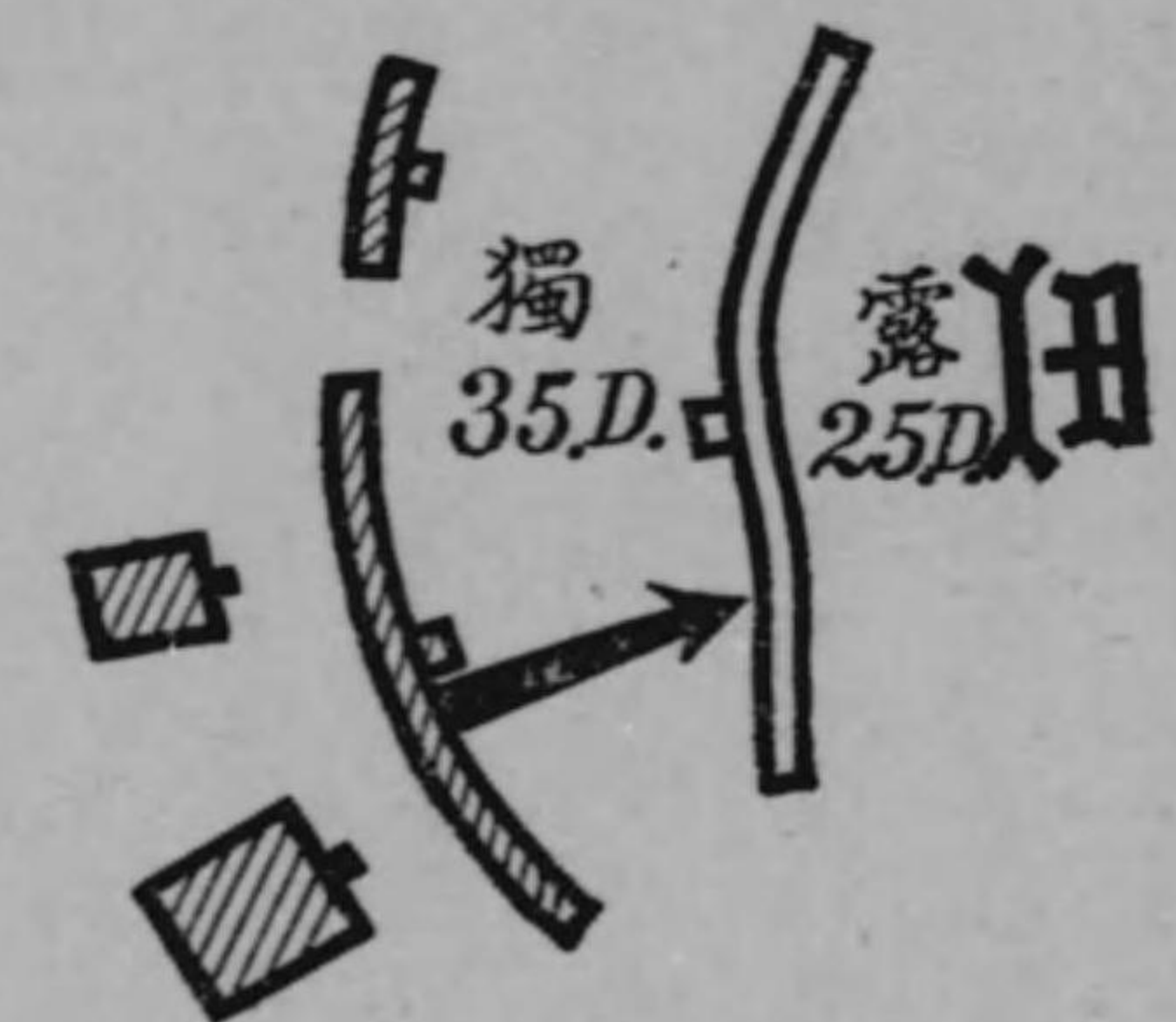
之に對し企圖心乏しき獨の「ブロードブリュク」支隊に面しありしを以て幸ひに大事に至らざりしと雖も師團の爲大なる危険を包藏せしものと言ふべし。

又右翼旅團が左翼旅團の數時間に互る苦戦に對し自己の正面に何等の危険も感ぜざりしに拘はらず傍觀して何等の爲す所なく師團長の督促を受け始めて攻撃前進に移りたるが如き戦闘の結果に及ぼせし影響大なるものあるべし兩旅團の損害八對一の比なるを見るも本戦闘に貢獻せし所の尠少なる一般を推知するを得ん。

之に反し第二十七師團長並に其の第一線右翼隊長が第二十五師團左翼部隊の退却に際し適切なる援助をなし其の危急を救護したる處置は左翼旅團砲兵の異常なる奮闘と相俟ちて獨軍第三五師團攻勢の鋭鋒を挫折せしむるに與つて大なる力ありしものと言ふべし。

作令九四「歩、戰、砲協同に方りては戰車及砲兵は歩兵をして其の任務を達成せしむるを主眼とす……」同九五「歩、砲兵の協同は歩兵戦闘の開始せられたる以後に於て特に重要なり……」

一三、火器の威力を無視せる攻撃は遭遇戦と雖も其の奏功至難なり。



本戦闘に於て獨第三五師團は其の殆んど全力を以て露第二五師團の左翼方面に中央突破的に殺到せり。

其の攻撃法は濃密なる散兵線時として縦隊を以て前進す之が爲露軍銃砲火の爲至大なる損害を受け推進の能力を失ひ遂に攻撃頓挫するの止むなきに至れり。

當時の露軍は態勢良好ならず比隣部隊の協同を缺き中には戦闘意志の缺如せし軍隊を混ざる素質として劣等の部なり之に對してすら銃

砲火の威力は相當大なり。

蓋し獨軍は精練にして且開戦當初の戦闘とて志氣の旺盛なるに頼む所大なりしならんも火器の精銳は如上の状態に於ても尙ほ此の猪突的突進を許さず。

同時に露の左師團が此の獨軍の攻撃に際し側防火を以て掃射せし效果は實に意義大なることを窺知し得べし。

作令八九「……敵砲兵の有効射撃を被る顧慮あるに至れば適置疎開し爲し得る限り敵火の損害を減じつゝ前進す……」

作令九二、「歩兵は……火力と運動との調和により敵を制壓し……」
と二原則は教へある所以なり。

其の二 「グンビンネン」會戦後に於ける露第一軍の

逡巡遲疑の情態に就て

一、露軍司令官以下の茫然たる態勢

「グンビンネン」會戦直後の獨軍は神速果敢に一舉に退却を開始し其の附近殆んど一兵も止めず。

露軍は前日來受けたる震駭と損失の影響大なると部隊の混淆整理に當らんとする翌二十一日天明後前方を望めば戰場は全く空漠にして靜寂なり露全軍寧ろ意外の念を抱きつゝも獨軍は「アンゲラツプ」川の後方陣地に據るならんと判断せり。

露軍司令官レネンカンブ大將は追撃の如きは全く考慮するの餘裕無く直後の處置として令下諸軍に休息を與へ秩序を回復し増援部隊を合し然る後徐ろに追撃の舉に出でんとせり。

二、二十一日は露軍の最前線は殆んど戰場を出でず北側地區に在りし強大なる騎兵軍團すら僅少の部隊を僅かに推進せしめたるに過ぎず。
全線全く不動休息の態勢なりき。

二十二日發令の軍命令は冒頭に曰く「敵は二十日全線に於て撃退せられ若干距離後退し工事に據れるが如し」と而して同日始めて「アンゲラツプ」川の線が放棄せられあるを知る。

如何なる理由あるか今判定し得ざるも露第一軍としては萬難を排して獨軍を追撃し優勢なる騎兵の快速を以て「インステル」川左岸地區に進出し少くも獨軍を「インステルブルク」以東の地區に抑留して之に殲滅的打撃を與ふるを常道とすべきも一步も戰場内の追撃もせず宜ろ獨軍の餘りにも見事なる退却振りに全軍茫然として自失し氣力頓に衰へ疲勞急に心身に迫り徒手傍觀して獨軍に讎弄せられたる感あり。

其の三 「グンビンネン」會戦後に於ける獨、露兩軍

司令官の決心と心境に就て

一、獨軍司令官「フォン、ブリットウイウツ」大將は理智的判斷に誤まれ退却す(要圖參照)。

1、獨軍は第一軍團長「フォン、フランソワ」の堅確なる意志と卓絶せる戰略眼に依り軍司令官の決心を促し遂に左翼方面の機動的作戰を敢行して八月二十日の所謂「グンビンネン」附近の會戦を惹起せり。

此の會戦の結果は中央正面に於て第十七軍團が既に展開を完了し戰鬪を準備せる正面に強襲的攻

撃を斷行し甚大の損害を受けて「ロミンテ」河畔に撃退せられしも他面左翼方面たる第一軍團主力の露軍の右翼方面に對する攻撃は十五時迄良好なる進捗をなし敵線内に進入すること七、八キロ捕虜六千を算し第一軍團長は勝利の確信を以て明二十一日より更に攻撃を再興せんとしつゝあり南部方面の狀況

南部方面に作戰する豫備第一軍團の不期遭遇戰は各級指揮官の獨斷と敢行力に依り獨軍次第に優位を占め逐次露軍を壓迫しつゝある狀況なり殊に此の方面に於ては豫備第三師團既に「クレスツォーウエン」附近の露軍の背後に迫れるを以て翌朝を期し更に殲滅的打撃を與へ得る戰況なり。
2、何が故に軍司令官は此の有利の獨軍態勢に於て退却せんとせしか。

軍司令官は寧ろ此の戰況を悲觀し露軍に増援あるべきを疑ひ前途を憂慮し恰も露第二軍は「ロシアン」「オストロレンカ」地方に於て國境線に達せりとの報を得戰を避けて「ワイクセル」河畔に向ひ退却するに至當なりと判斷せり。

作戰主任中佐、參謀副長が極力攻撃繼續を主張し第一軍團長の如きは切に退却の中止を具申せしも左の理由にて頑として聽かず。

イ、當面の戰況は勝利を以て終了し得ざるべし。
ロ、露第二軍の前進の爲側背の危険を感ず。

要するに軍司令官は腹背の危険を感ずるや直ちに會戰を斷念せりと認めざるを得ず。當面の戰況を有利ならずと思惟せし事項は概ね左の推測的理性より來る。

イ、左側背に最も活躍せる騎兵第一師團の消息を絶ちしことに大不安を感ず（此れは約三倍以上の露の騎兵集團の爲全く制壓包圍せられしならん又露軍の北翼は隨時鐵道に依り増援を受け我が軍の行動愈々困難とならんと誤測す）。

ロ、第一軍の攻勢移轉は十五時に於て停頓せり、軍北翼に於ける形勢の重大なるに鑑み同軍團が本日の成功を明日繼續し得べきやは疑問なりと。

ハ、中央正面に就ては「ケーニヒスベルグ」の豫備軍及第十七軍團には最早多くを期待するを得ず
ニ、右翼方面に於ては豫備第一軍團及豫備第三師團は恐らく兵力略々同等の敵と相對峙するなるべく敵は更に増加の様相なり。

縱令豫備第三師團の側面攻撃が明二十一日南翼に於て十分の成功を收めたりとするも其の影響は此の日直ちに「グンペンネン」方面の戰線に波及すること能はず。

ホ、以上の悲觀的判斷資料を骨子として決心せる上に此の時第十七軍團（敗退せし中央軍）の情報將校が軍團の退却狀況に就て軍司令官に陳述せし悲痛なる形容詞は痛く軍司令官の胸を衝き深刻なる印象を與へたりと云ふ。

3、軍司令官の情況判斷の基礎は凡て根據不確實なる事を強いて理智的に推斷し而かも敵軍を有利に自軍を不利に觀測したる結果なり。

就中兵團の戰勝意思、道德力を等閑視せるは遺憾なり。

我が騎兵師團が消息を絶ちしを以て直ちに左翼の形勢を悲觀するは推測に外ならず敵軍が北翼に増援を受くべしと云ふも亦然り。

第一軍團及び南部方面の軍司令官の判斷は既に現實に現はれたる有利なる形勢を觀るに特に暗影を深くしたるものなり。

惟ふに二十日夕の情況に於て獨軍の戰況兩翼に於て好望を呈せしは大に成を強ふするに足るものあり。

若し軍司令官にして一部幕僚の進言の如く攻撃繼續の決心を固執せしならんには一兩日後に於て勝利を大成し得るの望み十分なり。

正に軍司令官として堅忍、作戰を指導すべき秋なるに其の意思力は早くも挫折せり。

4、「モルトケ」參謀總長の訓令の意曲にはあらざるか。

軍司令官は出征に當り參謀總長「フォン、モルトケ」大將より「貴軍は生存せざるべからず如何なる事あるも「ワイクセル」の線は保有し得ざるべからず」との意を訓令せられたり。

軍司令官が多難の狀況に於て斯の如き訓令に想到し最後の努力を控制したるは事情の諒とすべきものなきにあらざるも元來危険を伴はざる勝敗なし膽力なくんば卓絶せる統帥と謂ふを得ず將帥の膽力は屢、理論上の危険を超越して戰勝の彼岸に到達するは古來戦史の證する所なり。

二、露軍司令官「ヒンデンブルグ」大將の決心

1、崩壊に瀕しつゝありし露軍の慘狀

イ、右翼方面

北方騎兵集團は十九日の戰鬪及夜間退却に起因し著しく疲勞し且彈藥を射耗し二十日には全く戰鬪に參與せずして終日「クラウピンケン」東方九キロの地點に潜在せり。

獨立騎兵第一旅團は遠く國境附近迄退却しあり。

右の如く北翼方面の露騎兵は優勢なるも恐るるに足らず。

之に反し消息を絶ち獨軍司令官の神經を惱ましたる獨騎兵師團は戰勝の餘威に乘じ深く敵線の背後「ビルカレン」に突進しあり。

最右翼の第二十八師團は完全に崩壊して戦力なく砲兵の大部分は獨軍の手に歸し三步兵聯隊長は共に「ウインバルレン」迄逃走し死傷七千人の大損害を蒙り志氣全く沈滞せり。故に獨第一軍にして戰鬪を再興せば容易に最後の大勝を獲る狀況にありしなり。

而かも露軍の戦線背後には獨軍司令官の推測に反し近く豫備を存せざりしを以て獨軍の北方よりする包圍席卷は何等の妨害を受くることなかりしなり。

□、中央方面

中央方面の諸師團亦多大の損害を蒙り第二七師團の如きは「スタルペーネン」の戦闘以來既に少くとも約七千人を失ひ南方第四軍團の第四十師團に在りては健全なる兵卒にして逃亡者續出せし状況なり。

故に露軍中央正面は獨軍の正面攻撃に對抗するの力を有したるべきも攻勢移轉の餘裕なかりしを認むべく現に二十日の戦闘に獨の第十七軍團の退却に際しても何等追撃に進發し得ざりしなり。

ハ、「ゴルダープ」方面兩翼に於ては露軍は獨軍の豫備第一軍團に對して戦闘し其の一部は既に退却を開始せる状態に在りしを以て翌二十一日拂曉獨軍新鋭一師團の側面攻撃實施と共に崩壊すべきは明らかなり。

2、露軍司令部幕僚悉く退却を進言す。

狀況斯の如きを以て露軍司令部の全幕僚は此の日夕擧つて軍司令官に進言するに軍を潰滅に陥らざらしめんが爲退却すべきを以てせりと云ふ。

三、兩軍司令官の比較對照

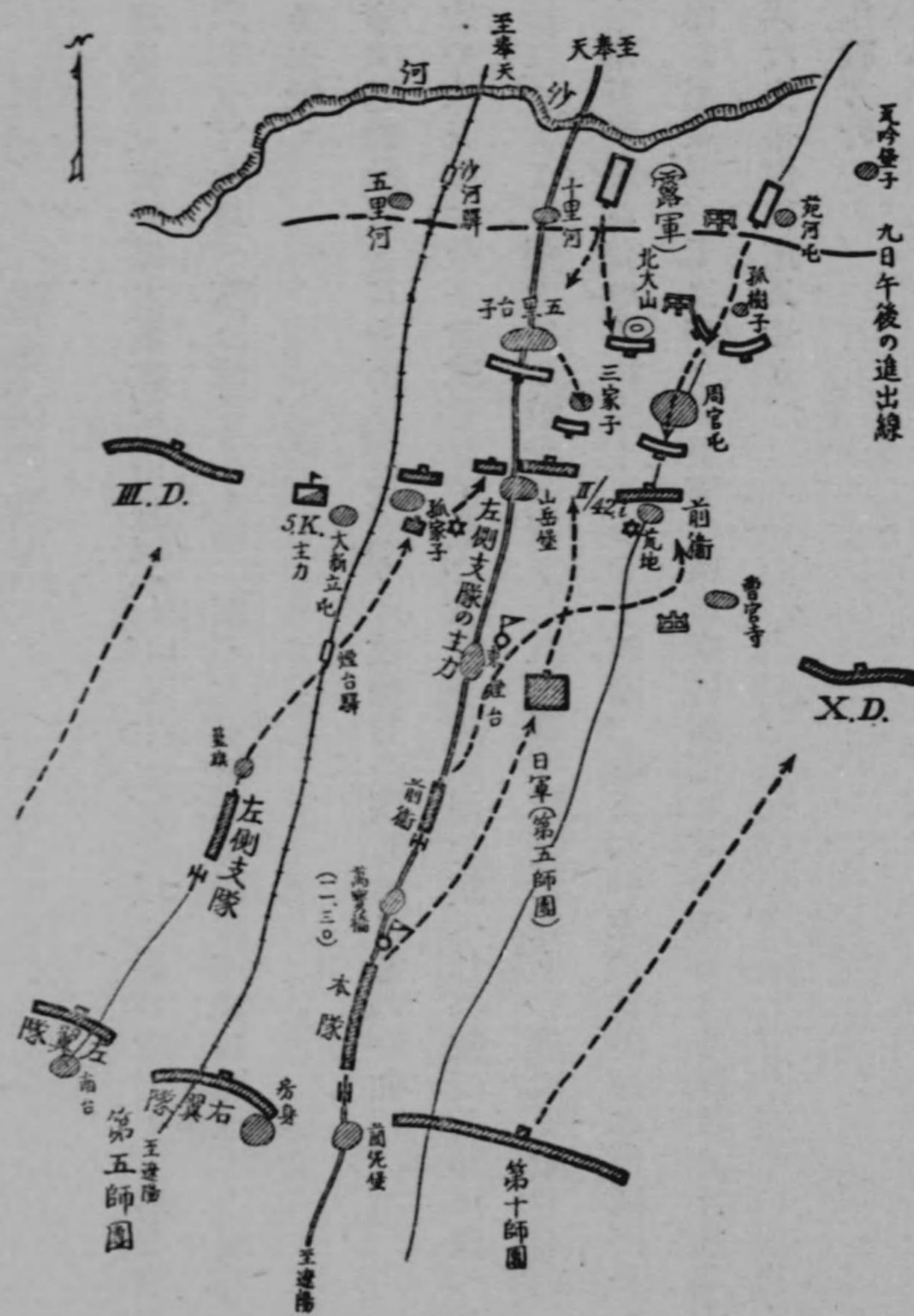
兩軍司令部の空氣を戦史により彼我對照しつゝ靜觀するは眞に興味ある現象と謂ふべし。

勝利は勝利を信ずる者に歸す勝利を信ずるを得ざるが故に勝利を失ふとは一眞理なり。

獨軍司令官「フォン、ブリットツイット」大將は此の勝つべき戦に勝たずして自ら戦勝放棄したる結果「ヒンデンブルグ」元帥は復活起用せられ交代して獨軍を指揮し露軍の鈍重性と沼澤地區を利用し露の第二軍を「タンネンベルヒ」の會戦に撃破し石火的に露の第一軍に攻撃を加へ各個に撃破して名聲赫々たらしめたり。

五里臺子附近兩軍一般要圖

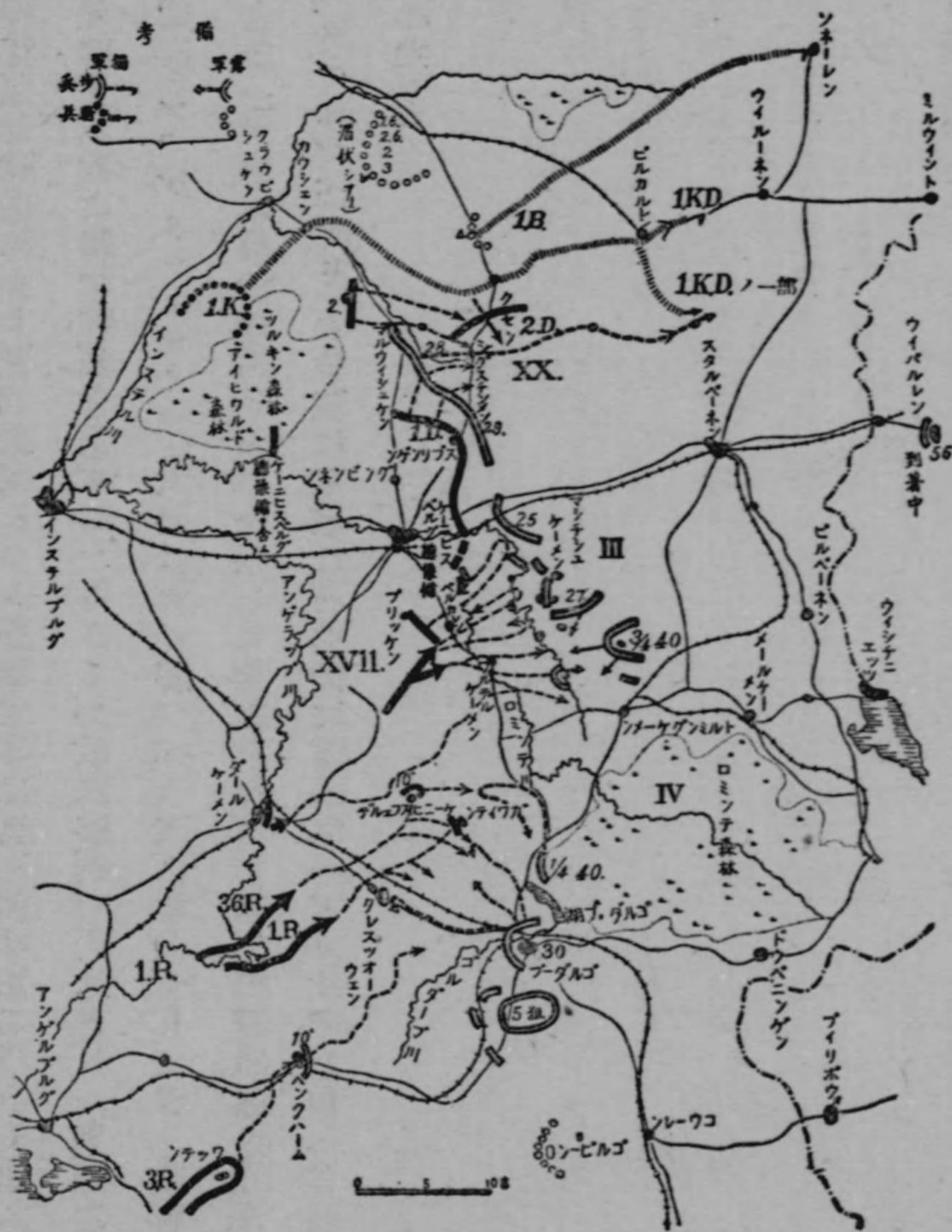
十月十日



第四章 第五師團五里臺子附近の戦闘 (日露戦役三七、一〇、一〇日)

「シネンビング」附近會戰要圖

(一千九百零四年八月二十日於ける)



其の一 戦鬪前の狀況

一、十月七日以後第五師團は右翼隊〔村山旅團(21.i. 42.i. の主力)を以て房身附近より南臺東側附近を左翼隊〔山田旅團(41.欠)を以て南臺附近より第二軍の右翼第三師團に連繫し陣地を占領しあり。]

二、露軍の攻勢作戦

當時露軍は漸次運動活潑となり南下の狀ありて攻勢を企圖しあるもの如し。

第四軍司令官野津元帥は令下諸隊をして嚴に戦鬪の諸準備を整へしめ敵の攻勢に備へしむ。

九日師團前面に在りては強大なる敵漸次南下し五里臺子附近に在りし鎌田支隊を壓迫し同日十六時頃には遼陽—奉天街道東方地區に少くも歩兵一旅團、砲兵二中隊、其の西方地區に歩兵一聯隊砲兵三中隊を現認し范家屯、十里河、五里河の線以南に進出し其の歩兵二中隊は日没前北大山を占領し僅少なる騎兵は山岳堡に進入せり。

三、我が軍の作戰方針

大山總司令官は斷乎として攻勢作戦を行ふに決し全軍をして起つて迎撃する爲一齊に攻撃前進を命じ敵を求めて撃破し鐵道線路以東の山地に壓迫せんとするにあり。

野津軍司令官は此の意圖を知るや同夜直ちに第五、第十師團に出發準備を命じ明十日拂曉敵の攻撃

を豫期し之を鐵道線以東の地區に迎撃して撃滅を企圖し即時其の準備に著手す。

其の二 五里台子附近の戦鬪

一、第五師團の前進部署

師團長は十日拂曉四時五分軍司令官より十日七時現在地出發蘭泥堡、瓦哈堡子の線以西の地區を前黃家甸に向ひ前進すべき命令を受領す師團は直ちに左記前進部署を命ず。

一、獨立騎兵(騎兵第五聯隊の主力)は六時出發五里臺子方向に前進し敵情搜索。

二、前衛(司令官村山少將歩二十一聯隊、騎兵一小隊、野砲十四の一大隊、工兵中隊)は七時現在地出發遼陽—奉天道を前進し山岳堡方向より五里臺子に向ひ敵を求めて攻撃。

三、左側支隊(長山田少將歩十一聯隊、騎兵一小隊、野砲五の一大隊、工兵一中隊)は同時出發藍旗、孤家子を経て前衛に連繫して五里臺子に向ひ前進し前衛の戦鬪に協力。

四、本隊(師團司令部歩四一、歩四二聯隊、野砲第五聯隊(一大隊欠)工兵第五大隊(二中隊欠)は七時三十分蘭泥堡附近に集合。

二、各部隊の前進部署

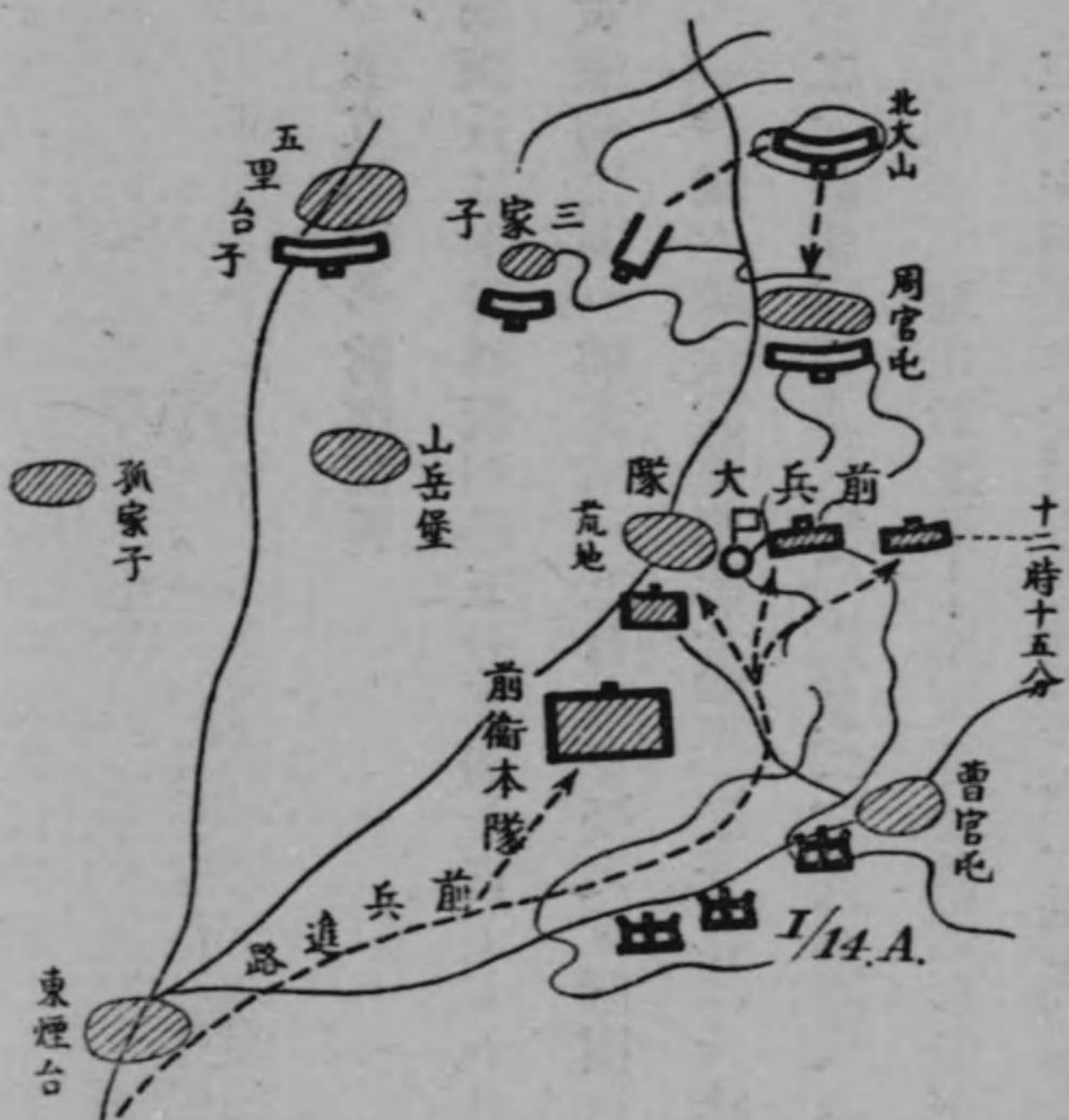
右翼隊は六時三十分左翼隊は七時に師團の前進命令を受領し急速に其の準備に取かかりたるも相當

時間を要し八時には左側支隊、八時三十分には前衛、共に夫々勇躍して前進を開始し師團本隊も七時三十分迄に蘭泥堡に集合を終り九時四十分前衛の進路を續行す。

前衛の軍隊區分

前兵（歩二一の第一大隊、騎兵一小隊）

本隊（爾餘の諸隊）



遼陽—奉天道を前進し途中敵の抵抗を受くる事なく十時十五分前兵は東煙臺を占領す。此の時前衛司令官村山少將は敵の歩兵約一中隊北大山を占領しあり又歩兵一中隊は同山の西南斜面を下り我が左側方面に行動するを認む。東煙臺以北の地形は平坦開濶にして北大山一帯の高地より瞰制せらるるを見るや前兵の進路を東北に轉じ曹官屯を経て荒地東方高地を占領すべく命ず。同時に前衛砲兵大隊は曹官屯西南高地に陣地を占領し前衛の戦闘に参加し得る準備をなさしむ。

前衛本隊の諸隊を一時荒地南端に開進せしむ。

極力敵情を偵察す。

三、師團長の情況判斷

師團長は本隊の先頭に在りて行進し十一時三十分萬寶橋北方に達し如上前衛の行動併に敵情に關し報告を受けたり。

當時右翼第一軍（黒木軍）方面に方り砲聲益々熾んになり其の戦闘の酣なるを想察せしむるに係らず當師團及隣接せる右の第十師團、左側第三師團の前面は比較的靜寂にして唯だ時々僅かに銃聲を聞くのみなるを以て師團長としては露軍の攻勢重點は我が第一軍正面に指向せられ師團正面の如きは僅小部隊の牽制行動に過ぎざるべし神速に攻撃を實行せば敵の展開完からざるに乘じ前衛のみの獨力攻撃にて容易に北大山及五里臺子附近を攻略し得るのみならず敵主力の準備整はざるに乘じ師團主力を以て之を壓倒せば其の奏功確實なりと判斷し直ちに師團參謀を前衛司令官の許に派遣し「勉めて速かに北大山を攻撃し師團の企圖を容易ならしむべし」と其の意圖を傳達せしむ。

此の際師團長は情況に適應せる判斷を下したるものと謂ふべく所謂敵は我に先んじて要地、要點を占領したるも其の主力は尙ほ展開中なるものと看破せしは適當なりき。

事實上戦史は露の前衛司令官たる「ゲルレフ」大佐としては漸く其の展開の一部を終り日本軍の前進

に對し辛うじて先制的に要地を占領したる所なりき。

四、前衛の戦闘（我に先んじて展開しある敵に對して）

前兵長たる大隊長は前衛司令官の命に依り進路を東北に轉じ荒地に向ひ前進し尖兵中隊は十二時十五分荒地東側高地に達し前兵の主力は其の南側地區に達す。

當時の敵狀は如何。

敵は孤樹子、周官屯、北大山の線に續々展開中にして其の一部は已に孤樹子、周官屯南端附近に停止し作業を開始しあり其の現認し得る兵は一大隊を下らず。

前衛司令官の處置

前衛司令官村山少將は前衛本隊の區署を命ずるや直ちに馬を飛ばして前兵第一戰中隊の位置する高地に來り敵狀、地形を觀察したる後前衛獨力にて之を攻撃するに決し十二時二十分直ちに左記要旨の命令を下達す。

歩兵第二十一聯隊長は部下聯隊を指揮し荒地東高地より北大山附近の敵を攻撃すべし。

前衛砲兵の全火力を以て現在地たる曹官屯西南高地より其の攻撃を援助せしむ。

歩第二十一聯隊の攻撃行動

聯隊長は第一、第二大隊長に對し左記の展開命令を下達し直ちに攻撃前進せしむ。

命令の要旨

一、敵は現在目認し得る如く孤樹子、周官屯、北大山の線に展開を完了し其の一部は工事をなしあ
るものの如し。

前衛は速かに獨力之の敵を攻撃す。

二、聯隊は今より當面の敵を攻撃せんとす。

前衛砲兵は聯隊の攻撃に協力す。

三、第一、第二大隊第一線

第一大隊は右第一線荒地東北の高地に展開し周官屯南端附近の敵を攻撃すべし。

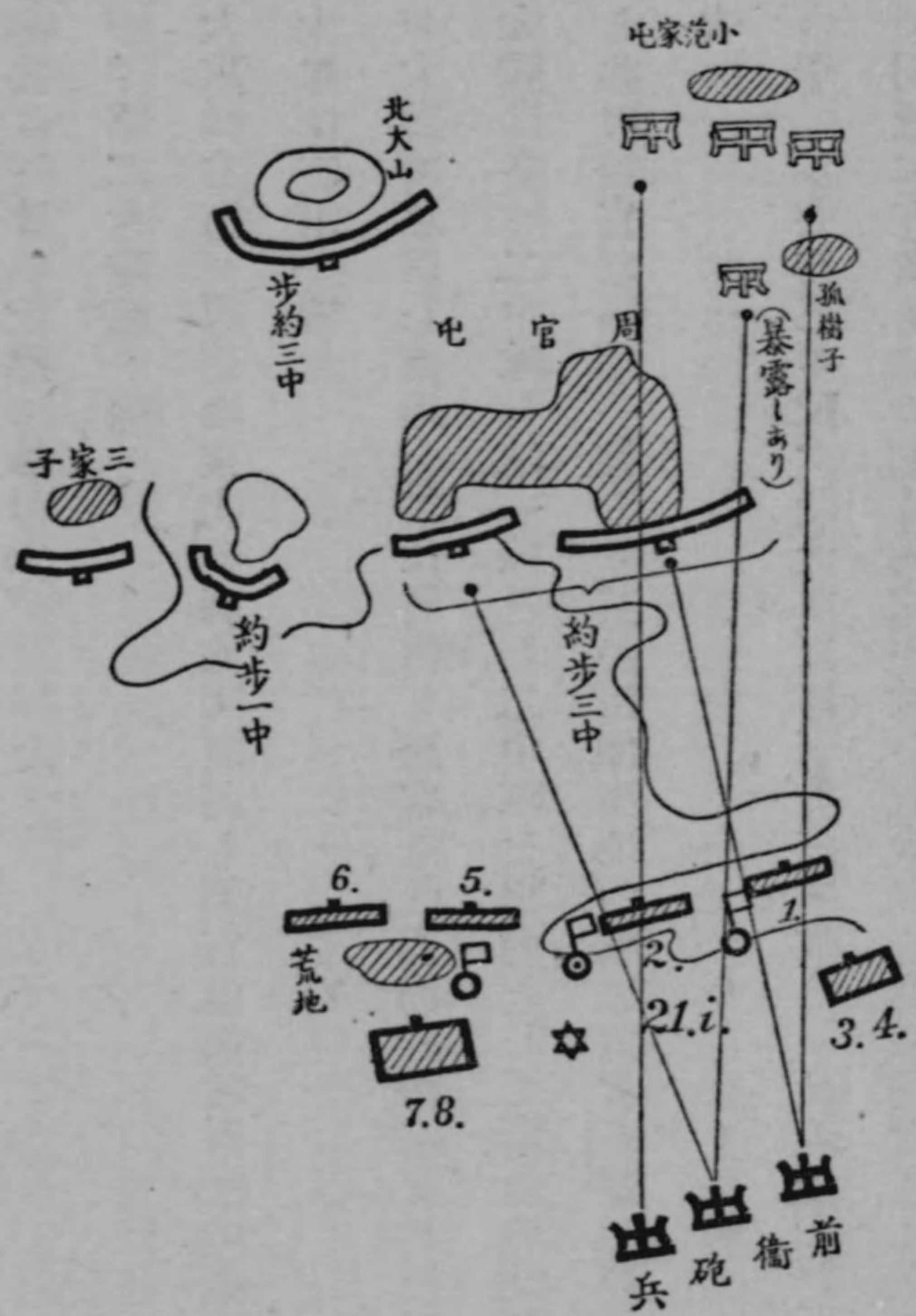
第二大隊は左第一線

右第一大隊に連繫し荒地北端に展開し周官屯西部部落南端及其の西側高地の敵を攻撃すべし。

第一線大隊は各、二中隊を第一線とし二中隊を豫備として所命の地區に展開十二時三十分攻撃前進を開始し共に周官屯南端一帶より其の西側高地の敵に對し射撃を開始せり。

敵の兵力

周官屯南端に歩兵約三中隊、北大山に同じ約三中隊あり又若干（約一中隊）の歩兵周官屯西側高地並に三家子附近に在るものの如く約三中隊の砲兵は小范家屯附近に在り又約一中隊は孤樹子西方稜線



上に暴露して熾んに我を射撃中なり。

前衛司令官の決心

村山前衛司令官は現認しある敵状況に鑑み成るべく左側支隊と協力して攻撃せんことを希望せしも我が左側支隊の位置さへ不明にして連絡するを得ず依つて暫く攻撃前進を中止するに決す。

五、左側支隊の行動

左側支隊の前進部署と進路

前衛(歩十一聯隊の第三大隊、騎兵一小隊、工兵中隊主力)

本隊(残餘の諸隊)

藍旗—烟臺停車を経て五里臺子に向ひ前進し十一時三十分其の前衛の先頭孤家子に達す。

時に五里臺子南端に敵の監視兵あり又同村東側高地に馬匹數十頭を認めしに依り直ちに孤家子北端

を占領し極力搜索を行ふ。

支隊本隊亦幾も無く該村南端に達し開進せ

り時に十二時二十分なり。

左側支隊長の情況判断と決心

山田少將は孤家子に於て敵情を視察したる

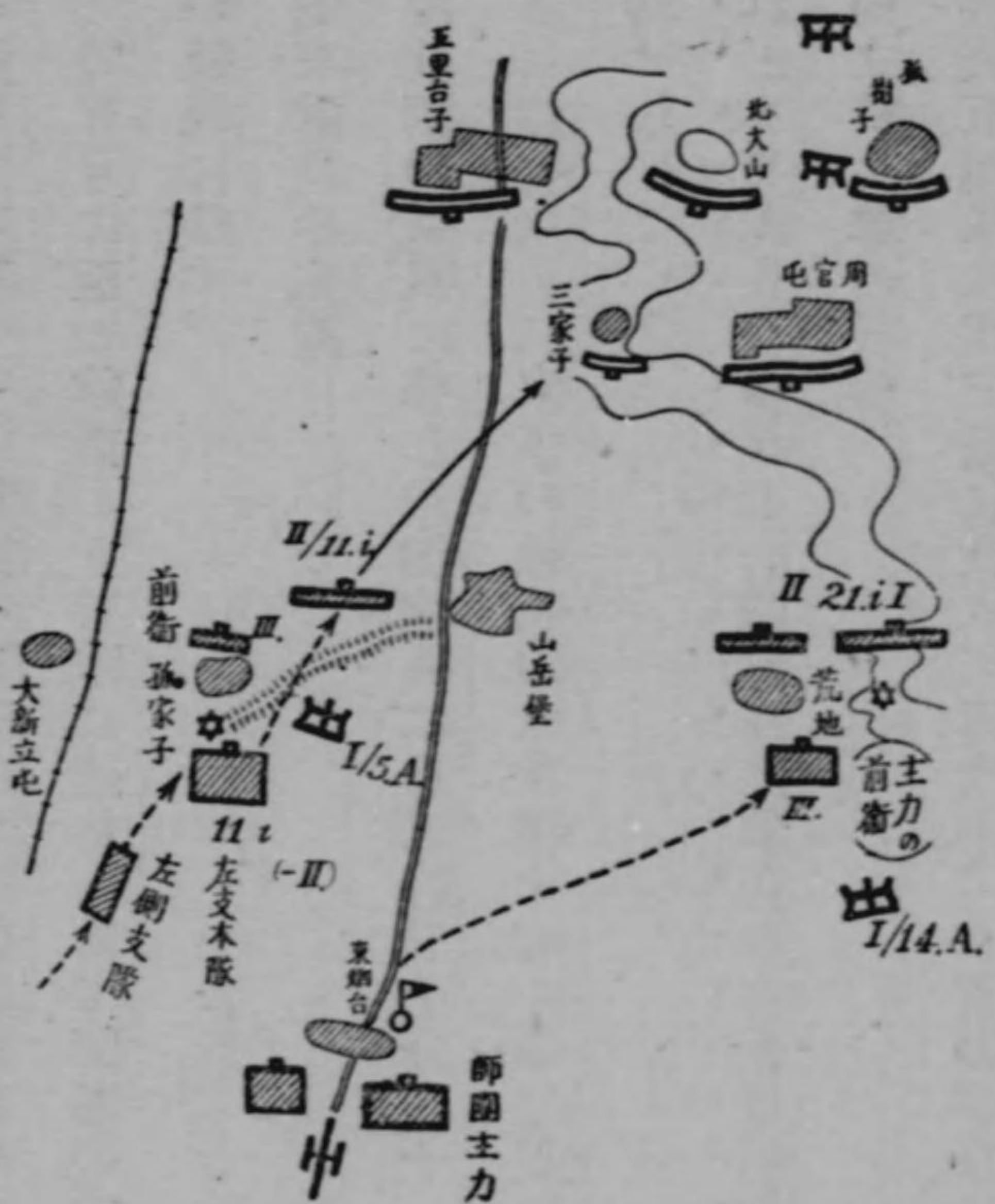
結果敵の砲兵約一中隊は孤樹子西側地區に

ありて山岳堡附近を掃射し歩兵約一中隊は

五里臺子南端を占領し同村及北大山には防

禦工事あり相當の敵部隊は其の附近に現在

しあるを知り左側支隊のみ五里台子附近の



敵を直ちに攻撃するの危険を考慮し師團前衛部隊の山岳堡に進出するを待ちて攻撃前進するに決す。十三時五分に至り前衛より支隊に連絡ありて師團の前衛は荒地方面より北大山の敵を獨力攻撃しあ
るの通報に接す。

左側支隊長の處置

師團前衛の通報に接し左側隊長は十三時三十分歩十一の第二大隊をして前衛の戦闘に連繫協力せし
むる目的を以て三家子の敵に向ひ攻撃すべく命じ更に砲兵大隊を孤家子東北端附近より此の攻撃を
援助せしむ。

然れども支隊長、歩兵十一聯隊長は前衛の山岳堡附近に進出すべきを豫期して未だ攻撃を開始せず

六、獨立騎兵隊の行動

騎兵第五聯隊は邵二臺に在りて青堆子、小東山堡方面を搜索中七時三十分師團命令に依り第三中隊
のみを五里臺子方面に派遣し敵情搜索に任じ主力は八時五十分邵二臺出發十一時大新立屯に轉進し
第三師團の前衛騎兵と共に同地に在り搜索中なり。

七、師團前衛其の後の處置

前衛司令官は漸く左側支隊の所在を審かにし現在孤家子に在りて我が前衛の進出を待ち連繫して山
岳堡西北側地區より北大山の敵を攻撃せんとするの企圖を知りしと雖も如何にせん前衛主力は荒地

東北高地より同村北端に互り第一線部隊は展開し周官屯の敵を攻撃中にして今之を左に移し山岳堡
方向に移動せしむるの不可能なるを以て之を更に左側隊長に之の旨通報し極力進出して連繫せんこ
とを要請せり。

八、本情況に於て師團長の處置

師團長は第一線諸隊の攻撃意の如く進捗せざるを知りしも前面の敵は飽くまで寡弱にして前衛の獨
力攻撃を以てするも尙ほ成功の見込あり況んや左側支隊之に協力せば手に唾して攻略し得べしをと
頗る樂觀し十四時二十分村山、山田兩少將に左の件を命ず。

師團當面の敵は極めて寡弱なり敵の後續部隊は尙ほ未だ攻撃準備完からざるもの如し。

師團は極力速かに北大山の敵を驅逐せんとす。

第一線兩隊は極力攻撃を續行し北大山附近一帶の敵を擊攘すべし。

同時に師團本隊を東烟臺南側附近に開進せしむ。

九、左側隊長の處置

左側隊長山田少將は師團前衛部隊たる村山旅團の未だ進出せざるため歩十一の第一大隊をして山岳
堡の北端を占領せしめ尙ほ更に第三大隊を續行せしめんとするや敵の歩兵少くも一大隊第三師團方
面より前進し來り鐵道線路東方に移動せし報告を得左側の危険を虞れ第三大隊の前進を止め依然孤

家子北端を占領して左側を警戒せしめ以て前衛の我と同線に達するを待てり。

一〇、師團長兩部隊長を更に督促して攻撃を續行せしむ。

十五時二十分に至るも第一線は攻撃更に進捗せず師團長は更に督促して力攻を命ず。

前衛たる村山部隊は敵の猛火を冒して十五時五十分攻撃前進を始め右第一線たる第一大隊をして周官屯及其の西方高地の敵を左第一線たる第二大隊をして周官屯西方高地の敵に向ひ一意攻撃せしめしも敵砲兵火の爲前進意の如くならず攻撃頓挫す。

兩大隊は一進一止死力を盡くして敵に接近し在る時孤樹子附近の敵砲兵及周官屯西方高地の敵より猛烈なる銃砲火を受け我が第一線は荒地北方約千米の高地に達せし頃は前進最も困難となり死傷續出す。

聯隊長及前衛司令官の決心

直ちに豫備隊の一部を第一線に増加し極力前進を促し攻撃を督勵するも戰線漸く膠著し容易に進捗せず苦戦の状態に陥る。

左側支隊方面の戦況怪奇の感あり。

左側支隊長は十六時前後に師團長より攻撃促進に關する二回の督促命令を受領せり然れども左の理由にて一步も前進せず。

イ、前衛たる村山部隊が未だ山岳堡と齊頭面に進達せず（山岳堡には其の部下たる第二、第一大隊占據しあり）。

ロ、三家子及其の東方高地に向ひ左側支隊のみにて攻撃せば五里臺子及其の西方地區の敵に對し左側を暴露して危険なり。

ニ、孤樹子方向の敵砲兵より全く側射せられ殊に周官屯西部の敵歩兵より側面を衝かるる虞あり。以上の理由に依り未だ前進の時機に非らずとなし單に北大山の敵を砲撃せしめたるに過ぎず。

然るに前衛村山部隊の通報により十七時に至り始めて村山部隊は攻撃進路を變じ荒地及其の東側高地方面より周官屯の敵を攻撃しあるため山岳堡に進出せざるを自覺し第一線部隊を逐次右方に移し漸く前進せしめたり。

一一、師團長の決意と攻撃部署

師團長は十六時三十分に至るも前衛たる村山部隊、左側支隊たる山田部隊の攻撃遅々として進捗せざるを以て一意猛攻を繼續せしむるに決し左の處置をなす。

イ、前衛部隊長に對し萬難を排し猛攻を斷行せよ。

ロ、本隊より歩四二の第二大隊を前衛と左側支隊との中間山岳堡に出し兩部隊の攻撃を振起せしむると共に同大隊は一意北大山に向ひ直進せしむ。

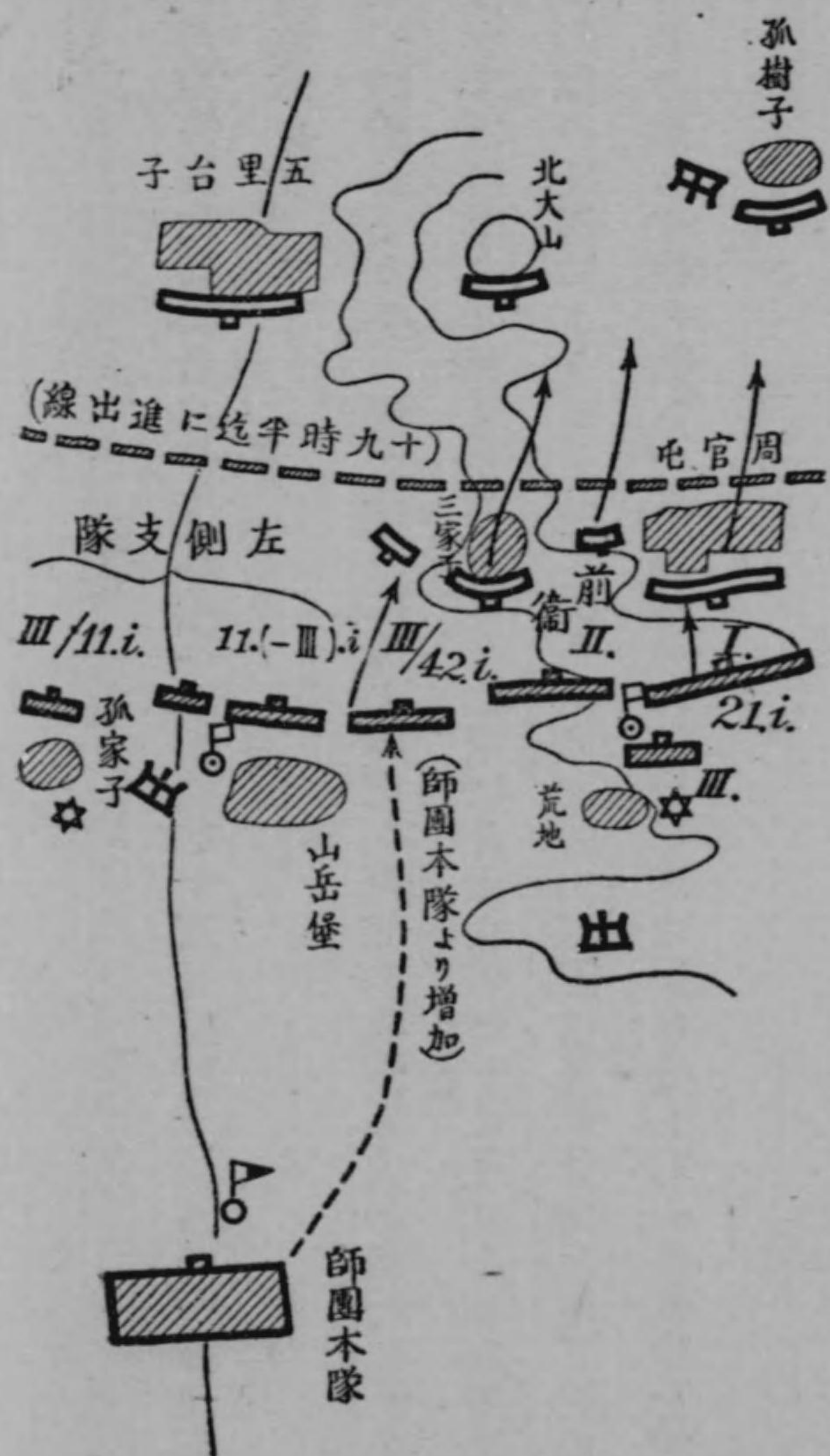
八、左側支隊歩第十一聯隊の第三大隊も十七時四十分頃に山岳堡にあ 同隊第一大隊の左に連繫して五里臺子南端の敵に對す。

一二、十八時頃第一線部隊の攻撃態勢

日は將に大陸大平野の西に沒せんとする十八時頃薄暮を衝いて第一線諸隊は攻撃前進に移り師團長の增加大隊及左側支隊の主力は山岳堡東西地區より三家子の敵に向ひ前進敵陣地前約四百米に達す

圖要過經闘戰隊側左、衛前

分十三時九十月十



同時頃前衛部隊も攻撃を續行し遂に周官屯及同西方高地を奪取し萬歳の聲夕闇を衝いて悲壯なる叫びを擧ぐ。

山岳堡方面より前進せし部隊も漸次敵の火力を壓倒し十九時三十分頃三家子の敵を撃退し同村及其の西側に達し北大山及五里臺子の敵と對戦して夜に入る。

一三、師團長は夜に入るも依然北大山を夜襲し攻略せんとし夫々部署す。

其三 露軍狀況の概要

一、此の日に於ける當方面の露軍の狀況を略述せば概ね左の如し。

西部兵團は寧官屯、紅寶山附近の陣地に在りて防禦工事を繼續しありしが十時三十分第十軍團長は軍司令官より前衛を以て大范家屯附近に堅固なる陣地を構成し尙ほ歩兵三大隊以内を以て北大山附近の高地を占領せしむべき軍命令に接す。

依つて同軍團前衛司令官「ソロムコ」大佐は部下歩

兵三大隊併に野砲一中隊を率ひて前進し歩兵二大隊、砲兵二中隊をして大范家屯、小范家屯を占領せしめ「ソロムコ」大佐は歩兵一大隊を周官屯附近に差遣し警戒に任せしめ砲兵中隊を孤樹子西側に歩兵各一大隊を孤樹子及北大山に配置するに決し十三時頃夫々配置につくべく行動中日本軍と不期的に遭遇したるものなり。

其の四 本戦闘の見地より得たる教訓と原則との對照

一、本戦闘は約一日行程を隔てて相對せし兩軍の攻撃前進を起すに當り惹起せし大兵團内に於ける一部の遭遇戦なり。

日本軍は始め陣地に據りて敵の攻撃を期待しありしが突然攻撃前進の命令を受け惶惶として出發し露軍は要地、要點占領の目的を以て前進し恰も彼我兩軍共其の到着地點に於て遭遇したるものなり。故に露軍の先頭が其の目標地點に到達してより全兵力が到着するまで遭遇戦の形をなし爾後は純然たる攻防戦の性質に變化せるも遭遇戦と雖も戦闘經過中自然に兵力、火力、精神威力の差等は通常斯の如き経路を辿るものにあらざるか。

本戦闘は前衛獨力を以て攻撃を實行せし一例なり。

一、前衛の戦闘行動に就て

1、前衛の獨力攻撃に就て

作令七二「遭遇戦に於ける前衛の行動は本隊の戦闘に特に大なる關係を有す故に前衛司令官は……又要すれば獨斷を以て前衛を部署し機を失せず戦闘の初動を有利ならしむることに勉むべし此の際戦闘の支撐たるべき要地は縦へ戦闘を惹起し又は正面過廣となるも之を占領するに躊躇すべからず……」

然るに本戦闘に於て前衛の行動上次の如き缺點あると謂はざるを得ず。

イ、前衛は出發に際し既に五里臺子附近の攻撃を命ぜられあり。

而して其の東烟臺附近に到着せし時は僅少なる敵を認めたるのみなるに係らず果敢なる攻撃を躊躇し徒らに地形上敵より瞰制せらるるとか開濶しあるとかに制せられ無意味に前進方向を轉じ其の進路を變換したるは適當ならず。

ロ、過度に左側支隊との連繫のみを顧慮し神速果斷の行動なく遂に機を失して其の攻撃功を奏せず遂には師團長をして本隊の一部を煩はし攻撃を振興せしめらるるに至るが如きは機宜に適したる前衛獨力の攻撃方式に合せず。

ハ、前衛が獨力攻撃を執行するは敵の弱點に乗じて之を捕捉するか或は戦闘の要地を奪取するか何れにせよ迅速果敢の斷行なかる可らず地形の不利、友軍との連繫の如き深く顧慮するの

要なく唯だ戦機を逸せざらんことを努めざる可らざるなり。

二、當時五里臺子附近一帯に在りし敵の兵力は歩兵約三大隊砲兵二中隊にして然かも歩兵一大隊づゝを孤樹子、周官屯、北大山附近に夫々配備に就かしむる途中にして辛じて其の配置を終りしは十三時頃なり。

故に前衛が東烟臺附近に到着せる時(十時十五分)は敵は僅かに其の一部が漸く北大山附近に到達したるのみにて此の山は彼我兩軍共此の戰場に於ける要點である前衛にして活眼を開き戦闘原則を冥想せば一刻の豫猶もなく一意専心北大山を目掛けて攻撃するを至當とし又斯くせば大なる困難なく之を奪取し戦闘の初動を有利に支配し得たりしならん。

而かも北大山の價値は之を我軍の有に歸すると否とは全般の戦局に重大なる關係あるを以てなり。

2、前衛の攻撃部署について

初めより山岳堡に一兵をも進めざりしは適當ならず又前衛が右前方に轉進するに當り本道上を全く解放して我が左側面を敵方に曝らしたるは宜る冒進と謂ふべく戦術上至當に考ふるも少くも歩兵一中隊は本道を前進せしむるを肝要とす殊に後續する師團本隊の掩護關係よりするも前衛としては其の任を全ふしたると謂ひ得ず此れ作令八一「……或は砲兵、司令部等を戦車を以

て急襲せしめ戦勢を左右すべき好機を敵に捕捉せしむる機會を與ふるものなり」と。

或は此の方面に左側支隊の進出を豫期せし爲なるか。

之れ大なる誤りなり苟も前衛は師團命令に依り本道を前進すべきものにして而かも本道附近にある山岳堡の如きは最も顧慮すべき豫想戰場の要地なり縦ひ戦闘を惹起すとも必ず前衛が奪取せざる可らざる重大なる責務を有す。

然るに多分左側支隊進出するならんとの自己判断を以て推算するが如きは大なる誤りなり。

一步譲つて考うれば若し前衛が全力を擧げて轉進せんとせば何を捨て置くも左側支隊長と密接に連繫し其の了解を得て處置せざる可らず連絡動作全く不十分なりしは遺憾なり。

之れ本戦闘遲々として進捗せず左側支隊との協同も成らず遂に師團長に腐甲斐なき督促を數回も受けて漸く攻撃せしも其の成績は極めて不良なりし所以ならんか。

3、神速なるべき前衛獨力攻撃の開始は極めて鈍重なりき。

前兵が東烟臺を占領し前衛司令官が攻撃の決心をなし兩大隊が運動を始めし迄に要せし時間は實に二時間十五分なり。

其の動作の緩慢にして敏速ならざるは如何なる理由あるにせよ司令官の決心に基く處置としては全く情況に合せざる感あり。

第一線兩大隊長の展開についても戦闘の本旨に合せず。

此の好機を捉へ敵の兵力微弱にして尙ほ準備整はざるに乘じ先制の利を獲得して先づ一大打撃を與へんとする状況にあるに係らず漫然として第一線に二中隊豫備に二中隊の縦長區分をとり慎重なる陣地攻撃の方式を以てせしは適當ならず此の際思ひ切つて第一線の兵力を強大ならしめ(三中隊を第一線)初めより熾盛なる火力を一舉に發揚し攻撃を速かに進捗せしむるを要す。

4、前衛砲兵の使用に就て

作令七二、「前衛司令官は前衛砲兵をして迅速に陣地を占領し前衛歩兵の戦闘に協同せしめ若くは敵の展開を妨害し……」

本條中の敵の展開を妨害することは前衛砲兵としては重要なるべき責務の一つであつて現に本戦闘に於て我が砲兵が曹官寺西南稜線高地に陣地を占領したる時は敵は周官屯及三家子附近に分進中にて觀測所さへ適當の位置に選定せば好機到來の射撃目標を發見し三ヶ中隊の砲火を以てせば敵歩兵は到底周官屯に進入し得ざりしならん。

殊に唯一ヶ中隊の敵砲兵が明瞭に孤樹子西側に暴露陣地を占領し八門の砲影は我が砲隊鏡に映じあるに係らず此の勇敢なる敵砲兵の爲我が歩兵は甚しき側、縦射を蒙り爲めに攻撃は一時頓挫するに至るが如きは約三倍の砲兵を有する我が前衛としては如何にも敵砲の制壓、同歩兵の

撲滅が可能ならざりしを遺憾とす。

二、左側支隊の戦闘行動について

1、前衛部隊との連繫不十分なりしこと

左側支隊が師團前衛と連繫のみを顧慮し前衛固有の進路上にある本戦闘の要地たる山岳堡に進出せざるを理由とし孤家子に固着し敢へて自から前衛の缺陷を進んで補ふの協同的觀念に乏しく甚しく躊躇して之を占據するの手段を講ぜざりしは一理あるが如きも斯の如きは彼我速かに連絡を爲さば明瞭となり得べき事項なり況んや同師團内の部隊としては當然の妥協なり。

十四時前衛より現在の攻撃部署を通報し山岳堡に進出し得ざる事情を通報し左側支隊に該地進出を促進し來れるに係らず十七時十分(三時間十分を要す)に至り始めて前衛部隊が山岳堡に進出し得ざるを覺り孤家子に在りし歩十一聯隊の主力を逐次右方に移動し攻撃前進せしめたり之れ連絡十分ならざりし結果なり。

2、十六時頃師團長より攻撃促進の二回の命令を受けしが前衛が山岳堡と齊頭面に達せず且左側面の危険を理由として未だ前進の時機に非ずとして單に砲兵を以て北大山を砲撃せしめたるのみにして直ちに攻撃に移らざりしは其の理由は別として當時の戦況上適當と認め難き所なり。

三、師團長處置に就て

十一時三十分師團長は本隊の先頭に在りて前進中前衛が獨力を以て以て北大山及五里臺子附近の敵を撃攘すべしとの報を知り之を是認せし決意は可なるものに伴ふ處置は十分ならずと思ふ。作令七四「師團長は敵の弱點を捕捉し神速に之を攻撃せんとするか若くは前衛等の既に獲得せる利益を確保或は増大せんとするが如き場合に於ては各縦隊及逐次到着する本隊の各部隊をして直ちに戦闘に加入せしむるを要す……」

即ち師團長としては前衛が獨力攻撃を執行するを是認せしは師團の戦闘勝敗に關する要地を爭奪するか或は敵の弱點を看破して神速に之を攻撃するものなることを思ひ之に對應する如く本隊を部署し要すれば本隊砲兵を進出せしめて其の攻撃を援助せしむるが如きは當然なすべき手段ならん。

然るに前衛の攻撃意の如く進捗せず、左側支隊の行動又十分ならざるを知り命令を以て攻撃促進を督勵するのみにて本隊の一部と雖も増加する方法を講ぜず。

苟くも北大山附近の價値が全局の狀況を判斷し隣接兩師團の進出に重大なる影響を有するものなるかを考ふれば速かに攻撃推進の部署を採るを要す。

十六時二十分に至り始めて本隊より歩兵一大隊を其の中間第一線とし前衛、左側支隊の攻撃促進の動機と火力増加を執行し其の目的の一部を達成せしと雖も迅速に成果を獲得せんとせば初めよ

り相當の兵力を増加し敵兵力は少きも其の抵抗は頑強なりと判斷せば一刻も早く師團の全力を擧げて攻撃目的の完遂を期するを至當とせん。

四、諸隊の出發準備について

情況急を要し遭遇を豫期して前進せんとする師團命令を受領せしは右翼隊が六時三十分、左翼隊が七時なり。

然るに出發し得たるは前者は八時三十分(二時間を要す)後者は八時(一時間)にして豫め出發意途を受けありし部隊としては稍、緩慢なり特に要地占領に一刻を争はんとする本情況に於ては今少し迅速に出發準備を完了するの要あらん即ち吾人としては常に命令一下直ちに出發し得る如く凡ての整理を戰場に於てもなし得る如く平素より修養し置き毫も遺漏なきを期せざる可らず。

一例としては滿洲事變の際昭和七年六月十日滿洲義勇軍大川支隊全滅して吉林軍の主力將に長春(新京)―哈爾濱鐵路線を其の西側地區に進出し新京附近を襲撃すとの情報に接し第十師團長は急遽歩三十九師團長に歩一大隊、騎兵一中隊、野砲一中隊の一支隊を編成し鐵道輸送に依り該地に派遣し之が討伐を命令す。

聯隊長は十一時十分命令を受領し十二時三十分歩兵一大隊の第一列車を發車引續き騎、砲兵の第二列車を出さしめ約二時間後には支隊全部の輸送を完結せり。

之固より一地に駐屯しありたりと軍用列車の準備早かりし爲ならんも各隊長以下全力を擧げて急速其の事を處理せば比較的長時間を要するを常とする鐵道輸送にしても一支隊の輸送に二時間を費せしのみにて目的地に向ひ前進するを得たり。

五、騎兵聯隊の行動に就て

作令七一、「騎兵其の他搜索に任ずる部隊は各、其の任務に應じ廣く前方及側方を搜索し………以て指揮官特に師團長をして適時適切なる部署をなし得ると共に我が行動を秘匿することを勉むべし。

前項の外騎兵は敵に先だち要地を占領するを有利とすることあり又屢、敵の司令部、砲兵等を奇襲して偉功を奏することあり」

此の條項に對照して本日の獨立騎兵たる第五聯隊の行動を觀察するに遭遇戰を豫期しあるに係らず騎兵の活動は機を失せず其の責務の遂行を十分と認め難し。

師團命令にて緊要なる五里臺子方面の搜索は最も重要なるに途中より僅かに一中隊を以て搜索に任せしめ主力は大新立屯附近に在りて第三師團の騎兵聯隊と共に其の地域内に在りて行動し何等積極的に師團の戰鬪に參與せざりしは適當と謂ひ難し。

六、戰場内に於ける要點は速かに之を奪取し以て他隊の行動を容易ならしむるのみならず之れに依

り前進遅緩せる隣接部隊を推進せしむるを要す。

本戰鬪に於て五里臺子の奪取は全局の戰局に大なる關係を有す即ち右隣接の第十師團は五里臺子附近の我が有に歸するを待ちて前進せんとし左隣接の第三師團は亦五里臺子附近に敵あるが爲めに其の前進に甚しき不安の感を抱きあり。

即ち第五師團が此の敵を速かに驅逐し得ざりし事は第四、第二軍の攻撃前進に大なる支障を來せしなり。

要するに大軍内の師團としても要點奪取の成否が他の軍の作戰に影響を與ふること大なるを以て各指揮官は常に自他の關係を考慮すること肝要なり。

七、軍隊指揮官は能く友軍との連絡に努むべきも徒らに連繫を顧慮し戰機を逸するの愚をなさざるを要す。

本戰鬪に於ける前衛、左側支隊の師團命令の實行は多く師團長の意圖に合せず而して其の原因は過度に連繫を顧慮せしに依る即ち徒らに友軍の齊頭面に進出せざるを恐れて全局の狀況を達觀せず自ら連繫に努むることなくして友軍の連繫を待ち以て動機を逸せり。

八、今次歐洲戰に於ける獨軍の電撃的作戰について

「マツキ」獨逸大使館附武官が本年五月の「ベルギ」戰線に従軍し來朝後公開的に述べたる獨軍の遭

遇戰に於ける神速敢果なる電撃的行動につき述べたる一節を照會して參考に資す。
電撃戰とは所謂電光石火的に敵に打撃を與へ速戰即決を本旨とす。

獨逸が此の根本方針に則り軍隊を訓練し兵器、裝備の充實を組織的に開始したのは一九三三年で當時獨逸は未だ一個の自動車化の部隊を有せず又一臺の軍用飛行機を持たぬ時代に隣國では數千の戰車を有し數千の飛行機を所有し戦力に於て無論問題でなく今次の戰爭に於ても決して技術的に敵を壓倒凌駕する程度に優秀と認むるを得ず即ち佛國は綜合軍團を有し戰車隊は十ヶ師團を有し英國も非常に高度の機械化部隊を保有し其の速力も非常に速かにて聯合軍の空軍も殆んど優劣は認められぬのである。

然るに聯合軍が此の優秀裝備を有するも電撃作戰に最も必要なる一つの要素の缺除されて居ることを發見することが出来た即ち神速敢果なる決心と最高神聖なる義務心を發揮して直ちに其の行動に移すと云ふことが十分でなかつたようである。

例令ば「フランドル」戰場に於て獨軍が行ひたる遭遇戰に世界的に傳布せられたる所では怪奇なる特種の新兵器を用ひて敵を混暎せしめ其の瞬間に乘じ奇捷を博したるが如き感を有する人多きも決して斯の如き兵器でもなく魔術でもない。
要するに戰車の突進威力と歩、砲の緊密なる連繫協同一糸糾れず規畫的に其の任務に邁進し一刻

の猶豫なく遲疑逡巡せず各級指揮官の斷乎たる機宜に適する獨斷歩、戰、砲の完全なる協同、各隊の迅速果敢なる攻撃を執行せし以外何物もないのである。

此の點に於て獨逸軍は敵に優れてゐたと信ずる。

吾人として「マッキ」大佐の一片の從軍談は大に味ふべき點であるを自覺し得るのである。
之れを要するに前日より敵の攻撃を期待せる氣分が自然其の行動の果敢敏活を缺くに至りしには非ざるか。

又本戰鬪に於ける兩部隊の攻撃は如何にも消極的の感あり前述獨軍の電撃要素の條件を深思すれば如何に素質優良なる敵に對し光輝ある戰勝を獲得せんとせば優秀なる統帥と果斷なる實行者と相待ちて始めて其の成果を得ることを痛切に直感す殊に遭遇戰に於て然りとす。

第五章 「タンネンベルヒ」會戰（獨軍、露軍を各個撃破）

其の一 開戦前の狀況

一、西方戰場（獨佛方面）に於て將に大會戰の行はれんとする八月十九、二十日の兩日東普方面に於て前述研究せし如く「ゲンピンネン」附近の戰鬪を惹起し獨第八軍は善戰露第一軍を壊滅的の打撃を與へ其の戰果も有利に歸し獨軍大本營にも亦之等を報告したる直後突如露軍の無線電信を窃取したる

に少くも五軍團の優勢なる露國「ナレウ」軍(第二軍)が獨の右側背たる第二十軍團方面に前進し同日國境附近に達することを知り軍司令官「ブリットウイツツ」大將は堅確なる信念を缺き決心動搖し終に勝つべき戦さを斷念し「ワイクセル」河左岸地區に退却するに決し勇敢なる第一軍團長「フランソワ」將軍の強烈なる意見具申も一、二、幕僚の意見も拒絶して夫々退却の處置をなしたり。

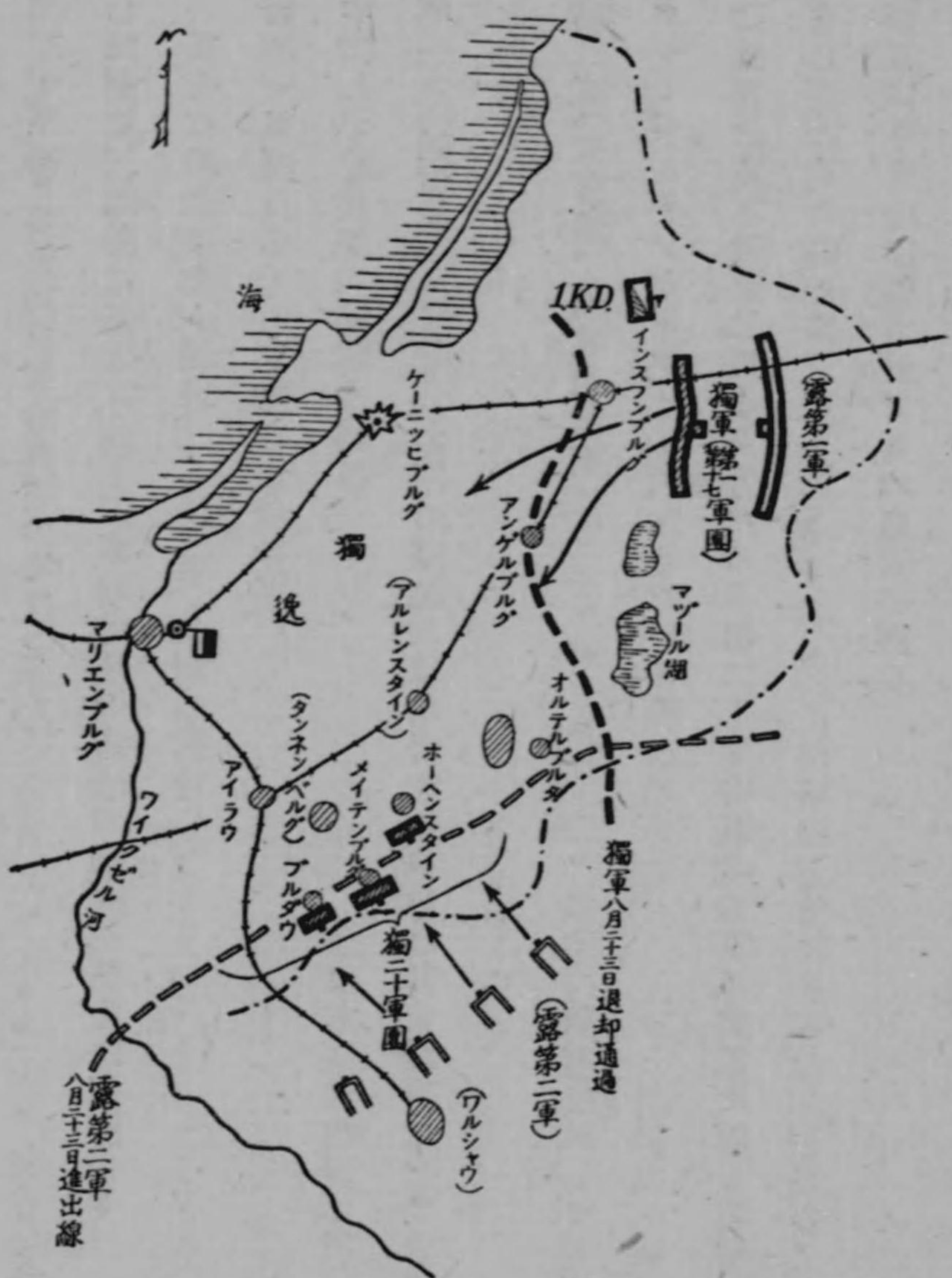
二、軍司令官の更迭と「ヒンデンブルグ」將軍の統帥

當時西方戰場に在りたる獨軍參謀總長「モルトゲ」將軍も此の軍司令官の退却に關する決心の電話報告を受け若干押問答の結果速かに軍司令官を更迭するの必要を痛感し終に在郷たりし「ヒンデンブルグ」大將を後任軍司令官に「ルウデンドルフ」少將を軍參謀長に任命し急遽東普獨軍の統帥に起用す元來「ヒ」大將は嘗て長く軍團長として東普に在職し其の地理に通ずる事況く開戦當時は退職中なるも戰略眼卓絶し機略又縱横意志頗る堅確なる將軍なり。

「ル」參謀長は戦前參謀本部作戰課長の要職に在り獨軍の樞機に與つて居つた開戦同時に第二軍參謀長として「リエージュ」要塞の急襲にも指導の任に當り今や東普の戦況非なるや簡拔せられて「ヒ」大將の參謀長として兩雄の活躍を開始するに至る。

三、「ヒ」軍司令官到着當時彼我兩軍の狀況(要圖參照)

「ヒ」大將は命令受領後三時間以内に出發直ちに東普「マリエンブルグ」の軍司令部に八月二十三日



達す當時の情況左の如し。

1、獨第二十軍團(後備兵及要塞部隊の増援を受く)は「ホーヘンスタイン」南方に於て露の第二軍と相對し豫備第三師團は鐵道に依り同軍團増援の爲め同軍團左翼後に到着せり。
 又第一軍團は鐵道に由り獨逸「アイラウ」に向ひ輸送中。

2、豫備第一軍團及第十七軍團は徒歩行軍にて「アングエルブルグ」「インステルブルグ」の線を通過退却中にして騎兵第一師團は露第一軍と「インステルブルグ」南方にて相對す。

3、露第一軍(四軍團、騎兵五師團)の獨第八軍に對する追撃は甚だ緩慢にして廿三日「アングラツブ」を通過せず。

4、露第二軍(五軍團、騎兵四師團)は「アルレンスタイン」に向ひ急進中にして廿三日「オルテルスブルグ」「ナイデンブルグ」「ゾルダウ」の線に達せり。

5、尙ほ獨軍は露軍戦死將校より獲たる書類により露軍は二軍の前進に依り協同の集中的攻撃の目的を有し尙ほ別に其の第三軍が「ワルシャウ」に待機の姿勢に在ることを知る。

四、「ヒ」新軍司令官の作戰方針と其の處置の概要

「ヒ」軍司令官は東普軍司令部に到着するや右の狀況を知り即刻獨軍の「ワイクセル」河畔に向ふ退却作戰を排除して中止し露の二軍が未だ分離しありて其の第二軍が「マツール」湖沼地帯の障礙地帯に

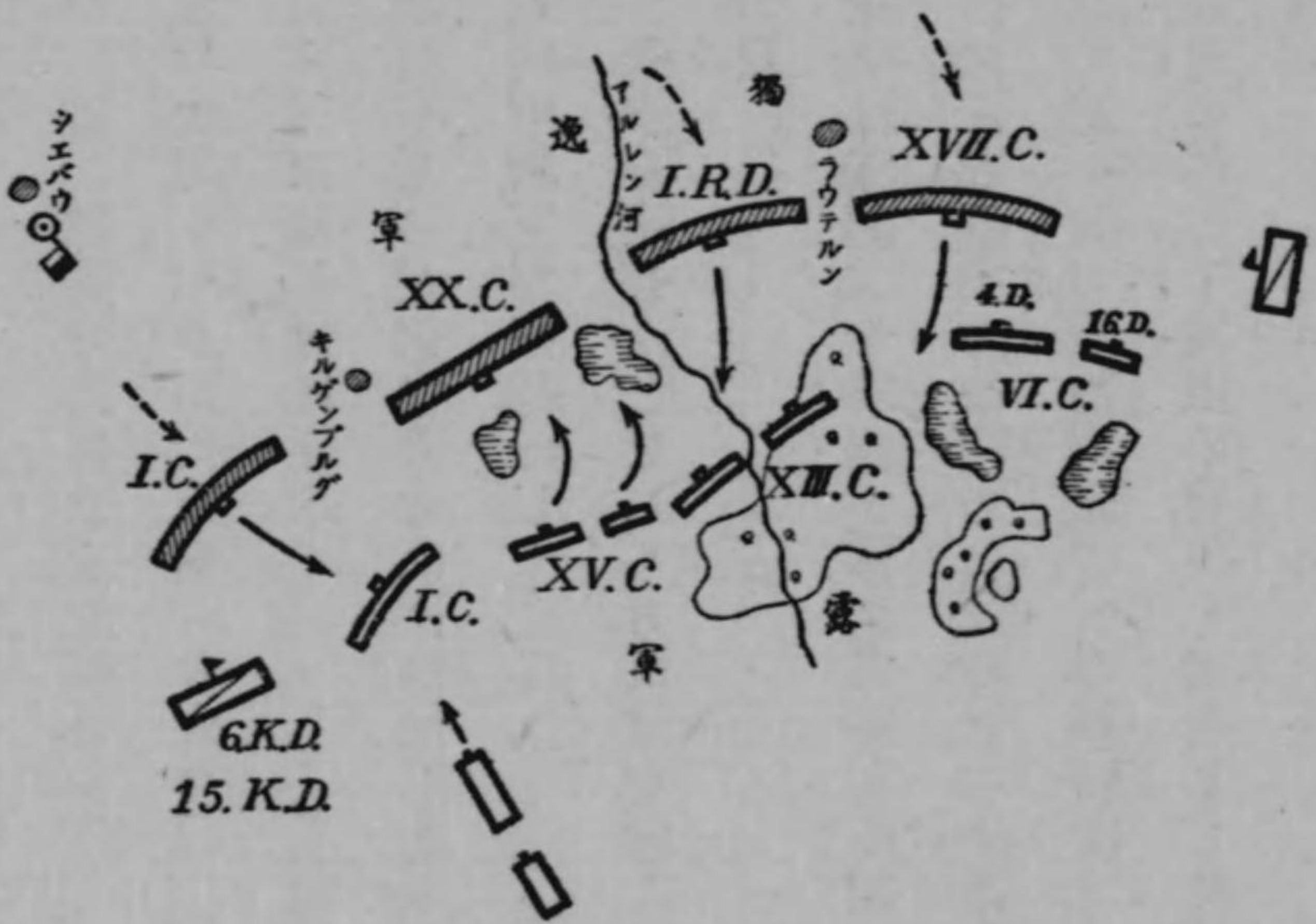
て困難しあるに乘じ先づ之を撃滅するに決し左の處置を神速に行ふ。

- 1、露第二軍と對戦しある獨第二十軍團の右翼より第一軍團(後備隊を増加す)を以て東方地區に向ひ攻撃前進。
- 2、第十七軍團、豫備第一軍團を以て二十軍團の左翼より西南に向ひ攻撃前進せしめ何れも露軍を包圍せしむ。

- 3、露の第一軍(レネンキャンプ軍)には僅かに騎兵第一師團のみを對峙せしめ要塞と協力して一時其の前進を拒支せしむ。
- 要するに大膽不敵未曾有の大作戰を斷行せしなり。

獨軍攻勢配備要圖

(朝日六十二月八)



其の二「タンネンベルヒ」會戰經過の概要

一、露軍の行動

露の「ナレウ」第二軍は東普に侵入「アルレンスタイン」「オステローデ」の線に向ひ前進せしも地形の障碍に依り廣き正面に分散して露軍の特性たる鈍重性を發揮しつゝ、徐々に前進獨第二十軍團は之に對抗しつゝ益々錯雜地内に之を牽制した。

露軍の右翼を掩護すべき第六軍團（歩大將「ブラゴウエシチエンスキ」の指揮する歩第四、第十六師團を主力とす）は騎兵師團を以て「バンゼン」附近に在りて森林地帯より進出する敵に對し警戒せしめ兩師團は概ね其の左側後方地區に位置しありしが北方に對する警戒は全く行はれざりしものにして此の日八時頃獨軍が突如として「ラウテルン」方向に現出し其の兵力少くも二軍團を下らざるを知り周章之が對策を講ぜんとせしも力及ばず遂に獨軍の壓倒的優勢なる兵力に依り全く包圍せらる。

二、獨軍の行動

「ヒ」軍司令官は獨第二十軍團が露第二軍を牽制しつゝ誘致しあるに乘じ露第一軍に對抗しつゝある獨第八軍の殆んど全主力を南方に移動せしめ僅かに騎兵一師團（後方には騎兵二旅團のみ）と要塞部隊のみを以て露軍兵力の約六分の一の寡弱にて之と對峙せしめ兵力移動の輸送は鐵道に依り露軍と正面に對抗せる第二十軍團の背後を通過して其の右翼に至らしめ露軍の左翼を衝かんとし第十七軍團及び豫備第一軍團を第二十軍團の左翼「ラウテルン」方面より急襲的に現出せしめ敵の虚に乘じ

「グバイ」湖西方地區より前進し露の右翼たる第六軍團を包圍殲滅せんと企圖す。

三、露軍行動の二

露軍の右翼師團たる第四師團長は獨軍「ラウテルン」方向より前進するの報を得しも之れ「ラスランブルグ」より西方に退却する獨主力軍の退却掩護の行動なりと判断し餘りに重視せず唯だ展開を準備し一部の警戒隊を派遣し掩護せしめしのみ。

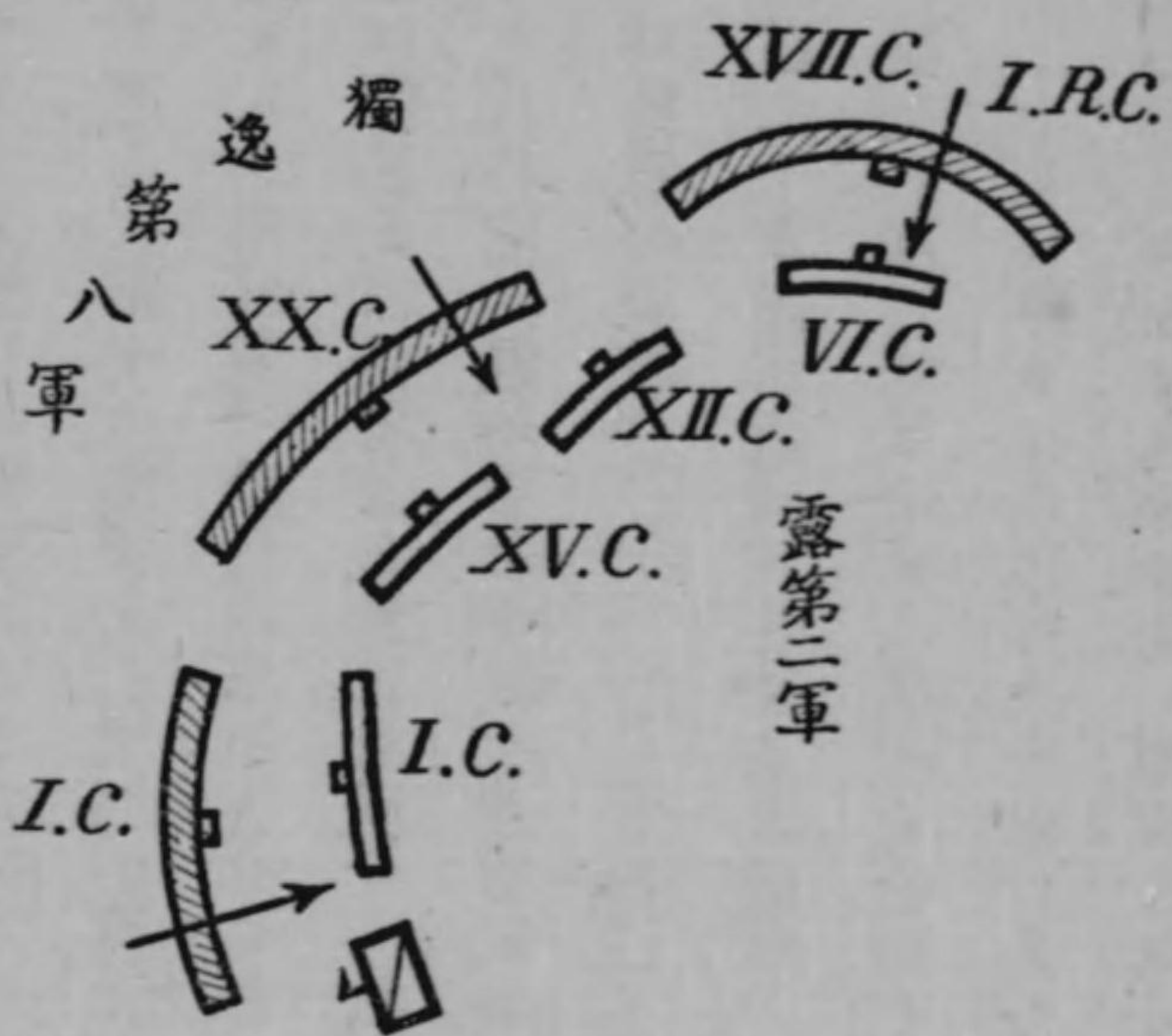
間もなく優勢なる獨軍現出し之に對峙せんとするも到底衆寡敵せず第六軍團長は第四師團の苦戦を知り直ちに第十六師團をして之が援助を命ぜしめ容易に徹底せず漸くにして薄暮「ラムザワ」附近に達せしが獨軍歩、騎兵の爲拒止せられて行動意の如くならず。

第四師團長は優勢なる敵に包圍せられ多大の損害を受け然かも第十六師團の援助を期し得ざるを知り十八時遂に退却を命ず近く後方に來著しありし輜重の爲退却は著しく混亂し行動頗る澁滯す。

四、獨露軍の決戦

獨第二十軍團及新に到着せる後備第一軍團は廣大なる正面に陣地を占領し優勢なる露軍の正面攻撃を拒支し専ら獨軍兩翼に進出を企圖しある友軍の進出を待ちて終日牽制に任ず。

翌二十七日露軍は更に猛攻を續けありしが露軍の左翼方面は獨一軍團の攻撃を受けて撃退せられ又其の右翼方面は獨豫備第一軍團及第十七軍團の包圍攻撃を受け同日夕より夜に至り其の兩翼全く危



險に陥る。

翌二十八日防勢に在りし獨第二十軍團も奮然として攻勢に轉じ茲に三面包圍の形勢となり露軍は益々戰況利あらず屢々逆襲に依り戰果を回復せんとせしも遂に翌二十九日には全軍囊中の鼠となり至る處混戰亂闘、指揮の統一なく各隊各個に死地を脱せんとし全く軍としての秩序を失ふ。

三十日には比較的容易なる方面より脱出せんとせしが完全に退路を遮断せられ森林、沼澤の錯雜地帯に於て露第二軍は大混亂に陥り軍司令官「サムノフ」外軍團長二名は戰死し二十三萬の兵力中死傷約十二萬五千を生じ殘餘は殆んど全部捕虜となり全軍名實共に殲滅した獨軍の死傷は一萬五千に過ぎず眞に赫々たる大勝を博した之れ畢竟統帥の卓絶と軍隊素質の優秀に依る。

之に反し露軍第二軍が窮況に陥り續いて全滅の悲況にある間第一軍は僅少なる獨軍に操縦せられ更に何等の活躍をせず無爲にして友軍を見殺しにしたるは無能無力と呼ぶるも辨疏の辭なからん。

巷説には「レネンカンブ」、「サムツノフ」の兩將間の嫉視反目の結果兩軍の協同不可能なりとは一片の私情と國家の勝敗とを混淆せし不理解和と謂はざるを得ず。

五、「ヒ」軍司令官は更に急轉直下眞に電光的に全力を擧げて凡ての輸送機關を利用し兵力移動を行ひ「レネンカンブ」の露第一軍に向ひ轉戦し九月九日—十一日に互る「アルレ」河畔の會戰に於て完全に露軍を撃破し死傷六萬を遺棄せしめ獨逸國境外に驅逐せり。

獨第八軍は「ヒ」司令官が一度び獨軍を統率するや一旦は「ワイクセル」河畔に退却して消極的に露軍を拒せんとせし悲況を起死回生の動機を索めて大膽極まる作戰に依り露第一、同第二軍を各個に撃破し全世界の軍事界に驚異の好戰例を示せり。

兩軍の作戰兵力

露軍五十萬、獨軍約十三萬五千、四分の一の劣勢である。

其の三 本會戰より得たる教訓と原則對照

一、「ヒ」軍司令官の統帥は作令綱領の各條項の殆んど況てに適合す。

1、戰捷の要訣

有形無形の各種戰闘要素を綜合して敵に優る威力を要點に集中發揮せしむるに在り(綱二)。

獨軍が今や隨意退却とは云へ優勢なる露軍の進攻に對し「ワイクセル」河畔に向ひ將に消極的防勢作戰に立たんとする一瞬時「ヒンデンブルグ」新軍司令官は斷乎として之を排除し露軍の不利なる狀況と其の素質を觀破して各個擊破を企圖し東普に在る獨軍の全力を機動的に要點たる「タンネンベルグ」附近に集中し僅々一小部隊を以て露の第一軍を牽制操縱せしめ其の間に乘じ電光石火に露軍を包圍殲滅せしめたる放膽極まる大作戰の成果は自軍の訓練精到にして必勝の信念堅きを確信して始めて獲得したる結果なり。

2、寡を以て衆敵を擊滅す。

蓋し勝敗の數は必ずしも兵力の多寡に依らず精練にして且攻撃精神に富める軍隊は克く寡を以て衆を破ることを得るものなり(綱六)。

當初東普に作戰せる兵力は露軍四十八萬五千の小銃と千六百二十門の火炮に對し獨軍は約十七萬五千の小銃と火炮七百八十二門にして概ね三分の一に近き劣勢である。

然るに「タンネンベルグ」附近の戰鬪に参加したる露第二軍は將兵十九萬一千人火炮六百十二門、獨軍は前述の十七萬餘の中より約十三萬火炮約七百で第八軍の殆んど全力を集め例令兵力劣弱なるも統帥の巧妙と攻撃精神充實せる軍隊とにより徹底的包圍殲滅戰の効果を獲得し急速なる轉戰に依り更に露第一軍を擊破し結局約三倍の敵に對し神速果敢なる攻勢に出で衆敵を擊破せり。

3、指揮官の信念と徳性は部下を奮起せしむ。

前司令官が戰況悲喜交々到る戰爭の心理を没却し然も堅確なる信念を缺き東獨逸を放棄せんとせしは結局理智の性能に敗けた結果たらざるべからず。

されば作令綱領十「指揮官は指揮の中樞にして又團結の核心なり。

故に常時熾烈なる責任觀念及鞏固なる意志を以て其の職責を遂行すると共に高邁なる徳性を備へ部下と苦樂を共に……」

前司令官と雲泥の差ある新司令官の勇斷と鞏固なる意志の賜で能く優勢なる敵に對し主動の攻勢を取りて之を遂行し八月二十八日には戰鬪最高度に達したが終に敵の抵抗を打破し三十日には全く敵は包圍壊滅して十三名の軍團長以下將官と九萬二千の將兵を捕虜とし砲三百五十門を鹵獲し第二軍司令官「サムソノフ」は戰場附近の森林中で自殺せしが如く殆んど露軍は壊滅せり。

4、神速なる機動作戰は勝を得る要道なり。

敵の意表に出で機を制するは勝を得るの道である。

旺盛なる企圖心と追隨を許さざる創意と神速なる機動を以て敵に臨み常に主動の位置に立ち全軍相戒めて嚴に我が軍の企圖を秘匿し…疾風迅雷敵をして之に對應するの策なからしむること(綱要九)。